

2012 年度 修士論文

エコツーリズムによる自然資源の保全と地域振興

—御蔵島のエコツーリズムを事例として—

Conservation of natural resources and community development by ecotourism

Case study of ecotourism in Mikurashima isle

藤井 一夫

Fujii, Kazuo

東京大学大学院新領域創成科学研究科

社会文化環境学専攻

## 目次

第1章 研究の背景と問題の所在	3
1.1. 背景	3
1.2. 問題の所在	3
第2章 エコツーリズムの誕生の経緯とマスツーリズム	4
2.1 マスツーリズムの誕生	4
2.2 マスツーリズムの弊害	4
2.3 エコツーリズム誕生の背景	5
2.4 エコツーリズムの定義	6
第3章 エコツーリズムに関する先行研究	7
3.1 日本型エコツーリズム	7
3.2 内発的発展論とエコツーリズム	8
第4章 エコツーリズムにおける資源	11
4.1 自然資源とはなにか	11
4.2 コモンズとはなにか	12
第5章 研究の目的	15
第6章 本研究の調査方法	15
第7章 事例地概要	15
7.1 地勢と気候	15
7.2 自然	16
7.3. 歴史と文化	17
7.4 三宅島との関係	23
7.5 交通	27
7.6 産業	27
7.7 観光	28
第8章 イルカウォッチングのあゆみ	31
8.1 1975年～1999年（イルカウォッチングの始まりから三宅島噴火の前年まで）	31
8.2 2000年～2012年（三宅島雄山の噴火後）	35
第9章 東京都版エコツーリズム	36
9.1 東京都版エコツーリズム導入の経緯	37
9.2 御蔵島のエコツーリズムの個別ルール	39
9.3 三宅島の東京都版エコツーリズムのガイド	39
9.4 イルカウォッチング船の隻数削減について	42
第10章 イルカのモニタリング	42
10.1 イルカの個体識別調査	43
第11章 御蔵島のエコツアーはどのように行われているのか	44

11.1 海域のエコツアー .....	44
11.2 陸域のエコツアー .....	47
第12章 御蔵島の変容 .....	60
12.1 産業構造の変化 .....	60
12.2 人口の増加 .....	61
12.3 島外出身者への意識 .....	63
第13章 御蔵島エコツーリズムの課題 .....	64
13.1 オーバーユースについて .....	64
13.2 観光客へのエコツーリズムの浸透 .....	65
第14章 御蔵島のエコツーリズムのまとめ .....	65
14.1 御蔵島のエコツーリズムはサステイナブル・ツーリズムといえるのか .....	65
14.2 持続可能性をささえる正当性 .....	66
第15章 比較事例としての飯能市のエコツーリズム .....	68
15.1 事例地（飯能市）の調査方法 .....	68
15.2 飯能市の概要 .....	68
15.3 エコツーリズム導入の経緯 .....	69
15.4 飯能市のエコツーリズムの取り組み .....	70
15.5 飯能市のエコツアーはどのように行われているのか .....	70
15.6 飯能市のエコツアーの参与観察 .....	73
15.7 飯能市のエコツーリズムの課題 .....	75
15.8 飯能市のエコツーリズムのまとめ .....	77
第16章 結び .....	78
参考文献 .....	82
謝辞 .....	86

## 第1章 研究の背景と問題の所在

### 1.1. 背景

国際観光関連事業収入は、世界観光機関（UNWTO）によれば、2011年に初めて1兆ドルを上回り、2010年に比べ収入額で3.8%、国際観光客数で4.6%増加した。世界旅行ツーリズム協議会（WTTC）によれば2011年の世界のGDPの2.8%を観光（旅行とツーリズム）が直接的に貢献しているとしている。観光は世界中の多くの国で重要な経済活動となっている。

日本においても、2003年1月に小泉純一郎首相の施政方針演説「観光立国」をめざすことが宣言され、2006年12月の「観光立国推進基本法」の成立、2007年6月の「観光立国推進基本計画」の閣議決定等、「観光立国の実現」が21世紀の日本の経済社会の発展のために不可欠な国家的課題とされている。（観光白書2012）

地域レベルでは国が観光立国宣言をする以前から、地域経済を支える産業基盤の形成、産業振興の一つの方策として観光は注目されていた。

世界および日本の各地で展開されてきた観光開発は基本的にはマスツーリズムの対応を主要な前提にしており、しかも観光開発の対象となる地域社会の外部の企業が開発主体になることが多く、外部の開発主体は、利潤追求を目的にして、地域資源の商品化をすることが一般的であり、その結果としてマスツーリズムの適した観光開発が成就されてきた。（石森2001）

### 1.2. 問題の所在

大規模な開発問題は必ずと言っていいほど「開発／保護」の図式で語られる。（鬼頭2009）

マスツーリズムに代表される観光開発においても、観光振興のための開発か、自然資源の保存かという二項対立図式で捉えられる。

二項対立図式は、どちらかを追求すると、もう一方を犠牲にせざるを得ないような、トレードオフの意味で使われてきた。（鬼頭2009）

経済学においては、社会の資源の選択をするとき資源の希少性のためにトレードオフは基本的に避けられないとされている。（スティグリッツ2006）

経済学では、トレードオフの問題は、「市場が、特定の条件がすべて満たされるならば、パレート最適<sup>1</sup>という資源配分が達成できる」とされている。（細田・横山2007）

しかし、二項対立図式の環境問題では、ゲームの理論で説明されるように、最適な状態にはならず、囚人のジレンマ<sup>2</sup>の状態に陥ってしまう。

---

<sup>1</sup> パレート最適 他の経済主体を現状より悪化させずに、どの経済主体も良化できない状態として定義され、効率的な資源配分が達成されている状態を意味する。（細田・横山2007）

<sup>2</sup> 囚人のジレンマでは、プレイヤーは支配戦略をもつ、そしてプレイヤーが支配戦略を選択するナッシュ均衡が存在する。しかしながらこのナッシュ均衡においては、彼らがもう一つの戦略を選択した場合よりも利得は低くなってしまふ。（スティグリッツ2006）

また、二項対立の図式で考えると開発は常の悪いもので、人間の手が加えられない自然がもっとも望ましいものとされがちである。力点を人間の生活でなくて自然に置く「自然環境主義」の立場で捉えれば、手つかずの自然を残すことが良いこととされるが、生活環境主義ではこれを「野外自然科学博物館構想」として批判している。(鳥越 1997)

佐藤 (2008) によれば、develop という言葉には、「物や人が大きく、強く、よくなる」という自動詞の意味と「最大の価値を出せるよう物や人に手を加える」という他動詞の意味があるが、第二次世界大戦後の政治や経済の文脈では後者の意味で使われることが多くなったという。

develop を自動詞の意味である「物や人が大きく、強く、よくなる」と捉えると開発は経済的な量的な豊かさだけでなく、生活の質の向上を含めることが出来る。セン (2011) は開発とは基本的に力を与える (エンパワー) プロセスであり、その力は、環境を破壊するのではなく、保護し、豊かにすることに用いることができると述べている。

## 第2章 エコツーリズムの誕生の経緯とマスツーリズム

### 2.1 マスツーリズムの誕生

純粋な意味での余暇と可処分から生じる観光 (ツーリズム) の歴史の初期段階は西欧においてもわが国においても貴族階級、富裕階級のものであった。(佐々木 2005)

J. アーリは最初のマスツーリズムは 19 世紀に英国の労働者階級に発生したものであると述べている。(J. アーリ 1995) 19 世紀に労働のパターンがより組織化され日常化されていくにつれて、余暇の合理化がすすめられ、長い休暇、一週間単位の休暇の達成がイングランド北部で始まり、鉄道に代表される交通の改良により、マスツーリズムの増大につながった。(J. アーリ 1995) しかし、現代と比較すれば、19 世紀のマスツーリズムは参加する人数は限られており、大衆が自由に観光を楽しむマスツーリズムは、第二次大戦終戦から十数年をへて、日本、アメリカ、西欧諸国のいわゆる先進諸国で出現した。経済的豊かさが国民全体に浸潤する、「大衆消費社会」の成立がマスツーリズムの発生の背景になった。(安村 2011)

### 2.2 マスツーリズムの弊害

特権階級の観光を大衆レベルで可能にしたマスツーリズムの出現は、観光の自由平等化に繋がる望ましいものに見えた。(佐々木 2005)

そして、マスツーリズムにおける「観光客の爆発的増大」によって、旅行業、交通業、宿泊業などの観光事業が急成長し、観光の経済効果が世界中に波及した。(安村 2011)

しかし、すべての地域が観光によって地域経済を活性化できるわけではなく、観光者に提供できる財・サービスが域外の企業や産業で生産されているならば、観光支出からの域外の漏出額は多くなり、域内の人々の所得増加には必ずしも結びつかず、域内住民の経済

厚生が増大へ結びつかない。(小沢 2011)

また、マスツーリズムにより希少な自然を資源とする観光地に多くの観光客が来れば貴重な自然は傷み、リゾート開発により、海岸線にリゾートマンションやホテルが建設されると、もともとの海岸線が崩れ、地域住民が育んできた景観が破壊されることになる。

地域の発展と再生を謳い文句にした大規模開発が地域の発展となるどころか、深刻な自然破壊をもたらしたことを古川・松田は本来自然を保護するために設けられた国立公園の志賀高原に建設された林道や広場がもたらした自然破壊や沖縄県のトロピカルリゾートの事例を挙げ、指摘している。(古川・松田 2003)

## 2.3 エコツーリズム誕生の背景

マスツーリズムの弊害が指摘される中で、新たなツーリズムの誕生が求められるようになってきた。

エコツーリズムがどのような形で提起され世界的な潮流として発展してきたかという点について確たる定説があるわけではないが、少なくとも 1980 年代初頭に至るまでにいくつかの論議があったと考えられる。(真板 2001) 吉田 (2004) は 1980 年代前半にエコツーリズムの概念が登場したと言われていることに異を唱えているが、真板 (2001) 海津 (2011) 森重 (2008) が述べているように 1980 年代はじめに提唱され、1990 年代にかけて各国で発展と実践が始まり発展を遂げたという考え方が主流となっている。

自然保護や環境保全の観点で概観すると、1960 年代を中心に進められた先進国での資源開発とそれによって発生した環境問題への反省、途上国での急激な開発による自然破壊進行への危惧、一方ではそれに対するすぐれた自然地域の保全や保護の在り方としてエコツーリズムの概念が徐々に形成されていった。(真板 2001)

1992 年の国連の国際環境開発会議 (リオデジャネイロ「地球サミット」) など、環境意識のグローバルな高まりによって、サステイナブル・ツーリズム (持続可能な観光) としてエコツーリズムが注目されるようになった。(敷田 2011)

持続可能とは、将来世代の需要と希望を満たす生物圏の潜在能力を維持するという意味で、1972 年にストックホルムで開かれた国連の人間環境会議で初めて登場した概念である。(山極 2003)

生態学者の鷲谷いづみ (2010) は、持続可能性は、階位的関係性によってとらえることが必要で、経済的な持続可能性は社会的な持続可能性に支えられ、社会的な持続可能性は、生態系の持続可能性、すなわち、自然環境と人間の良好な関係があって初めて確保することができるとみなされると述べている。また、鷲谷は、依存する側の経済・社会的なシステムは、自立的にはその状態を保つことができず、持続可能性のためには、まずは基盤的な生態的状态の持続可能性を確保することが必要だと指摘している。

関礼子 (2012) は、持続可能な環境、持続可能な観光という表現をするときに、もはや環境も観光も「このままでは持続可能ではない」ということが前提になっていると指摘し

ている。

観光開発による自然破壊などにより、観光と環境保全に対立が生じ、関（2012）が指摘しているように持続可能性が脅かされている状況で、生態系の持続可能性の確保につながる観光手段として、サステナブル・ツーリズム（持続可能な観光）は生まれた。

ただし、サステナブル・ツーリズムは、自然環境だけでなく都市観光やレジャー等の分野にも適用できる広い概念で、必ずしもエコツーリズムとイコールではない。（海津 2011）サステナブル・ツーリズム（持続可能な観光）の中核としてエコツーリズムが位置づけられる捉えるべきであろう。

観光史の側面から概観するとエコツーリズムはマスツーリズムに対するオルタナティブツーリズムと捉えることが出来る。1960 年代に完成した「マスツーリズム」に対する批判から生まれた動きであった。マスツーリズムでは観光客は、主体的に行動する機会が少なくなり、主体性のない観光に批判的なグループがオルタナティブツーリズムを提唱し、何らかの主張や理念を込めた観光を目指し、先住民文化を訪ねる旅や原生自然を求める旅が試みられていった。その中から環境に配慮した観光であるエコツーリズムが分化していった。（敷田 2010）

以上のように、エコツーリズムは自然環境の保全の観点から生まれたサステナブル・ツーリズムの面とマスツーリズムのオルタナティブの観点から生まれたオルタナティブツーリズムという両面から捉えることが出来る。そのためエコツーリズムには国際的に統一した定義はなく異なった立場からさまざまな定義が行われている。

## 2.4 エコツーリズムの定義

ビジネスである観光業を自然保護に活用しようという観点で WWF（世界自然保護基金）は次のようにエコツーリズムを定義している。（海津 2011）

「エコツーリズムとは、保護地域のための資金を生み出し、地域社会の雇用機会を創造し、環境教育を提供することによって、自然保護に貢献するような自然志向観光。」

（財）日本自然保護協会（1994）は自然保護の立場からエコツーリズムを以下のように定義をしている。

「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行」

国際エコツーリズム協会（T I E S）は、「自然環境を保全し、地元住民の福利の向上につながる責任ある旅行」と定義している。

1998 年にエコツーリズムの啓発や推進などを図る全国組織として設立された NPO 法人日本エコツーリズム協会では次のようにエコツーリズムを定義している。

「エコツーリズムとは、①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること ②観光によってそれらの資源が損なわれことがないよう、適切な管理に基づく

保護・保全をはかること ③地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源保護＋観光業の成立＋地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。」

日本では、2007年6月に「エコツーリズム推進法」が成立した。エコツーリズム推進法では2条において次のようにエコツーリズムを定義している。

「この法律においてエコツーリズムとは、観光旅行者が、自然観光資源について知識を有する者から案内又は助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動をいう。」

エコツーリズムの定義は、このようにさまざまであるが、「環境保全」「地域振興」「観光振興」の3つの理念は共通している。

ただし、定義をしている機関、団体のおかれている立場により3つの理念のうちどの理念を重視しているのかが、異なる。WWF（世界自然保護基金）、（財）日本自然保護協会などの自然保護団体は、「環境保全」すなわち自然保護が第一目的であり、それを達成するために「地域振興」と「観光振興」が位置づけられている。

国際エコツーリズム協会（TIES）、日本エコツーリズム協会などのエコツーリズムを推進する立場の団体は、観光が第一目的で、観光振興と地域振興を図る為に「環境保全」が位置づけられているといえる。

エコツーリズムは自然保護分野と旅行ビジネス界の動向が、収斂していったものであるため、エコツーリズムは単なる自然の中の旅もしくは自然志向型の旅行という概念を超えて自然保護上の義務ないしは使命を持った上での自然に触れ合う旅というものに昇華し、自然資源の合理的かつ持続可能な利用に、旅行活動を通じた地域社会への貢献という要素が加わったものと言うことも出来る。（薄木 2005）

### 第3章 エコツーリズムに関する先行研究

エコツーリズムには、さまざまな形態があり、模索されているが、その中でも、地域社会の持続可能性と自然資源の持続可能性の両方に関連した二つの重要と思われるエコツーリズムの形に関して簡単に紹介し、その概要と課題等について整理し、比較して見たい。

本研究では、サステイナブル・ツーリズムとしてのエコツーリズムに関わる二つタイプとして、真板昭夫、石森秀三が提案している独自のエコツーリズムについて先行研究として論ずることとする。

#### 3.1 日本型エコツーリズム

真板らは、里山などの2次的自然を観光資源とするエコツーリズムを「日本型エコツーリズム」と名付け、日本の資源特性にもとづいて定義されたエコツーリズムを提案してい



る。エコツーリズムを導入することで、保全・継承のための人的・資金的なリソースを獲得することによって、二次的自然の保全や地域が培ってきた生活文化の継承を成し遂げ、地域を活性化する取組にたいする日本型エコツーリズムの有効性が期待されると述べている。(真板 2004、2010 海津 2004) 真板は、エコツーリズムは、従来の観光産業のような、「お客様のニーズにどう応えるのか」「いかに多くの観光客を誘致できるか」という視点から資源を抽出し、それをどう見せていくのかという外発的な発展要因とは違い、地域にとって自慢できるものは何かを探し出し(真板は宝探しと呼んでいる)、経済的手段としつつも持続的に保全を図っていく観点に立つべきだと述べている。(真板 2011)

真板は、観光客は、エコツーリズムに参加することで地域資源の価値の理解者となり、地域に直接的、間接的の利益の還元をもたらし、資源の保護、保全の取り組みに協力するパートナーとしての役割を果たす必要があると述べている。(真板 2011)

### 3.1.2 日本型エコツーリズムの問題点

真板らが提案する日本型エコツーリズムでは、観光客のニーズは軽視され、地域住民の思いれが重視されることになる。エコツーリズムは観光の一形態であり、橋本(1999)が述べているように「観光」の目的は、異郷における「楽しみ」を購入することである。地域の宝が観光客にとって宝にならないと観光客は「楽しみ」を購入することはできない。観光客が、地域資源の価値(地域の宝)を理解するためには、優秀なインタプリターであるガイドが必要になるが、里山などの二次的自然を観光資源とするエコツーリズムのガイドは、地元住民のボランティアが多く、高いレベルのガイドの確保は難しい。

山下(2009)は、エコツーリズムとはクオリティツーリズム、言い換えれば量を稼がない分だけ、単価の高いツーリズムになると述べている。山下が述べているように、マスツーリズムと違い量を追求しないエコツーリズムは、観光客一人当たりの単価を上げなければ継続して事業を存続することが出来ない。ホスト側に力点を置く、日本型エコツーリズムにおいて単価の高いツーリズムは観光客に受け入れられることが出来るのだろうか。

大澤(2010)はエコツーリズムなどのニューツーリズムの問題点として、収益性の低さを指摘し、多くの地域が行政からの補助金の切れ目が事業の切れ目になると指摘している。

収益性が低いエコツーリズムを続けるには、地域住民のボランティア活動に依存することになり、過剰な負担を地域に強いることになる。

真板らが提案する日本型エコツーリズムを地域住民に対しての地域学習、環境教育の視点で捉えれば、有効な方策といえる。しかし、地域振興、観光振興の視点で捉えると、経済的な収益基盤が脆弱な日本型エコツーリズムを観光として持続していくのは難しい。

### 3.2 内発的發展論とエコツーリズム

内発的發展論を踏まえ、観光開発のあり方、特に地域の自律性が果たす役割について、日本で初めて体系的・包括的に議論がなされたのが、国立民族学博物館において 1999 年よ

り石森秀三を代表として立ち上げられた「自律的観光の総合的研究」である。(山村 2011)  
この研究の成果は、石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』としてまとめられ、石森は、自律的観光として独自のエコツーリズムの概念を次のように提案している。

「21 世紀には『維持可能な観光』の創出が世界的課題になるが、そのためには地域社会の人々や集団が固有の自然環境や文化遺産を持続的に活用することによって、地域主導による自律的な観光のあり方を創出する営みである『内発的観光開発 (endogenous tourism development)』が不可欠になる。」(石森 2001)

一方、観光開発の対象となる地域社会の外部の企業が開発主体となる観光開発は「外発的観光開発」と名付けている。(石森 2001)

石森は提起した内発的観光開発の概念はエコツーリズムの創出という課題に直接つながるものであると述べている。(石森 2011)

石森の提起した「内発的観光開発」という概念は、「内発的発展」に依拠した概念である。

「内発的発展」(endogenous development)という言葉は、1970 年代の中頃にスウェーデンのダグ・ハマーショルド財団が国連経済特別総会の際につくった報告において「もう一つの発展」という概念を提起したときに、その属性の一つとして「内発的」という言葉を「自力更生」と並んで用いたのが最初である。(西川 1989)

ダグ・ハマーショルド財団の報告書においては、発展の様式と生活の様式を「それぞれの地域の人間集団が、それぞれ固有の自然環境、文化遺産、男女の地域共同体成員の創造性に依拠し、他の地域の集団との交流をとおして、創出することができる」としている。ハマーショルド財団の定義は、地域が発展の単位であることを明確にし、地域の自然生態系との調和を強調し、地域の文化遺産(伝統)に基づく人々の創造性を重んじている。(鶴見 1989)

鶴見和子はハマーショルド財団の報告書が出たのと同時期に独自に「内発的発展論」の問題提起をした。(西川 1989)

鶴見(1989)は内発的発展を次のように定義した。

「内発的発展とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現するであろう社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上のすべての人々および集団が、衣・食・住・医療の基本的要求を充足し、それぞれの個人の人間としての可能性を十分に発現できる条件を創り出すことである。それは、現在の国内および国際間の格差を生み出す構造を、人々が協力して変革することを意味する。

そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿と、人々の暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々および集団が、固有の自然生態系に適合、文化遺産(伝統)に基づいて、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出する。」

社会学者の鶴見に対して経済学者の宮本憲一(1997)は内発的発展の原則を次のように

示している。

- (1) 地元の技術・産業・文化を土台にして、地域内の市場を主な対象として地域の住民が学習し経営するものである。
- (2) 環境保全の枠内で開発を考え、自然の保全や美しい街並みをつくるというアメニティを中心の目的とし、福祉や文化が向上するような地元住民の人権の確立を求める目的を持つ。
- (3) 産業開発を特定業種に限定せず、開発の付加価値があらゆる段階で地元へ帰属するような地域産業連関をはかる。
- (4) 住民参加の制度をつくり、自治体が住民の意思を体して、その計画にのるようにより資本や土地利用を規制しうる自治権を持つことである。

石森は鶴見の内発的发展論は政策論としての色彩が希薄であるのにたいして宮本らの経済学者のグループは日本における現実の地域開発への政策提言を意図した点は重要であると述べ、宮本の内発的发展論を高く評価している。

内発的観光開発は、「自律性」を前提にしているが、必ずしも外部の諸要素を排除するものではないとされ、地域社会の側がみずからの意思や判断で外部の諸要素を取り込み、それらと連携を図ることによって、よりよい成果を出す試みとされている。(石森 2011)

### 3.2.1 内発的観光開発の問題点

菊地(1999)は、エコツーリズムは基本的に外部の理論であり、地域住民は「取り込む」「組み入れる」対象であり、また外部からの研究者や自然保護団体が良心のもと、エコツーリズムの考え方を「啓蒙」「啓発」する対象と位置づけられると述べている。外部の理論として導入されたエコツーリズムは内発的観光開発の概念から創出されたと言えるのだろうか。

秋津・中田は内発的发展論における“内発”は、内部に位置する人々が案出したからこそ“内発”となり、この過程を普遍的な定式に一般化してしまうと外来的发展論を志向してしまうことになる」と指摘し、内発的发展論は論の構成上の問題として発展の発生のプロセスを一般化出来ないと述べている。(秋津・中田 2003)

多くの地域で行われているエコツーリズムは菊地が指摘したように外部から持ち込まれた理論であり、当該地域の内部から案出されたものでない。秋津・中田の言説に従えば、内部の人が案出したものでないエコツーリズムという理論は、内発的发展とは言えない。

宮本憲一が内発的发展モデルの事例として取り上げている愛知県の足助町の観光地づくりに関わった古池嘉和(2008)は、「内発的发展論は、地域の主体的なまちづくりの『運動論的』側面を捉えて評価したものである。」と述べている。

内発的観光開発の概念からエコツーリズムが創出されると捉えるより、内発的发展がなされた地域の「運動論的」な事例としてエコツーリズムを捉えるべきで、エコツーリズム

を内発的観光開発として普遍的な定式に一般化することは出来ない。

## 第4章 エコツーリズムにおける資源

エコツーリズムを観光だと考えると、地域と地域外の消費者が明確に認識できる資源を必要とする。(敷田 2010) 観光資源は、遺跡などの文化遺産やテーマパークなどの観光施設もあるが、エコツーリズムにおいては、自然資源が重要な観光資源となる。

### 4.1 自然資源とはなにか

自然界の事物は、更新性を持つ更新資源と再生産されることのない非更新資源に大まかに分類することができる。(秋道 2010)

秋道智彌 (2010) は、更新資源の特徴として次の5点を挙げている。

- ①無主性 もともと、自然界の資源はその利用権や所有者があらかじめ決められているものではない。しかし、誰のものでもない無主物は、絶対権力者などにより、特権的に私物化され、あるいは特定に勢力によりその所有・占有権を正当化される。
- ②文化相対主義的な特質 資源は人が利用することを通じて資源となる。ある地域で利用されていても、別の地域ではまったく利用されないことがあり、後者の場合は資源とはいえない。文化による相対的な価値づけとその異同点が資源の大きな特徴といえる。
- ③資源の価値や意義は歴史的に不変とはかぎらずに変化する。
- ④自然資源が市場原理になじまない意義をもつ点。自然資源が市場価値を持つことで過剰に利用されると、資源が枯渇し、資源生物を絶滅に導く危険性をはらんでいる。自然資源を持続的に利用するためには、市場原理となじまない別の原理を前提に考えるべきだろう。
- ⑤資源が象徴的価値を持つ点である。資源にたいする価値は、経済的な有用性だけにとどまらず、象徴性を含むことがある。(南太平洋一円では、マッコウクジラの歯を財貨として利用する文化がある)

佐藤仁 (2008) は、「資源」を「働きかけの対象となる可能性の束」と定義し、「資源」の下地には、そこに「見えないもの」を見出して、「その先にあるもの」へつなごうとする創造的な心の働きがあると述べている。佐藤が述べているように、自然を資源化するためには、はたらきかけが必要である。

また、秋道が述べているように人が利用することによって自然は資源化されるが、過剰に利用されると資源は枯渇し、資源生物が絶滅する危険性を孕んでいる。自然資源を持続的に利用するためには市場原理とはなじまない別の原理が求められる。

エコツーリズムで観光資源として資源化された自然は、地域住民を中心とした人々が、

共同で利用・管理している森・川・海などが中心となる。これらの資源を管理する制度および資源そのものの両方を含む意味でコモンズという言葉が使用されている。(井上 2004)

本研究では、エコツーリズムで対象とする資源をコモンズとしてとらえることにする。

## 4.2 コモンズとはなにか

### 4.2.1 コモンズの定義

民俗学者の菅豊はコモンズを多義な定義づけがされ、不明瞭さがぬぐえない概念とし、コモンズとは、「複数の主体が共的に使用し管理する資源や、その共的な管理・利用の制度」と捉えている。(菅 2008)

菅は、日本特有の「入会」という言葉でなく「コモンズ」という言葉をあえて使う意味づけを次のように述べている。(菅 2008)

①コモンズの用語を用いることにより、世界的な在地資源管理の文脈から、日本の慣習的土地資源所有や利用を捉えなおすことが出来る。日本の慣習的土地制度として閉じた議論がなされがちだった入会論をグローバルな視座で再検討出来る。

②その用語を使用することによって、所有から利用へとパラダイム・シフトを明確にできる。未だ強い権限としてあり続ける所有を乗り越える新しい視角をそれは提示してくれる。

③コモンズ論の視座は、多様な共的仕組みのあり方を検討可能な対象としてくれる。入会「権」、区画漁業「権」という「権」という言葉に内包されたリジットな存在は、その位置づけが法的にも社会的にも明確でわかりやすい。しかし、現実社会の共的なあり方の運用は、「～権」「～の権利」とまでいかない緩やかで不完全なものである。慣習の実体を取り扱ううえで、「～権の議論」だけでは窮屈なのであり、それを解き放つものとしてコモンズ論の視座は有益である。

④コモンズ論は、現代の社会の制度設計に、在地の慣習を敷衍させる視座を提供してくれる。現代コモンズ論では、そのゴールに現代の実社会への応用がより鮮明に見据えられている。

⑤コモンズという視座によって、個別具体的な共的事象の研究から、より抽象度の高い共的あり方の理論研究に移行することが容易になる。入会でいえば、コモンズ論においてただ「入会を」研究するだけでなく、入会に見られる個人の利己的・反社会的衝動の管理の仕方や、社会的取決めの特質は、入会の様相を理解させてくれるだけではなく、世界一般の共的な仕組みを新しく作り上げる局面において、重要な示唆を与えてくれる。

菅は、日本特有の「入会」でなく敢えて「コモンズ」という用語を使うことにより、グローバルな視座で入会論を再検討し、コモンズ論のゴールを、現代社会の制度設計に応用し、世界一般の共的な仕組みを新しく作り上げる局面において、示唆を与えられることに置いている。

井上真（2001）はコモンズを以下のように定義している。

「自然資源の共同管理制度、および共同管理の対象である資源そのもの」

井上は、資源の所有にこだわらず、実質的な管理（利用を含む）が共同で行われていることをコモンズである条件としている。

「共同管理」の主体としての管理規模は、地域社会レベル、地方政府レベル、国家レベル、地球レベルまでさまざまである。しかし、国家レベルや地方政府レベルの管理は集権的なりやすく、比較的平等な参加を伴う共同管理からズレてくるので、コモンズが成立しやすいのは、地域社会レベルということになる。（井上 2001）

地域社会で成立するコモンズは「ローカル・コモンズ」と呼ばれ、井上（2001）はそれを二つに分類することを提案している。

①利用について集団内である規律が定められ、利用に当たって種々の明示的あるいは暗黙の権利・義務関係が伴っている「タイトなローカル・コモンズ」制度

②利用規制が存在せず集団のメンバーならば比較的自由に利用できる「ルースなローカル・コモンズ」制度である。利用規制等は慣習法に組み込まれておらず、十全な共同管理なされているとは言い難い。（井上 2001）

宮内泰介（2001）によると世界的にみると井上が「タイトなコモンズ」に対置させた「ルースなコモンズ」の方が一般的であると思われる。「ルースなコモンズ」の言い方を言い換えると、「関わりや権利が重層的に入り混じったコモンズ」ということになる。重層的なコモンズにおいては、その利害の調整が難しく、また資源管理も難しいことが容易に予想される。

#### 4.2.2 資源の利用の正当性<sup>3</sup>

エコツーリズムでは、利用規制が明示的あるいは暗黙的に存在する「タイトなコモンズ」だけでなく、「ルースなコモンズ」も観光資源として利用する。

宮内が述べている「関わりや権利が重層的に入り混じったコモンズ」を観光資源としてエコツアーが組まれる。

地域の重層的なコモンズを観光資源として利用するときには、敷田麻美（2011）が述べているように、正当な利用者は誰かという問題や、どう使うのかということが常につきまとう。

コモンズがその機能を発揮するには、その存在自身の正当性を獲得することがきわめて重要である。これは当該住民の利用ばかりでなく、それに服する山野海川にとってもきわめて重要になる。（三俣、菅、井上 2010）

---

<sup>3</sup> legitimacy は日本語で正当性や正統性と訳される。正統性は、通時的な概念であり、「歴史」と不可分な概念とし、正当性は、通時、共時を問わず、多様な差異のなかから、何者かを選択するという行為に、その概念の根本がある。菅（2006）

それでは、コモンズの機能を発揮させる正当性とは、どのように定義されるものであるかを見ていくことにする。

福永真弓（2010）は、<sup>レジティマシー</sup>正統性を問う営みは、「共有できる正しさ」の基盤や、規範が依拠する基盤をどのように築いていくことができるのか、を問う実践にもなりうると述べ正統性を問う意味あいを指摘している。

菅（2005）は、<sup>レジティマシー</sup>「正当性とは、ある一個の人間や集団が、特定の事物に対して行う行為が、他者や社会から合法で妥当、真正で正統、合理的で説得力があるなどとされる状態にあることである。それは、あくまで人間の認知によって生じるものであって、不変で普遍に絶対的な規範として存在するものではない。」と定義している。菅は、新潟の大川というコモンズを題材に、<sup>レジティマシー</sup>正当性が支配者や統治機構という外部の変化に応じてフレキシブルに変化するものであると述べている。（菅 2005） また、片野鴨池の坂網獵漁師が、ラムサール条約で規定された“<sup>ワイズ ユース</sup>wise use”「適切な利用」（賢明な利用）という外来の新概念をもたらせることにより、坂網獵の<sup>レジティマシー</sup>正統性が認知された事例を挙げ、<sup>レジティマシー</sup>正統性は、企図するかせざるかを抜きにして、つねに組み換えられていくものとして考えるべきと述べている。（菅 2006）

<sup>レジティマシー</sup>正当性を構築する手段のひとつに「歴史」があるが、「歴史」とは「事実として現前に存在するものでなく、人々の共通する解釈としていかようにも創り上げることができるもの」と考えることが出来ると捉え、歴史を根拠によって形成された<sup>レジティマシー</sup>正当性も普遍的なものでなく、ドラスティックに変化するものだ、と菅は示している。（菅 2006）

宮内は、「<sup>レジティマシー</sup>レジティマシー（legitimacy. <sup>レジティマシー</sup>正統性／正当性）とは、ある環境について、誰がどんな価値のもとに、あるいはどんなしくみのもとに、かかわり、管理していくか、ということについて社会的認知・承認がなされた状態（あるいは、認知・承認の様態）を指している。」と定義している。（宮内 2006） 宮内は、環境に対するかかわりや権利が、所与のものでなく組み立てられたり、崩されたり、といったダイナミズムを持つことに注目している。

宮内は歴史性、当事者性などさまざまなものが、<sup>レジティマシー</sup>レジティマシーが獲得の要件になりうるが、時代や地域によって、どの要件が重視されるかは違ってくるし、いくつかの要件の組み合わせとなることも多いと述べている。（宮内 2006）

福永（2010）は<sup>レジティマシー</sup>正統性の概念を次のように定義している。

「正統性とは、諸個人が個人ではなしえない潜在可能性を発揮するためにつどった集団（＝社会）において、その秩序と統制を可能にする根拠であり、参加者にとっては自発的に服従する契機となるものである。その生成および承認は参加者相互のコミュニケーションにおいておこなわれる。正統性の最大の特徴は、常にその根拠と共に妥当性が参加者によって問われ続け、（能動的であるにせよ受動的であるにせよ）参加者たちによって承認されることを求められていることである。」

菅、宮内は、<sup>レジティマシー</sup>正統性/正当性（<sup>レジティマシー</sup>レジティマシー）は、不変で普遍的なものでなく、地域、時

代によってドラスティックに変化すると述べている。正統性/正当性（レジティマシー）の根拠を社会的な認知、承認と外から与えられるものにおいている。

それに対して、福永は、正統性の根拠を参加者相互のコミュニケーションによって生成、承認されるものとしている。福永は、正統性の根拠と妥当性は外から与えられるものではなく、集団の内部から生じるものとしている。福永も正統性は、不変で普遍的なものではないと捉えているが、その根拠と妥当性は、外からではなく、内から問われ続けるものだとしている。

## 第5章 研究の目的

本研究では、外部からの理論であるエコツーリズムが当該地域において、二項対立図式で語られがちな開発か自然保護かの問題を乗り越え、「環境保全」「地域振興」「観光振興」の三つの理念による持続可能な観光として実現できるのかを検証する。

また、エコツーリズムにおける観光資源として利用する権利のレジティマシーの獲得のプロセスを、事例を通してみていく。片野鴨池の坂網猟が、“wise use”<sup>ワイズ ユース</sup>という外来の新概念で正統性が認知されたように、当該地域において、エコツーリズムが自然資源を利用する権利のレジティマシー<sup>レジティマシー</sup>の獲得要件となるのかを検証していく。

研究対象地としては、2004 年に東京都が主体となった施策の東京都版エコツーリズムを小笠原に続いて導入し、島全体でエコツーリズムに取り組んでいる御蔵島を選定した。

## 第6章 本研究の調査方法

研究対象地調査は、2011 年 9 月から 2012 年 6 月までの期間で、御蔵島でのフィールド調査を 4 回、三宅島でのフィールド調査を 1 回行った。関係省庁や団体の調査、資料収集、三宅島・御蔵島に関する文献調査を行った。

フィールド調査は、研究対象地でのインタビュー調査とアンケート調査に加え、現地で行われたエコツアーに 6 回参加し、参与観察を行った。

インタビュー調査では、アポイントを取得したフォーマルインタビューとアポイントを取得しない、一対一での聞き取りを行った。また、参与観察をしながらの聞き取りを行った。アンケート調査は、あらかじめ配布したアンケートを回収するという方法を取らず、一対一で面談しながらアンケート調査を行った。

## 第7章 事例地概要

### 7.1 地勢と気候

御蔵島は、東京から南 200 km に位置し、面積 20.58 km<sup>2</sup>、周囲 16.4 km で、中央に御山（850



m) がありほぼ円形をなした鐘状の火山島で、北に三宅島、南に八丈島があり、八丈島との間には、黒潮の本流が流れている。

御山の周囲には高峰が重畳し、傾斜が強く、中央御山に源を発する平清水川、大島分川に2河川と東側に小河川を有する。また御山東南の中腹には周囲400mの火山湖「御代ヶ池」がある。(三宅支庁2011)

御蔵島は伊豆諸島では珍しく水の豊かな島であり、10本ほどの河川が存在し、大島分川から流れる豊かな水量によって伊豆諸島唯一の火力発電所が稼働している。また、緑の森が育んだ水を「御蔵の源水」として商品化している。

地質は、富士火山系に属する安山岩に溶岩の互層からなり、海岸沿いは海食による直立した断崖が多く、高さ400mにも及ぶ大海蝕崖もあり雄大な景観をなしている。

島の周囲には、砂浜はなく、大小の丸い礫の堆積した浜となっている。

集落は島の北側比較的平坦な里地区一カ所に集中している。南側南郷地区の島内では比較的平坦な地区であるが、現在は居住地にはなっていない。

気候は海洋性で、三宅島と御蔵島の間には黒潮の支流が流れていることもあり、夏は涼しく、冬は暖かい。年間の総降水量は東京の約2.1倍あり、年間を通して風が強い。また、伊豆諸島は台風の通過経路にあたるため、台風が直撃すると被害が大きい。(御蔵島村2006)



図 7.1 事例地の位置



写真 7.1 御蔵島の外観(筆者撮影)

出典：御蔵島村役場ホームページ <http://www.mikurasima.jp/>

## 7.2 自然

御蔵島は、断崖とそれに続く急傾斜の火山島でありながら数千年にわたり噴火の歴史がなく、御山山頂を除き全島がスダジイやタブノキ、ホルトノキ等を中心とする照葉樹林か

らなり、特にスダジイについては幹周が3 mを超える巨樹が島内各所に点在しており、南郷地区には日本一のスダジイ（幹周 13.79m）が生育している。かつてはニオイエビネの自生地としても知られていたが、乱獲などの影響で自生のものはほとんど見られない。（御蔵島村 2006）

#### 7.2.1 ニオイエビネ

ニオイエビネは、快い香りを放つランの一種で、伊豆諸島の他の島にもあるが、他のエビネと交配していない純粋種は御蔵島のものだけと言われている<sup>4</sup>。島の山の至るところにあったが、今は乱獲されて、野生のものはほとんど見られなくなってしまった。エビネブームのころは、ニオイエビネは1株3,000円で売れた。10株で30,000円、100株で300,000円になった。花が咲いて珍しい株は1株数十万円単位で取引され、一番高価なものは、1株150万円で東京のデパートに出品されていた。昔は、島外の間人が、里の反対側の南郷から上陸し、テントで寝泊まりしながら、ニオイエビネを盗掘する事件もあった<sup>5</sup>。

#### 7.2.2. 御蔵島の生態系

御蔵島は伊豆諸島の島には、珍しく常に水量のある川をもっており、川の水は森の養分を海に運ぶ。これがプランクトンの発生や小魚などを育て、さらにそれを餌にする大きな魚や、定住するイルカを育む豊かな海になっていて、島の周囲の海域は、ミナミハンドウイルカの生育・繁殖地になっている。魚の多い海はオオミズナギドリなどの海鳥も養い、御蔵島はオオミズナギドリ（島ではカツオドリと呼ばれている）の国内最大の集団繁殖地で、スダジイの森のいたるところに巣穴がつくられている。森の地中に巣をつくるこの鳥の毎日の糞は、海の養分を陸に還元し、森を育てている。（御蔵島 2006）

#### 7.2.3. オオミズナギドリ

オオミズナギドリは、嘴のさきから尾の先までの長さが約50センチ、翼を広げると約1.2メートルの比較的大きなミズナギドリで繁殖地は日本近海に限られており、北海道南部から沖縄県南部の沿岸に限られている。御蔵島はそのなかで最大の集団繁殖地で1980年の報告によれば175万～300万羽とされ、全国の過半数の個体が生息すると言われている。（戸田 2005）

### 7.3. 歴史と文化

1956年の東京都教育委員会「文化財総合調査」の調査により、御蔵島のゾウ遺跡から土器を含む住居址が発見され、土器編年上から縄文文化早期に属することが分かった。御蔵島のゾウ遺跡では、竪穴住居をつくって定住生活をしていたことが明らかにされ、引き続い

---

<sup>4</sup> 御蔵島村（2005）

<sup>5</sup> K. I さん（60代男性）2012年3月29日インタビュー

て縄文時代前期はもとより中期の初めごろまで、人々の生活が続いていたことが判明した。このことにより、縄文時代早期の人々が、黒潮の一部をつつき、御蔵島まで渡航していたことが明確になった。しかし、縄文時代中期になると、人びとは、黒潮本流をのりきって、御蔵島に達することができなかったらしい。御蔵島では縄文中期初頭の人々がわずかに土器片を残すのみで、その後は縄文・弥生時代を通じて久しい間無人島になったてしまっている。(橋口 1986)

御蔵島に居住していた人々の様子を窺える遺跡は現段階では発掘されていないが、文献史料上では七世紀以降に日本が律令国家としての枠組みを整えていく中で御蔵島をはじめとする伊豆諸島にかんする記載がみられるようになる<sup>6</sup>。

### 7.3.1 島のくらしを支えてきたしきたり

#### ツゲと扶持米制度

御蔵島に自生するツゲは、江戸時代から島の暮らしを支えてきた重要な特産物であった。

ツゲは成長するのに大変時間がかかり、植栽してから伐採まで 100 年かかる。島の生活を支えるツゲはその量に限りがあるため島の人たちは計画的に伐りだす工夫をした。村落と耕作地以外の島の面積の 7 割が村有地とされ、ツゲ苗を植えるなどをして枯渇を防いだ。さらに防風防潮に重要な森は神山として残し、伐採出来ないようにして、ツゲ山の資源保護につとめてきた。(栗本 2005)

御蔵島は江戸時代から村が中心となって自生ツゲ材の売却による収入を生活物資の購入にあてる扶持米制度で生計を立ててきた。(御蔵島村 2006)

御蔵島の扶持米制度は天然植生のツゲ材を財源として居住者人頭割に日用品物資を配給した共同機構で、享保一寛政以後明治中期に至るまで島内自給における経済的基盤をなしていた。扶持米の財源としてのツゲ材は天然植生に限られ、公私の別なく土地所有とは無関係であった。ツゲ伐採は春秋 2 期を原則とし、その期間は、名主の指揮により男女共に 15 才—60 才の部落民はすべてこれに従事した。男は伐採根切り及び運搬、女は運搬、老人子供は道づくりを主としていた。労働過程に対してはそれぞれ費用が支払われたが、扶持米は、作業代償とは関係なく、広く配分された。

明治中期以後、換金収入の拡大、及び天然植生林の私有権が重視されるに至り、形式上 1939 年に消滅した。(大村 1953)

郷土史家の K. I さん<sup>7</sup>は、「江戸時代に他の島より食料事情が悪いにも拘わらず、御蔵島では、少ないながらも島民に食料を行きわたらせた扶持米制度によって、餓死者を出さなかった点においては、扶持米制度は評価できる」と言っていた。また、K. I さんは、「扶持米制度が御蔵島の発展を遅らせた要因になった。働かなくても生活物資が分けてもらえる制度では、一生懸命働かない男性も出てくる。御蔵島は明治時代になるときに扶持米制

<sup>6</sup> 東京都御蔵島村 (2006) p. 210

<sup>7</sup> 2012 年 3 月 29 日にインタビュー

度をやめるべきだった。」とも言っていた。

### 100 人超えたら油断をするな

御蔵島では江戸時代中期以前に飢饉や台風によって船が途絶した時に、島の天然の食材だけで自活できるようにと「100 人超えたら油断をするな」の言葉で戒め、長男以外の結婚分家を許さない人口抑制策をとってきた。冷蔵庫などがない貯蔵の困難な時代には、天然の食材を決して絶やすことがないよう収穫の時期の解禁日「口開け」を決め、その日以外の収穫を禁じてきた。ルールを破ったものには、厳しい罰則が下された。(栗本 2005)

### 28 軒衆

御蔵島には、島に永住してきた伝統的な家を単位とした二十八軒衆という集団がある。28 軒の内訳は栗本 (10 軒)、広瀬 (9 軒)、徳山 (6 軒)、西川 (2 軒)、小林 (もと徳山姓、1 軒) で、同姓間での本家分家関係はなく、各家は平等の立場であったという。(小島 2007)

かつては、これらの家では長男しか結婚できないとされており、戸数と人口の制限が厳格に守られてきた<sup>8</sup>。

### インキョ・サンキョ

御蔵島では長男が結婚すると両親は同じ屋敷内にあるインキョに長男以外の子供を連れて隠居した。長男夫婦の息子が結婚すると、また両親と同じように家を明け渡して別居した。長寿の家系が多い御蔵島では 3 世代が同じ屋敷内のそれぞれ住居(祖父母のサンキョ、父母のインキョ、息子夫婦の本家)を持っていることも珍しくなかった。

次男以下は婿養子になるか嫁入りする以外には、終生結婚することなくインキョで人生を送った。(栗本 2005)

### 7.3.2 オオミズナギドリ (カツオドリ) とのかかわり

オオミズナギドリは、島ではカツオドリと呼ばれ、島民にとって長い間特別な存在だった。島の稲根神社に祭られた江戸時代中期の作とみられる一枚の物産絵馬には、陰しい島の斜面で植林をする島民の姿と、ウミガメを採る島民、オオミズナギドリ猟をする島民の三つの生業が描かれている<sup>9</sup>。

肉が手に入らない島では、オオミズナギドリは貴重な食糧であった。塩漬けにして保存し、さまざまな料理にした。島の人にオオミズナギドリの味を聞いてみたが、美味しいという人もいたし、あまり美味くない人もいたが、懐かしい味であることは共通していた。オオミズナギドリは、今は食べることは出来ないが、御蔵島の人だけでなく、三宅島の人に

---

<sup>8</sup> 御蔵島村 (2006) p1199

<sup>9</sup> 御蔵島村 (2006) p. 97

とても懐かしい味であるらしい<sup>10</sup>。第二次世界大戦までは、オオミズナギドリは伊豆諸島全域で数多く繁殖していたが、大島、三宅島、八丈島などでは繁殖鳥が激減、あるいは絶滅した。

御蔵島では、かつては年間3～4万羽を捕獲していたが生息個体数が減少することはなかった。(戸田 2005)

オオミズナギドリの採取の歴史は、島に人が暮らし始めた中世にさかのぼり一千年におよぶ。島民が培った採取規則は、不文律として島民社会で守られた。オオミズナギドリの繁殖集団を持続的に利用するのに的を射たものだった<sup>11</sup>。

オオミズナギドリの採取規則は次の通りになっていた。

- (1) 巣内にある卵、巣立ち後のヒナ、亜成鳥、成鳥は、一切、禁猟とする。
- (2) 採取対象は巣穴にいるヒナのみ。
- (3) その年のヒナの成鳥の良否を知るために行う直前の発育調査を除くと、繁殖期を通じて、巣穴に干渉して、みだりに繁殖を妨害しない。
- (4) 採取期間は11月初旬の毎年2日間(1960年以前は3日間)のみ。

この規則を破ると厳しい罰が与えられた。そのためオオミズナギドリは、過剰に利用されることなかった。

### オオミズナギドリの駆除

オオミズナギドリの食糧利用を前提とした捕獲は1978年に2700羽を捕獲したのを最後に禁止され、島内の山林保全を前提とした駆除作業に切り替えられた。現在は11月の初旬の一日だけオオミズナギドリの駆除が一定数だけ許可されており、獲った鳥は地面に埋めることになっている。

2011年は11月3日が駆除日とされ、720羽の捕獲が許可され、40名が駆除の申請をした。私有している森林の木を守るために、土地の所有者が申請することになっている。

オオミズナギドリの捕獲が現在どのように行われているのかを知るためにインタビューを行った。

2011年11月2日に観光協会に行くと協会のK. Kさんがオオミズナギドリ捕獲日の11月3日は集落の中からそわそわしている感じが伝わってくると言っていた。11月3日の午前中に村に出てみたが、人通りがほとんどなく、そわそわ感を感じ取ることは出来なかった。

里から1時間ほど登った村道でオオミズナギドリ捕獲のため山に入っていこうとしているA<sup>12</sup>さんに話を聞くことが出来た。Aさんの話では今年はオオミズナギドリの駆除に参加

---

<sup>10</sup> Hさん 2011年9月28日インタビュー

<sup>11</sup> 御蔵島村(2006) pp. 97-98

<sup>12</sup> Aさん(60代男性) 2011年11月3日インタビュー

しているのは10数名くらいで、大半が50～60代だという。駆除の申請はしたが、参加しない人が多いらしい。今年は、オオミズナギドリの数が少ないらしい。里の反対側の南郷に行ってきた、巣の中を探してみたがあまりオオミズナギドリが見つからなかったのだからここにきたと言っていた。

申請上は所有地の木を守る為の害鳥駆除であるが、駆除に参加している人たちは自分の土地、他人の土地に関係なくオオミズナギドリを捕獲するために島中の森に入っている。島でそのことに対して苦情を言う人はいない。

Aさんの話では、昔は、山の中にオオミズナギドリの捕獲のなわばりがあり、年長者が麓に近い場所で若い人たちは山深い場所であった。許可なく年長者の場所で捕獲したら制裁を受けたという。また、昔は村で決めた許可日以外の日に捕獲をすると重い制裁を受けたという。

Aさんのワゴン車の中にはすでに捕獲したオオミズナギドリ10羽が籠の中に入っていた。籠の中の鳥は絞められていたが毛は筆られていなかった。昔から捕獲していたのは巣立つ直前のひな鳥で、大きさ重さとも親鳥と同じで、脂がのっていて一番おいしいとされていた。駆除が目的のため捕獲した鳥は、その場で絞めて地面に埋めることになっているのだが、実際に埋めている人はいないらしい。捕獲した鳥は家に持ち帰り、毛を筆って塩漬けにして冷蔵庫で保管している。Aさんの家の冷蔵庫には3年分のオオミズナギドリの塩漬けが貯蔵されていて、オオミズナギドリの味を懐かしがる三宅島の人にあげたりもしている。

Aさんは、環境省は島でオオミズナギドリを埋めないで食べていることを知っているので、将来的にはオオミズナギドリの害鳥駆除という口実の捕獲が許可されなくなるのではないかと心配していた。

K. I<sup>13</sup>さんは、「カツオドリ（オオミズナギドリ）の捕獲が、害鳥駆除ということになっていて、建前上、捕獲した鳥は土に埋めることになっているが、本当に埋めてはいけいなら、誰も捕獲したりはしない。御蔵島では昔から、ルールをつくってカツオドリと共生してきた。我々は、カツオドリから少し分けてもらっているという気持ちで、捕獲を行っている。カツオドリは御蔵島の食文化だ。」と言っていた。

### 6.3.3 オオミズナギドリ（カツオドリ）とのかかわりの変化

#### マイナー・サブシステムとしてのオオミズナギドリ（カツオドリ）の捕獲

文化人類学者の松井健（1998）は、「集団にとって最重要とされる生業活動の蔭にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない生業活動」をマイナー・サブシステムと呼び、「これらの生業活動は、たとえ消滅したしたところで、その集団にとっても、当の生計を共にする単位世帯にとつ

---

<sup>13</sup> 2012年5月30日インタビュー60代男性

ても、たいした経済的影響を及ぼさないにもかかわらず、当事者によって意外なほどの情熱によって継承されてきたものである。」と述べている。

松井が述べている経済的な意味はほとんどないが、当事者の意外なほどの情熱は、オオミズナギドリの駆除においてもみられた。オオミズナギドリの駆除は、松井が述べている「マイナー・サブシステム」にあたるものと言える。

島にひとが暮らし始めた中世から戦前まではオオミズナギドリは、島の人にとって重要なタンパク源であった。かつては、オオミズナギドリ猟は、江戸時代の絵馬にも書かれていた主要なサブシステム（生業）であった。しかし、野鳥保護の名のもとに、食糧としての捕獲が禁止され、1年で特定の日だけ害鳥駆除の目的で捕獲が許可されるようになり、主要なサブシステムとしてのオオミズナギドリ猟は消滅した。

駆除日にオオミズナギドリの捕獲に参加していたAさんや他の参加者は、早朝から島中を車で走り回り、情報交換をしながらオオミズナギドリを探していた。Aさんたちが行っていた、オオミズナギドリの駆除は、遊びの要素がかなり含まれているように感じられた。

松井（2004）は、簡単な道具や仕掛けを用いるだけで、直接的に自然と向き合うことになるマイナー・サブシステムは、必ずしも多くの人に参加するものにはならず、「趣味のある」「好きな」人たちのものになっていくが、マイナー・サブシステムの意味が無視できるように小さくなってしまいうけでないと述べている。さらに松井は、マイナー・サブシステムは、人びとに、機械化や現金経済への適応などの過程のなかで失ってしまった、自然との直接的なつきあいの楽しさをもう一度教えると述べている。

御蔵島の主要産業が、林業から観光業に移行し、多くの島民は以前より山に入る機会は減少した。毎年、特定の日に行われるオオミズナギドリの駆除という「マイナー・サブシステム」を通して御蔵島の人々は、山に入り、自分が毎年オオミズナギドリを捕獲している場所を繰り返し訪れる。そのことによりオオミズナギドリの数の変化とともに御蔵島の自然の変化を肌で感じることができる。オオミズナギドリの駆除によってモニタリングが出来ているともいえる。定量的に数を把握だけでなく、定性的に変化を把握する人文社会科学的モニタリング（鬼頭 2007）が行われていると言える。

しかし、杓子定規に駆除した鳥は土に埋めることを強制したら、K. I さんが言っていたように誰もオオミズナギドリの駆除に参加しなくなってしまうだろう。結果として、毎年定期的に行われたモニタリングが行われなくなり、森の状況変化が把握できなくなってしまう。御蔵島の自然資源の管理のためには、今のかたちでのオオミズナギドリの駆除を続けることが必要なのではないか。それは、食文化を守るだけでなく、自然を持続的に利用してきた島民の知恵を継承することにもつながる。



写真 7.2 オオミズナギドリの捕獲のための道具（筆者撮影）

## 7.4 三宅島との関係

御蔵島の北方 18 km に三宅島は位置し、御蔵島は物資や交通などで三宅島に依存して来た。2000 年に三宅島雄山が噴火するまでは御蔵島には毎日東京から大型船は就航されず、三宅島との連絡船が島の暮らしを支えてきた。三宅島との関係は過去から現在に至るまで密接である。

### 7.4.1 三宅島による間接的支配

1603 年に徳川家康の江戸幕府は開かれ、1607 年に御蔵島を含む伊豆諸島は幕府の直轄領となった。伊豆諸島を所管する代官所が直接指令を伝えたのは、大島・新島・三宅島・八丈島のみであり、利島・神津島は新島、御蔵島は三宅島、青ヶ島は八丈島を経由してその指令が伝えられた。島の側から書付を代官所に提出するときは、逆の伝達経路がとられた<sup>14</sup>。

御蔵島と三宅島間の交通は非常の不便であったため、伝達には時間がかかり、御蔵島、三宅島双方にとって負担になっていた。その負担を軽くするために、三宅島から御蔵島の印鑑を前もって預かって、事務処理の代行を行いたいという申し出が御蔵島にあった。事務処理の負担は軽くなるが、御蔵島にとっては、三宅島に印鑑を預けることで、御蔵島の承諾を取らずに、三宅島が勝手に御蔵島の意味であるとして書付などに印鑑を捺してしまう危惧があった。

危惧はあったが、三宅島に事務処理を代行してもらった方が、御蔵島の為にもなるということで、貞享 3 年（1686 年）、御蔵島は三宅島に島の印鑑を渡してしまった<sup>15</sup>。

1686 年 御蔵島の印鑑を三宅島の役人に預けたことがきっかけになって、御蔵島は事実上三宅島の支配下に置かれた。三宅島から 1729 年に独立するまでの 43 年間に御山の 5 合

<sup>14</sup> 御蔵島村（2006）p. 276

<sup>15</sup> 御蔵島村（2006）p. 273



目以下のツゲは三宅島の役人の意思でほとんど伐りだされてしまったと言われている。

三宅島の支配からの独立を成し遂げるためには流人が大きく関わっていた。1714 年江戸大奥でおきた「江島生島事件」を仲介したとして、御殿医奥山交竹院が御蔵島に流罪になった。神主の加藤蔵人は交竹院に御蔵島の独立を相談し、交竹院が御殿医の桂川甫筑を紹介した。甫筑の老中へのとりなしにより、1729 年に三宅島より独立することができた。三人は三宝神として三宝神社に祭られている。御蔵島は自分たちの船を持ち自らツゲを江戸まで運び、中間搾取を排除することに成功した。

三宅島を介した間接支配ではなく、代官による直接支配、「直勤」になったが、御蔵島は孤島であるため、緊急時には三宅島に頼らざるをえない事情もあり友好関係は続けなければならなかったと同時に三宅島の介入には、絶えずさらされていた<sup>16</sup>。

『御蔵島島史』(2006) では三宅島の間接支配及び独立の経緯について、30 ページを割いて説明がされているが、『三宅島史』(1982) では 1 ページ、『三宅島の歴史と民俗』(1983) では 1 ページしか記述がない。筆者が三宅島で、三宅島生まれの人(4 名)に江戸時代の一時期、三宅島が御蔵島を支配していたことについて聞いてみたが、ほとんどの人が知らなかった<sup>17</sup>。一方、御蔵島では、三宅島からの独立の恩人が神社に祭られていることもあり、御蔵島生まれの人は、皆そのことを知っていた。支配されていた御蔵島と支配していた三宅島との間に歴史認識の違いがあることが感じられた。

#### 7.4.2 御蔵島と三宅島の比較

御蔵島は三宅島と比較すると面積で約 1/3、人口で約 1/8 しかない。御蔵島の農産物、漁獲生産高は噴火後、大きく落ち込んでいる三宅島の生産高の 1/10 にも満たない規模である。

観光に関しても、御蔵島は観光人口で三宅島の 1/5、宿泊施設の軒数で 1/3 以下、宿泊収容人数で 1/5 以下である。

行政面では都の出先機関は御蔵島も含め三宅支庁であり、警察も三宅島警察署の管轄である。また、運転免許証の更新や、パスポートの申請などの手続き、銀行口座の開設なども御蔵島の人は、三宅島に行っておこなった。

御蔵島の公共工事の大半は、三宅島の建設会社が請負っている。(御蔵島に出張所がある)

三宅島は御蔵島から見ると、面積、人口だけでなく、産業面、生活面においても大きな存在である。

---

<sup>16</sup> 御蔵島村 (2006) pp. 277-298

<sup>17</sup> 2012 年 5 月 29, 30 日インタビュー

			三宅島	御蔵島	対三宅島比
面積		km <sup>2</sup>	55.5	20.58	37%
人口	2010年	人	2,674	350	13%
農地	2010年度	ha	99	16	16%
農産物生産額	2009年度	千円	523,982	33,016	6%
林産物生産	2010年度	千円	0	6,804	
漁獲生産額	2010年	千円	160,555	11,933	7%
漁船登録隻数	2010年	隻	130	35	27%
3トン超		隻	47	0	0%
1～3トン		隻	45	21	47%
1トン未満		隻	38	14	37%
観光人口	2010年度	人	38,942	8,271	21%
ホテル旅館軒数		軒	13	0	0%
定員		人	491	0	0%
民宿軒数		軒	36	10	28%
定員		人	781	160	20%
キャンプ場軒数		軒	1	5	500%
定員		人	30	20	67%
合計軒数		軒	51	15	29%
合計定員		人	1,307	180	14%

三宅島支庁管内概要（2011）データより筆者作成

表 7.1 三宅島と御蔵島の比較

#### 7.4.3. 三宅島との紛争

三宅島と御蔵島の漁協は、第2種共同漁業の漁業権をもっていて、三宅島地先距岸 1,500m、御蔵島村地先距岸 1000m の両漁場で、たかべ、いそ魚の漁業をする権利が両島の漁協にはある。

両漁協の組合員が、御蔵島の周辺海域で操業するため、過去には、紛争も生じた<sup>18</sup>。1988 年、御蔵島中いそ付近でタカベ刺し網漁をしていた御蔵島島民と三宅島漁船との間で、競合状態となった。御蔵島漁協は、乱獲防止と地元漁業の振興を図る立場から、大型・近代化している三宅島漁船の操業を漁業利用の協定を相互に締結するまで操業しないように求めた。紛争が生じてから御蔵島漁協と三宅島漁協で話し合いが行われた。三宅支庁の調整・指導もあり、三宅島漁船の操業自粛水域を定め、御蔵島地先優先件を地元魚民に認めることで、三宅島漁協と御蔵島漁協の間で合意が成立した。

1993 年ごろから、御蔵島では今まで漁に向かっていた漁船の多くは、ウォッチャー船としてイルカガイド業に取り組むようになって本来の漁業の水揚げは減少した。

三宅島と御蔵島との競合はイルカウォッチングをめぐっても生じ、協定をめぐってしばしば交渉がもたれ、幾度か協定が交わされた。

三宅島には 3 トン超の大きな漁船が 47 隻あり、御蔵島の海域で漁をしているが、御蔵島には 3 トン超の漁船がないため、三宅島まで漁に行くことはほとんどない。<sup>19</sup>

<sup>18</sup> 御蔵島（2006）pp. 957-958

<sup>19</sup> K. I さん 60 代男性 2012 年 5 月 31 日インタビュー

三宅島の漁師にとっては、協定が交わされていても、御蔵島の周辺海域も自分たちの漁場であり、自分たちの海という思いはあるだろう。

#### 7.4.4 三宅島への思い

三宅島は御蔵島の人から見ると、20 キロメートルも離れていない近くて大きな存在である。また、歴史的な背景、近年のイルカウォッチングでの関係性により三宅島への思いは複雑である。

三宅島への思いを御蔵島の人に語ってもらった。

御蔵島には教育機関は中学校までしかなかったため、噴火前は、三宅高校に行く人も多かった。三宅島滞在中は、良い思い出ではなかったと言っている人も多い。

「三宅高校時代、親戚の家に下宿して、村の祭りの神輿を担いでいたら、よそ者が、なぜ神輿を担いでいると怒られたうえに殴られた。」「三宅島には5つ部落があり、序列がある。6番目が御蔵島だと三宅の人に言われた」<sup>20</sup>

「職場の人から『三宅島の高校に行っていたときは、名前と呼ばれなくて、オイ御蔵と呼ばれていた』という話をたびたび聞かされ、60代ぐらいの人は、今でも三宅島に対して複雑な思いを抱いていると思った。」<sup>21</sup>

「三宅島の船（ウォッチング船）はルールを守らないのがいる。自分の客（イルカウォッチングで海に入っている）を忘れて帰ろうとした船までいた。」<sup>22</sup>

「三宅島の船は、船頭の他に1名ガイドが1名乗船しているが、船頭は船の操船をしているだけでウォッチング客を見ていない。昨年（2011年）三宅島の船のウォッチング客が溺れているのに気付かず船が帰ってしまい、御蔵島の船が救助した。御蔵の船は船頭一人の時もウォッチング客を見ている。」<sup>23</sup>

「三宅島の船が御蔵島の海でイルカウォッチングが出来るのは、御蔵島が噴火の復興支援として許可しているからだ。」<sup>24</sup>

「噴火はあったが三宅島が伊豆諸島のなかで一番豊かな島だと思う。昔は、部落ごとでいがみあっていたが、今の若い人たちはそんなことは無いらしい。三宅島の道路を見ると他の島の人にはびっくりする。あまりに立派な道路で、沿道には花まで植わっている。」<sup>25</sup>

---

<sup>20</sup> K. I さん 60 代男性 2012 年 3 月 30 日インタビュー

<sup>21</sup> K. T さん 30 代男性 2012 年 5 月 31 日インタビュー

<sup>22</sup> H. S さん 60 代男性 2011 年 9 月 30 日インタビュー

<sup>23</sup> H. N さん 60 代男性 2012 年 5 月 30 日インタビュー

<sup>24</sup> K. I さん 60 代男性 2012 年 5 月 31 日インタビュー

<sup>25</sup> K. I さん 60 代男性 2012 年 5 月 31 日インタビュー

御蔵島の里から北を見ると三宅島の大きな姿が目に入ってくる。三宅島が噴火した時は、御蔵島に定点観測のカメラが備えられていた。御蔵島の人は三宅島の噴煙を毎日見ていた。「噴火の時は本当に三宅の人は気の毒だと思っていた。」<sup>26</sup>

## 7.5 交通

1993 年から東京愛ランドシャトルのヘリ・コミューターが御蔵島と八丈島・三宅島を結ぶようになり、定期船以外の交通アクセス手段ができた。また、2004 年から東海汽船の大型客船が週 7 便就航するようになった。ただし、御蔵島には大型船が着岸できる栈橋が一か所しかなく海が荒れることが多いので毎日客船が確実に着岸できるわけではない。2010 年の客船の就航率は 63%で、特に海が時化る冬場は就航率が低くなる。2010 年 12 月の客船の就航率は 39%、2011 年 1 月の就航率は 16%であった。12 月、1 月には週 1 回の貨物便も欠航することがあり、2 週間食糧や物資が届かないこともある。ヘリ・コミューターは 2010 年の年間就航率は 96%でほぼ毎日就航しているが、運賃は定期船よりかなり高くなっている。

## 7.6 産業

大正 12 年に島嶼町村制が御蔵島にも施行され、一島で御蔵島村になり、2011 年 1 月 1 日現在の世帯数は 175 世帯、人口は 317 名である。(2011 広報みくら 252 号)

特産品として知られるツゲやハチジョウグワについては、天然物に加えて古くから植林がなされ、今なお御蔵島の主要産品となっている。

御山の山頂より急峻な山峡が海岸線まで続く複雑な地形の御蔵島では、農地が少ない。農家戸数は 41 戸で一戸当たりの平均耕地面積は 37 アールと極めて零細で、ほとんどの農家が他産業に従事しながら営農する副業農家である。



写真 7.3 御蔵島の畑（筆者撮影）

<sup>26</sup> Hさん 60 代男性 2011 年 11 月 2 日インタビュー

御蔵島ではタカベ、イセエビの刺し網漁業、カツオ、マグロなどのひき縄漁業、キンメダイ、メダイなどの底魚一本釣り漁業などが行われており、2009 年の漁獲量は約 8 トンであった。三宅島の 2005～2009 年の漁獲量の年平均 173 トン（噴火前の 1999 年は 513 トン）と比べると御蔵島の漁獲量は 1/20 以下である。漁業も農業と同じように、兼業が多く専業者は少ない。

## 7.7 観光

御蔵島は交通条件が未整備だったため島側から観光を積極的にすすめる発想はほとんどなかった。（御蔵島村 2006） 東京都商工会議所が 1959 年に作成した『三宅島・御蔵島の観光事情』には、観光資源として史蹟、オオミズナギドリ、ツゲ、桑等の自然林などの自然的景観が挙げられていた。当時、イルカは観光資源として認識されていなかった。

御蔵島は 1960 年代後半から始まった離島ブームの時代にも伊豆諸島の他島と違い観光客が増えることはなかった。宿泊施設も 1979 年に島内に民宿が誕生するまで 2 軒しかなかった。

近年、離島ブームが終わり、伊豆諸島全体の観光客は大きく減少しているが、御蔵島は観光客が増加している。宿泊施設も増え、現在は村営の御蔵荘、8 軒の民宿、5 棟のバンガローがある。

御蔵島が伊豆諸島の他島と違い観光客が増加した要因はイルカが観光資源となったからである。

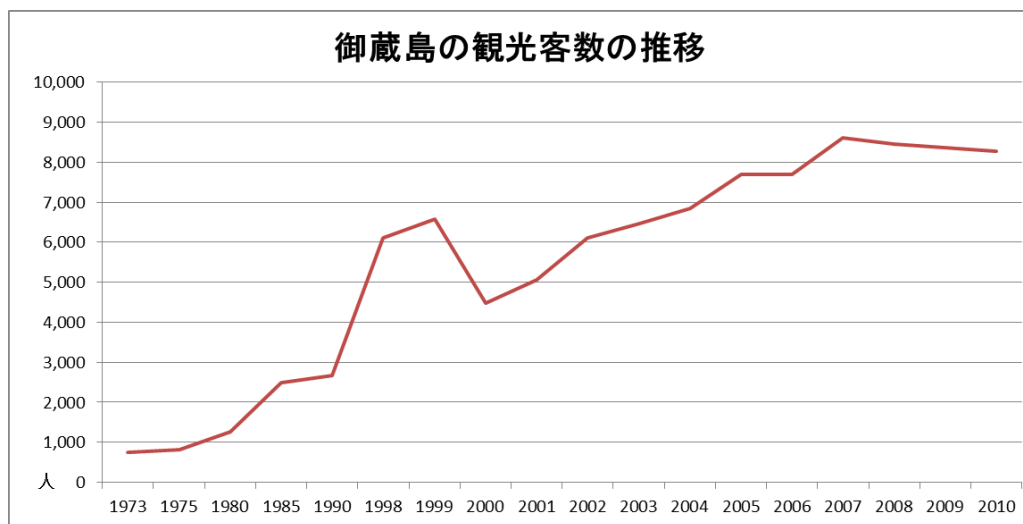


図 7.2 御蔵島の観光客の推移

出展：東京都産業労働局観光部「平成 22 年伊豆諸島・小笠原諸島観光客入込実態報告書」より作成

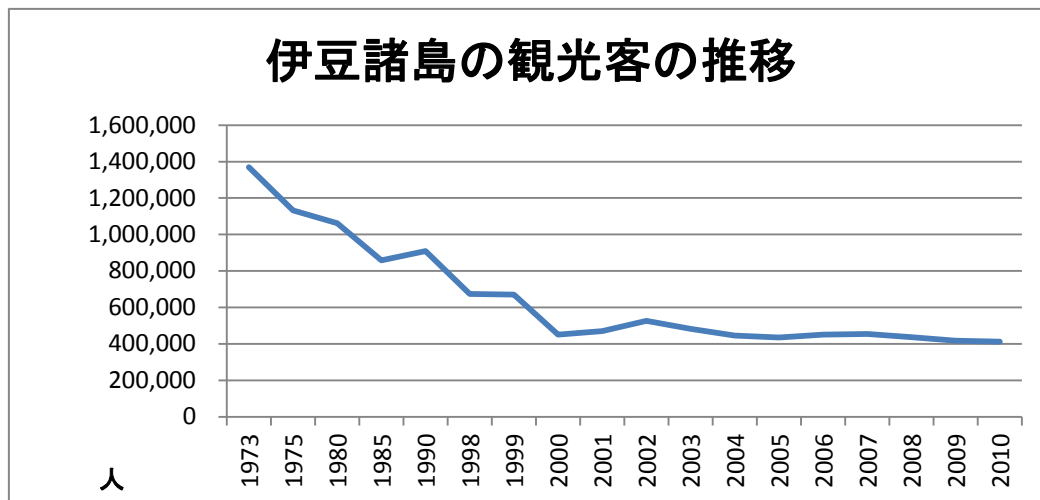


図 7. 3 伊豆諸島の観光客の推移

出展：東京都産業労働局観光部「平成 22 年伊豆諸島・小笠原諸島観光客入込実態報告書」より作成

#### 7.7.1 観光資源になった御蔵島のイルカ

御蔵島の沿岸には有史以前から、ミナミハンドウイルカが棲みついていた。島にある縄文時代の遺跡からもイルカの骨がでてくることから、少なくともここ数千年は、御蔵島のまわりにイルカが居座ってきた。(川端 2010)

#### イルカ棲息の要因

なぜ伊豆諸島の他の島ではなくイルカが御蔵島の海域に棲みついたのだろうか。科学的に確実な根拠は示されていないが、以下の推測がされている。

##### ① イルカにとって安全な場所

海洋生態学者のジャック T・モイヤー（1997）によれば、世界中の多くの場所で、イルカは漁師と隣り合わせに存在し、いくつかの地域では、協同でイルカの狩りを行ったっている。クジラを長い間殺してきた日本は、歴史的に見て、イルカに友好的な国ではない。イルカにとって幸いなことに、御蔵島の周囲の高く急峻な侵食された崖は、何百年のあいだ、イルカを人間の妨害からも守ってきた。また、急峻な崖に囲まれて、海に出ることが難しかったため、御蔵島の人々は伝統的な漁労民ではない。イルカは長い間人間の干渉を受けてこなかった。

##### ② 餌が豊富

黒潮による温暖な水温と森のさまざまな養分を含んだ水が滝となって海に落ちることで小魚やプランクトンを育てている。（菱井 2005）



写真 7. 4 森の養分が滝となって海に注がれる（筆者撮影）

モイヤーが指摘しているように御蔵島の人々は伝統的な漁労民ではなかった。八丈島や神津島のようにイルカを害獣して扱うことも無かったし、伊豆半島や房総半島のようにイルカを食べる食文化もなかった。

イルカウォッチングが始まるまで、イルカは、島の人にとって特別な存在でなく、海に行けばいる大型の動物でしかなかった。御蔵島の伝説や古い歌のなかにも、カツオドリ（オオミズナギドリ）のことは出てきてもイルカのイの字も出てこない。（川端 2010）

しかし、御蔵島の周辺海域で行われるようになったイルカウォッチングによってイルカを取り巻く状況は一変した。イルカウォッチングとして、イルカが利用されることによって、今まで資源として利用されていなかったイルカが島の最大の観光資源になり、島の産業、生活まで変えてしまう存在になったのである。

佐藤（2008）が述べているように御蔵島周辺海域に棲息するミナミハンドウンドウイルカは、イルカウォッチングというはたらきかけによって資源となった。





写真 7.5 御蔵島周辺海域のミナミハンドウイルカ（筆者撮影）

## 第 8 章 イルカウォッチングのあゆみ

### 8.1 1975 年～1999 年（イルカウォッチングの始まりから三宅島噴火の前年まで）

#### 8.1.1 イルカウォッチングのはじまり

モイヤー（1997）によれば、三宅島のダイビングショップが、御蔵島のイルカを使ってイルカウォッチングを 1975 年の夏に数回主催したのが、御蔵島の周辺海域におけるイルカウォッチングの嚆矢とされている。1980 年代には三宅島から毎夏数多くのダイビングツアーが行われた。当時はイルカウォッチングのマナーになんのルールも示されていなかったため、スキューバダイビングによるイルカウォッチングが行われていただけでなく、ダイバーの方へイルカを近づかせるために、トビウオやサンマがイルカに与えられたりもした。（モイヤー1997）

#### 8.1.2 イルカブームの到来

1993 年以降御蔵島のイルカがテレビ、ダイビング雑誌等で度々取り上げられるようになり、三宅島、静岡県からもウォッチングボートがやってくるようになり、御蔵島において



イルカブームが到来した<sup>27</sup>。

川端裕人（2010）によればそれまで国内でドルフィンスイムが出来るのは小笠原だけと相場はきまっていたが、外洋でイルカを探し、その群れの様子を見て水に入るという形だから、必ずしもイルカと出会う確率は高くない。一方御蔵島では、船を出して水に入れば、ほぼ確実にイルカとの遭遇が実現する。小笠原と比べれば本州から近くてイルカと泳ぐ確率がほぼ 100%の御蔵島は、観光地として魅力十分で、島を訪れる人は飛躍的に増えた。

### 8.1.3 「御蔵島イルカ協会」の設立<sup>28</sup>

1993 年 11 月 7 日、イルカブームを背景に棲息するイルカとの共生を目的とする「御蔵島イルカ協会」が設立された。今後、イルカ協会は、イルカの生態を調査研究し、イルカと人間の共生を図りながら、イルカの生息環境を維持するための事業を進めていくこととなった。

当面の活動は、イルカウォッチングのルール周知と遵守を訴えることであった。

### 8.1.4 バンドウイルカ研究会の設置

1994 年 4 月、御蔵島イルカ協会とアイサーチ・ジャパンのボランティアによって構成された御蔵島バンドウイルカ研究会が設置された。

この研究会は、協力団体からの助成金とボランティアの調査協力によって運営され、1994 年 7 月からバンドウイルカの調査研究が開始された。1994 年 12 月の基礎調査の中間報告では、①バンドウイルカは定住性が高い、②御蔵島の沿岸は繁殖海域と思われる、ことが報告された。

バンドウイルカ研究会は、毎年夏の二ヵ月間（7 月中旬～9 月中旬）、常時 8 名から 10 名のスタッフが入れ替わり島に滞在し、民家を一軒借りて共同生活しながら調査をつづけ、スタッフはすべてボランティアで構成されていた。

1994 年から続けられてきたバンドウイルカの調査は、2003 年、10 年目を迎え終了となった。

### 8.1.5 イルカウォッチングに関する協定<sup>29</sup>

#### 三宅島観光協会との協定

1994 年 4 月に三宅島支庁・産業商工係から 2 名、三宅島観光協会から 2 名、三宅島遊渡船組合より 4 名の計 8 名が来島し、御蔵島イルカ協会との間でイルカウォッチングに関する話し合いがもたれ、同年 6 月 28 日、御蔵島イルカ協会は三宅島観光協会との間でイルカウォッチングに関する協定を取り交わした。

<sup>27</sup> 東京都御蔵島村（2006）p. 978

<sup>28</sup> 東京都御蔵島村（2006）p. 978

<sup>29</sup> 同上 pp. 980-985

協定書の主な条項は以下の通りであった。

- ・御蔵島・三宅島のウォッチング船は御蔵島イルカ協会の定めるウォッチングルールを守り、違反するウォッチング船に注意を呼びかけるものとする。(第一条)
- ・イルカウォッチングをする船は、船にのせるウォッチャーを10人までとする。(第2条)
- ・イルカウォッチングのために来る船の数は十隻までとし、ウォッチングの時間帯を午前・午後にわけ、それぞれ五隻までとする。(第三条)
- ・この協定は1994年12月31日まで有効とする

### 協定の更新

1995年4月に前年12月に有効期限切れになっていた協定を更新した。従前の協定では「一日最大10隻(1隻ウォッチャー10人)、1日100人で」あったが「4月29日～5月7日、8月10～18日、及び土・日曜日のみ一日最大20隻、一隻15人(船頭、インストラクターを含む)の1日300人」とした。

### 他県船のダイバーの事故

1998年8月、イルカウォッチングにきた女性ダイバーが乗ってきた西伊豆町の遊漁船のスクリューに巻き込まれ、左足を切断する大事故が発生した。このため御蔵島と三宅島では1998年4月に取り決めた「御蔵・三宅との協議による暫定マニュアル」の遵守の確認をした。

他県船にたいして規制力が及ばないルール作りの難しさが浮き彫りにされた。

### 1998年の協定書

1998年12月、御蔵島村漁業協同組合は、他県船イルカウォッチングの事故の教訓をふまえて、御蔵島周辺海域におけるイルカウォッチングの安全と秩序の維持を図るためマニュアル遵守の協定書を三宅島漁業協同組合と締結した。この協定書は後の東京都知事と結んだ「御蔵島における自然環境保全促進地域の適正な利用に関する協定書」の個別ルールに準用された。

協定書により三宅島からのドルフィンスイムを伴うウォッチング船はピーク時(ゴールデンウィーク、盆、7月1日～9月30日の土曜日、日曜日及び祭日)は25隻以内(午前13隻・午後12隻)に増やされ、ドルフィンスイムを伴わない船上ウォッチング(冬期は実施しない)は5隻以内(午前3隻以内、午後2隻以内)と決められた。

三宅島からのイルカウォッチング船は最大一日30隻とされた。

### ウォッチングの規則

1999年4月、「御蔵島海域のイルカウォッチングの実施に関する協定書によるウォッチングの規則」が施行された。この規則は御蔵島船主・遊漁船会は遊渡船部に施行された。

御蔵島イルカ協会の定めるマニュアルの遵守、操業時間 1 回 3 時間以内、ウォッチング料金大人 1 回 6,500 円、ウォッチャー一人につき 300 円の協力金を御蔵島漁協の納めること、御蔵島からのウォッチング船は一日最大 20 隻までとする、などが義務付けられた。

#### 8.1.6 協定締結まえのイルカウォッチングの状況

1994 年の協定締結前のイルカウォッチングの状況について、御蔵島でウォッチング船の船頭を当時からしていた人にインタビューをした。

H さん（2012 年 5 月 30 日インタビュー）

昔はみんなめっちゃくちゃしていた。一日に 5 回出船してこともあった。船頭は朝から夕方まで、船に乗りっぱなしで休む暇もなかった。

三宅島から御蔵島までは、45 分ぐらいかかるが、三宅の船のなかには、日に 4 回も出船していた船がいた。

船に乗せる人数の制限もなかったので三宅島の大きい船だと 30 人も乗せてきていた。一日に何回も多く多くの客を乗せていると、イルカウォッチングを終わった客を全て船に乗せたといい、まだ海にいる客を忘れそうになったこともあった。

一つのイルカの群れをたくさんの船が取り囲み多い時は 200 人ぐらいのウォッチャーが集まっていた。

三宅島の船は、以前は一人一回 2 万円～2 万 5 千円のお金を取っていて 1 シーズンで 2000 万円以上稼いだ船もいたらしい。

御蔵島イルカウォッチングを一人 1 回 6,500 円で行うという広告をダイビング雑誌に出したら三宅島の人に怒られた。

今は、客がウォッチングできるのは、一日 2 回までとなっているが、昔は規制がなかったので一日に何回もウォッチングに出かける客がいた。

K さん（2012 年 5 月 30 日インタビュー）

三宅島のウォッチング船の船頭に御蔵島がウォッチング船の数を制限しようとしているのは、馬鹿だ、イルカが御蔵島にいる間に、稼げるだけ稼げばいいと言われた。

御蔵島と三宅島で協定が結ばれる前は、資源化されたイルカの過剰利用が行われていた。このままでは、資源化されたイルカにストレスを与えてしまい、御蔵島周辺海域から他の海域に移動してしまう恐れもあった。まさに「コモンズの悲劇」になるところだった。

自主ルールがつくられ、御蔵島と三宅島との間で協定書が締結されたが、御蔵島のイルカウォッチング事業者は不満を抱えていった。

船頭たちは、御蔵島と三宅島で決めたイルカウォッチング船の隻数に対して不満を持つ

ていた<sup>30</sup>。

三宅島のウォッチング船は、御蔵島の海に出来るだけ来てほしくないと言うのが御蔵島に人たちの本音である<sup>31</sup>。

東京都版エコツアーリズムが導入される前までは、御蔵島の周辺海域で行われるイルカウォッチング船の一日あたり最大隻数は、三宅島 30 隻（内ドルフィンスイミング伴う船 25 隻）に対して御蔵島は 20 隻であった。御蔵島の庭先ともいえる海域で行うイルカウォッチングであるが、御蔵島は三宅島に対して、優位に立つことが出来なかった。

また、三宅島と御蔵島で自主ルールは作られたが、一部にルール違反も見られたという。

## 8.2 2000 年～2012 年（三宅島雄山の噴火後）

2000 年に三宅島の雄山が噴火し、2000 年 9 月に三宅島は全島民避難指示が出された。2000 年の噴火から 2005 年の三宅島の全島民避難解除まで御蔵島海域のイルカウォッチングは御蔵島の船のみで行われた。

### 8.2.1 東京都版エコツアーリズムの導入

2004 年御蔵島に東京都版エコツアーリズムが導入され、イルカウォッチングのルールも大きく変わった。

### 8.2.2 御蔵島におけるエコツアーリズム導入の経緯<sup>32</sup>

2002 年 『みくらの森は生きている』の執筆者の一人である巨樹の会主宰の平岡忠夫が講師になり「エコツアーリズムで村おこし一時が来たさあ始めよう」というテーマで講演会と野外研修が開催された。

2002 年 御蔵島村は東京都の島嶼地域では初めて自然保護条例を制定した。この条例の目的は、「自然の保護と回復及び適正な利用、野生動植物の保護等の施策を推進することにより、村民をはじめ御蔵島への来訪者が豊かな自然の恵みを享受し、快適な生活を営むことが出来る環境を確保すること」と第一条に規定されている。

条例の適用範囲は、島内及び海岸から 1000 メートルの水域までとされた。（第二条）

第十条で保全地域が指定され次の 3 つに区分された。

- ① 生活環境保全地域 自然公園法等関係法律による指定を受けていない地域で、村の自然環境保全上特に保護、回復を促進する必要があると認められる地域
- ② 森林環境保全地域 植林された森林の存する地域で、その自然を回復し、保護すること

<sup>30</sup> H さん（男性 60 代）2012 年 5 月 30 日インタビュー

<sup>31</sup> K. I さん（男性 60 代）2012 年 3 月 30 日インタビュー

<sup>32</sup> 御蔵島村（2006）pp. 986-997

が必要な土地や地域

- ③ 特別保護地域 前各号に属しない地域で、御蔵島の自然保護上又は野生動物の保護上特に保全を要する地域

保全地域内の行為は制限され、立ち入りも制限されることになった。これらの保全地域の環境が損なわれたと認めたとき、その行為者には環境回復と悪質なものには氏名の公表と5万円の過料など罰則規定も設けられた（第十三条）

2004年、都知事は御蔵島を自然環境保全促進地域に指定した。

「御蔵島における東京都自然ガイドの養成及び認定に関する要綱」が制定され「東京都版エコツーリズム」が4月より実施された。

## 第9章 東京都版エコツーリズム

東京都の島嶼部を対象として、人間による利用を一定のルールのもとに実施し、自然を過度に利用することによって荒廃することを防止する目的で、2002年7月に、東京都は「東京都の島しょ地域における自然の保護と適正な利用に関する要綱」を定めた。この要綱に基づいた施策が「東京都版エコツーリズム」と呼ばれている。（土居 2011）

要綱以下の4つの要素から構成されている。（土居 2011）

- ①「自然環境保全促進地域の指定」の指定から施策が開始される。

「将来にわたって継承すべき貴重な自然が存するため、保護と利用の両立を図られなければならない」と認める地域を、知事が自然環境保全促進地域として指定でき、指定に当たっては、調査、指針の策定、関係町村との協議などを行うことが定められている。

- ②知事と自然環境保全促進地域に指定された区域の存する町または村の長とが協定を締結する。この協定にはルールが定められ、ルールの内容には、利用区域又は利用経路、利用時期及び利用時間、1日当たりの自然ガイドが担当する利用者数の上限などの項目が含まれている。

- ③モニタリングの実施。知事は自然環境保全促進地域において、自然の保護及び適正な利用を図るための調査を行い、その調査の結果をルールに反映させる。

- ④利用者が促進地域に入ろうとする場合は、基本的に東京都自然ガイドの同行が義務付けられ、ガイドの同行なしでは、立ち入ることが出来ない。

ガイドの募集の対象となるものはその地域で生活を営む者に限定されている。

東京都版エコツーリズムは自然を守ることが主な目的としており、観光・地域振興はそれに付随する位置づけが行われている。（土居 2011）

エコツーリズムの理念である「環境保全」「地域振興」「観光振興」の三つの理念のうち「環境保全」に重点が置かれ、土居が述べているように地域振興、観光振興については、ほとんど記載はない。地域振興につながる項目として記載されているのは、「ガイドの募集の対象となるものはその地域で生活を営む者に限定されている」という箇所だけである。

東京都版エコツーリズムは、利用区域又は利用経路、利用時期及び利用時間、1日当たりの自然ガイドが担当する利用者数の上限などの項目が決められ、受け入れる地域から見れば、規制の強い施策だと考えられる。

しかし、御蔵島村は、積極的に東京都版エコツーリズムを導入した。

## 9.1 東京都版エコツーリズム導入の経緯

御蔵島に東京都版エコツーリズムが導入された時に環境局に在籍していた土居（2011）は、導入の経緯について「小笠原の事例と比較すると、御蔵島村の積極的な姿勢があり、短時間での実施が図られている。」と述べている。

導入理由として、次の二点が考えられる。

第一は、御蔵島村が御蔵島の自然を持続的に利用するための対策として、東京都版エコツーリズムを導入する必要があった。

原始的なミヤマクワガタの一種で、御蔵島と神津島の一部しか生息していない固有種のミクラミヤマクワガタの来島者による無秩序な採取、ニオイエビネに代表される貴重な植物を乱獲から守る施策が住民から求められていた。御蔵島村は、島の貴重な自然を守るために2002年4月に島嶼部ではじめて自然保護条例を制定、施行している。

御蔵島村自然保護条例の前文（抜粋）では、「御蔵島の豊かな自然を後世に引き継ぐため、島の内外を問わず御蔵島を愛する人々が等しく自然の恵みを享受すべく、自然と共生し、自然を適正に利用するため、ここに御蔵島村自然保護条例を制定する」という趣旨がうたわれている<sup>33</sup>。

東京都版エコツーリズムを導入することによって島の内外に自然保護を訴えることが出来、エコツーリズムの島としての御蔵島をアピールすることが出来るようになる。

第二に理由は、御蔵島周辺海域におけるイルカウォッチングに関するものである。導入当時の関係者2名にインタビューをおこなった。

御蔵島観光協会K. Kさん

「なぜ、エコツーリズムを御蔵島が導入したかと言うと、イルカウォッチング船の主導権を三宅島から御蔵島に移すため。三宅島とは、噴火前の1998年に三宅島との自主ルールが

---

<sup>33</sup>御蔵島村（2006）p. 987

決められていたが、規制力は弱かった。エコツーリズムの導入に対して、一部に反対の声もあったと聞いているが、役所に文書で抗議した人はいなかった。」<sup>34</sup>

御蔵島村役場 K. T さん

「エコツーリズムの導入には、当時の村長が積極的だった。導入に際して、三宅村との話し合いは難航したが、間に東京都が入ってまとまった。エコツーリズムが導入されると自由に山に入れなくなると心配した人もいたが、大きな反対はなかった。」<sup>35</sup>

東京都版エコツーリズムを推進するために御蔵島村が東京都と「御蔵島における自然環境保全促進地域の適正な利用に関する協定」を締結している。三宅村は東京都とは、直接には協定を締結してはいない。三宅村は、御蔵島村と「御蔵島周辺海域のイルカウォッチングの実施に関する協定書」を締結し、御蔵島周辺海域でのイルカウォッチング事業を行うことになった。

協定書は、御蔵島村長と三宅村長とが締結し、御蔵島観光協会会長、三宅島観光協会会長、御蔵島村漁業協同組合長理事、三宅島漁業協同組合代表理事が立会人になっている。

協定が締結されるにあたり御蔵島村と三宅村との調整が難航したのは、1日当たりのイルカウォッチング船の隻数であった。

御蔵島周辺海域のイルカウォッチング船の1日当たりの実施隻数は、エコツーリズム実施前の1998年に御蔵島村漁協と三宅島漁協で締結された同じ45隻（ドルフィンスイムを伴うウォッチング船）と決められた。

1998年の協定書では、45隻の内訳を御蔵島20隻、三宅島25隻としていたが、2011年3月31日の協定書では、御蔵島村漁業協同組合所属のウォッチング船は一日あたり30隻以内（ピーク時）、三宅島漁業協同組合所属のウォッチング船は15隻以内（ピーク時）と定められた。

エコツーリズム導入前と導入後と比較すると、三宅島は10隻減って、御蔵島は10隻増えたことになる。

また、エコツーリズム導入後の協定書では、御蔵島周辺海域においてイルカウォッチング業を行う場合は、3日前までに申請書を御蔵島村長に提出し、許可を得ることになった。この規則は、御蔵島村漁業協同組合所属のウォッチング船だけでなく、三宅島漁業協同組合所属のウォッチング船にも適用される。

また、御蔵島周辺海域におけるイルカウォッチングの運営が適切になされているかを調査するために、御蔵島村から監視船を出すことが出来るとされた。

御蔵島周辺海域でのイルカウォッチングの主導権は、東京都と直接協定書を結んだ御蔵島村が握ることになった。

---

<sup>34</sup> 観光協会 K. K さん 2012 年 3 月 28 日インタビュー

<sup>35</sup> 村役場 K. T さん 2012 年 3 月 29 日インタビュー

## 9.2 御蔵島のエコツアーリズムの個別ルール

小笠原が無人島である南島と母島の一部地域で導入したのに対して御蔵島は集落の区域、日常生活に必要な道路などを除く島全域及び汀線から沖合 1000m 以内の海域を自然環境保全促進地域に指定し、陸域及び海域利用にルールを設定し、利用期間・人数などに制限を設定した。

御蔵島では里内、村道、都道と一部の地域を除き、観光客は東京都自然ガイド（以下ガイド）の同行が原則とされている。他の観光地のように観光客がガイドなしで山に登ったり海に潜ったりすることは出来ない。また、日帰り観光、キャンプも禁止されており、宿泊施設を予約していないと上陸すらできない。

ガイドは陸域と海域に分けられ、ガイドに関するルールの概要が次のように決められた。

### 9.2.1 ガイドの種類

種別		ガイドの可能範囲と条件		登録人数
陸域 ガイド	第 1 種	保全地域内に観光客を伴って立ち入ることが出来る	7 名までガイド可能	34 名
	第 2 種		1 種と同行要す	5 名
海域 ガイド	第 1 種	観光客を乗せてウォッチングに行くことが出来る。	1 日 3 回まで可能	15 名
	第 2 種		1 日 1 回まで	2 名
	第 3 種	1 種又は 2 種に同乗してガイドが可能		20 名

表 9.1 御蔵島の東京都自然ガイドの種別と登録人数（2011 年 11 月現在）

2011 年御蔵島観光協会データより作成

ガイドの登録資格は種別に決められており、第 1 種は陸域、海域とも御蔵島に 3 年以上住所を有する者となっている。島に新たに移住して登録資格を得て海域ガイドを行っているのは（2011 年 11 月現在）1 種 2 名、2 種 1 名になっている。

ガイドの認定講習会は 2 年に 1 回実施され新規登録者は 4 日、更新者（2 年ごと）は 2 日間の講習を受講する。講習では安全・御蔵島の歴史・自然についての講習が行われる。

ガイドの登録はしていないがガイドの資格を有する者は村役場の K. T さんの話では 120～130 名ほどいる。村の大人の半数近くがガイドの講習を受けたことになる。東京都版エコツアーリズムが導入されるとき、ガイドの資格が無いと今まで自由に入れていた山や海に行くことが出来ないという誤解から村民の多くが講習を受講した。このことは、多くの村民がガイド講習により、東京都版エコツアーリズムを理解することが出来るとともに御蔵島の自然資源を再認識することに繋がったのではないだろうか。

## 9.3 三宅島の東京都版エコツアーリズムのガイド

三宅島においても御蔵島海域でガイドが行える東京都自然ガイドの資格が与えられている。ガイドの資格要件や人数、種別などにおいて御蔵島とは異なっている。



新規ガイドの登録は御蔵島の村長が東京都に推薦し、都知事が認定する。三宅島村の村長が直接、東京都に推薦することは無く、ガイドの資格認定は、御蔵島を通して行われる。

#### 9.3.1 三宅島のガイドの資格要件

2000 年の三宅島雄山の噴火以前からイルカウォッチングを行っていた船主及びその船主が推薦した 2 名。船主推薦の 2 名は、三宅島に住民票があるものであるが、御蔵島と違い在住の年数の制限はない。

#### 9.3.2 三宅島のガイドの種別

三宅島では、御蔵島のようにガイドの種別がなく、海域ガイドの資格を有するものは、全員同じ可能範囲と条件でガイドを行うことができる。

三宅島在住で、御蔵島海域でガイドが行える資格者は、船主 9 名、各船主が推薦した 18 名の計 27 名である。(2012 年 5 月現在)

#### 9.3.3. 三宅島のガイドの認定講習

御蔵島と同じく、ガイドの認定講習会は 2 年に 1 回実施され新規登録者は 4 日、更新者(2 年ごと)は 2 日間の講習を受講する。講習では安全・御蔵島の歴史・自然についての講習が行われる。新規登録講習はイルカウォッチングのシーズンオフの冬期に御蔵島で行われ、更新講習は 2 日行われ、内 1 日は三宅島で行う。

#### 9.3.4 ガイドの資格の喪失

2000 年の噴火以前からイルカウォッチングを行っていた船主が、引退などの理由でガイドの資格を失うと、同時に船主から推薦を受けていた 2 名も資格を失うことになる。1 名の船主が引退すると推薦を受けていた 2 名も含め 3 名のガイドの資格が喪失される。

ガイドの資格喪失の条件は、三宅島にとって厳しいものである。船主の年齢が高齢化するにつれて引退する者も多くなり、ガイドの資格者は減少していく。今のルールのままでは、三宅島漁業協同組合所属のウォッチング船は、御蔵島周辺海域で永続的にイルカウォッチングが出来ない。期限が区切られたガイドの資格になっている。

#### 9.3.5 三宅島の言い分

三宅島の立場から、御蔵島が導入したエコツーリズムについてどう思っているのかを三宅島の関係者にインタビューした。

三宅島観光協会 A. T さん

噴火前の 90 年代は、三宅島からイルカウォッチングに行く観光客が多く、自主ルールで決められていた上限の 1 日 25 隻(ドルフィンスイミングを伴うウォッチング船)では足

りない状況であった。噴火後に再開された 2005 年以降は、一日 15 隻（2005 年以降の取決め上限）を超える需要のある日は年に数日しかない。民宿は 3 分の 1 ぐらいに減ったし、廃業した船も多い。

ガイドの資格を持った船主が高齢化していつているので、今後は引退する船主が多くなる。一人の船主が引退すると推薦されていた二人も同時に資格を失う現行の制度では、三宅島のガイド資格者の数は減る一方である。

三宅島のイルカウォッチングは御蔵島と違って、ウォッチング船の船主や民宿がウォッチング客を集客はしない。ウォッチング客の集客は、全て三宅島観光協会会員のダイビングショップが行う。ダイビングショップがウォッチング船を手配し、客が乗る船を決めている。仮にガイド有資格者の船主が 5 名まで減ったら、ウォッチング客の需要があっても、ダイビングショップは、確実にウォッチング船を手配することが出来なくなる。需要があっても、ウォッチング船の手配が出来ないと観光客を集客することが出来ず、三宅島のイルカウォッチング業は成り立たなくなる。

今の東京都版エコツーリズムのルールは三宅島の島民が避難していた時に決められたルールで、自分たちは、東京都版エコツーリズムが開始される一年前までは、エコツーリズムについて一切知らず、直前になって知った。その頃は、皆どうやって暮らしていこうか、事業が続けられるのだろうかということで頭がいっぱいで、エコツーリズムのルールを検討する余裕がなかった。帰島から 7 年経ち、エコツーリズムを導入したところと事情が変わってきている。当初に決めたルールは変更すべきなのではないかと思う。

ガイド資格の講習のため御蔵島に行くのは三宅島の人間にとっては、大変である。講習は冬に行われるので、海が荒れ三宅島から御蔵島に渡る船が欠航するので、講習を三宅島で行って欲しい。実際去年は 3 回中止になってしまった。

三宅島のイルカウォッチング料金は、一回 13,000 円で御蔵島の一回 7,000 円より高いが、三宅島は御蔵島より交通の便が良く、イルカウォッチング以外にも三宅島の周辺海域でのダイビングなどが出来るので、妥当な金額だと思う。イルカウォッチングだけを行いたい観光客には、御蔵島に泊まることを勧めている。

三宅村役場 K. S さん

東京都版エコツーリズムは三宅島が全島避難中に決められたので、三宅村は、交渉のテーブルについていなかった。噴火前から三宅島でイルカウォッチングを行っていた船主は漁業が主で、今後漁業が継続できるのかということで頭がいっぱいで、避難中はイルカウォッチングのことを考える余裕がなかった。現在は帰島直後と状況が違うのでルールの見直しが必要だと思う。

平成 24 年度、御蔵島から一日当たりのウォッチング船の最大隻数を削減する提案が来ているが、三宅島と御蔵島では、削減幅が違いすぎる。御蔵島が現行の一日 30 隻から 28 隻にするのに対して三宅島は 15 隻から 10 隻と三分の二まで減らされている。削減の根拠が

分からず、三宅島の関係者は納得していない。

#### 9.4 イルカウォッチング船の隻数削減について

三宅島が納得していないウォッチング船の削減について、御蔵島の意見を聞くために、御蔵島村役場のK. Tさんにインタビューした<sup>36</sup>。

今年（2012年）のウォッチング船の削減については三宅島と御蔵島の村長同士の話し合いで決めることになる。三宅島の削減幅が大きいと言っているが、昨年の実績からすると一日の最大隻数を現行の15隻から10隻に減らすことは、根拠がないことではない。昨年三宅島が、一日に10隻超のイルカウォッチング船を出船させた日数は、7月に1日（13隻）、8月に1日（11隻）、9月に3日（11隻、12隻、12隻）の5日しかない。

御蔵島の事業者は三宅島の船が出来るだけ来ないようにしてくれと言ってくる。イルカのウォッチング船の隻数などのルールは、本来事業者間で決めるべきで行政で決める問題ではないと思う。

東京都版エコツアーリズムが導入されてから、御蔵島村と三宅村との間でイルカウォッチングについての協定書は結ばれ、毎年更新されている。しかし、東京都版エコツアーリズムのルールの見直しについて、両島での話し合いは行われてこなかった。三宅島と御蔵島との話し合いは今までされてこなかったのも、部会を立ち上げてルールの見直しを行おうとしている。参加者は両島の観光協会と役場の課長レベルで、調整役として三宅支庁に入ってもらおう。

御蔵島の村長はイルカウォッチング船の削減を提案している。イルカウォッチング船がイルカ減少の原因だという科学的根拠を示せと事業者は言ってくるが、長年イルカのモニタリングをしている御蔵島観光協会でもイルカ減少の原因は分からないと言っている。

イルカウォッチング船の削減は、事業者にとっては、経済的な影響が大きい重要な問題であるが、モニタリングにより、御蔵島周辺海域では、ここ数年イルカが減少しているのが分かってきた。イルカウォッチング船がイルカ減少の原因だという科学的根拠は分からないが、御蔵島村役場は、ウォッチング船の削減を進めようとしている。

### 第10章 イルカのモニタリング

御蔵島周辺海域では、東京都版エコツアーリズムのルールに則り、イルカウォッチング及

---

<sup>36</sup> 2012年5月31日インタビュー

ビルカスイミングが実施されている。イルカの生息地を保全しつつ、観光利用を継続するために、イルカに対する人為の影響をモニタリングがされている。

御蔵島では、水中ビデオ撮影による個別識別調査を行い、生息頭数、個体群の構成、繁殖率等の年間データを得る目的で調査が行われている。得られたデータを過去の調査データと比較及び分析を行うことで、御蔵島周辺に生息するミナミハンドウイルカ個体群の生息状況をモニタリングするとともに、人為の長期的な影響の海を検証し、健全で持続可能なイルカのあり方を検証している。<sup>37</sup>

## 10.1 イルカの個体識別調査

御蔵島におけるイルカの個体識別調査は、商業的なイルカウォッチングの開始とほとんど同時に始まり、続けられてきた。

1993 年 予備調査

1994 年 本格調査開始 最初の 10 年間は村が資金援助を行い、NPO 法人アイサーチ・ジャパンによる人的支援とボランティア体制で行われてきた。

2004 年 2 年間（2005 年まで）は麻布大学、京都大学、東京工業大学、東京農工大学、三重大大学の学生によって調査が継続された。

2006 年 現在（2012）まで、東京都が御蔵島観光協会に調査委託する形で行われている。<sup>38</sup>

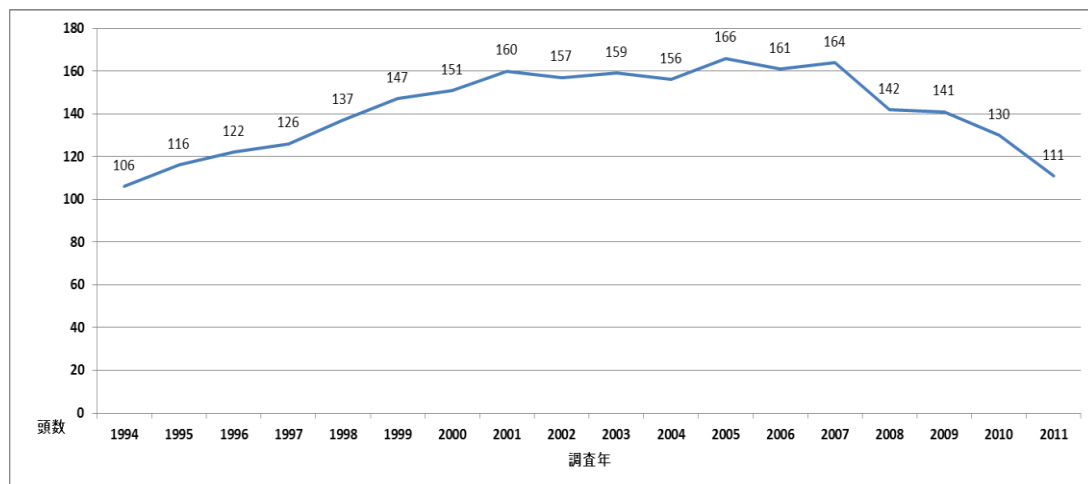


図 10.1 各調査年に御蔵島周辺において識別されたイルカ頭数

平成 23 年度御蔵島海域におけるイルカ生息状況調査（東京都 2012）データより作成

御蔵島周辺のイルカの生息数は、2007 年から減少傾向にある。減少したイルカの多くは、伊豆諸島の他の島に移住している。

<sup>37</sup> 平成 23 年度御蔵島海域におけるイルカの生息状況調査（東京都 2012）p. 4

<sup>38</sup> 御蔵島村（2006）p. 3

## 第 11 章 御蔵島のエコツアーはどのように行われているのか

御蔵島では、エコツアーは海域と陸域に分かれていて、海域のエコツアーは御蔵島の周辺海域でのイルカウォッチング（御蔵島のイルカウォッチングはドルフィンスイミングを含む）、陸域のエコツアーは御蔵の山のトレッキングとなる。

### 11.1 海域のエコツアー

イルカウォッチングは 3 月 15 日～11 月 15 日までの期間に限定されている。

2011 年のウォッチング料金は 1 回大人 7000 円（2 時間）、他にウェットスーツ、マスク・フィン・シュノーケルのレンタル料金が 2500～3500 円かかる。ウォッチングの料金には 300 円の協力金が含まれており、協力金は漁協、観光協会の特別会計、保険料に分配される。

イルカウォッチング船は遊泳による観察を含む場合は、ウォッチャーを最大 13 人まで乗せることが出来るが、2011 年からウォッチャーを 8 人以上乗船させるためには船を操船する者（ガイド）とは別にガイド登録をしている御蔵島村海域ガイドまたは、観光協会長の推薦を受けて村長が認めたものを乗船させることになった。船上ウォッチングのみの場合は、法定乗船定員に範囲でウォッチャーを乗船させることが出来る。海域ガイド 1 種の資格があれば 1 日 3 回まで出船できる。（観光客は 1 日 2 回までウォッチング可能）

御蔵島には 13 隻のウォッチング船（2011 年 11 月現在）があるが、1 日の最大出船数は 30 隻になっているため、3 回目の出船は抽選になっている。民宿で船を 2 隻所有している H さんの話では、ウォッチングの出船数は当時の船の数の最大数で決めたので、今後船が増えたら 2 回目の出船も抽選になってしまうと危惧していた。

ハイシーズンに 2 回出船すれば 10 万円ほどの売上になる 1 回の抽選に当たるか外れるかは経済的には大きい。

13 隻あるウォッチング船は民宿所有が 5 隻で、他は民宿、村営御蔵荘、バンガローと提携している船頭が所有している。村営御蔵荘では直接斡旋はせず、ホームページにイルカウォッチング船の連絡先を乗せている。村役場の話ではその連絡先の順番でも不平が出たりするらしい。（先に書いてある方が有利）

イルカウォッチングは野生動物を対象とするので 100%遭遇することは難しいが、御蔵島ではかなりの高い確率でイルカに遭遇することが出来る。港から出船して 20 分ぐらいでイルカウォッチングが水中で泳ぎながらできる場所は日本では小笠原諸島と御蔵島だけであった。小笠原諸島に行く交通手段は週 1 便の定期船しかなく、所要時間も竹芝桟橋から 25 時間 30 分かかる。御蔵島は条件付き就航（海が荒れている場合は接岸できないので上陸できず欠航の扱いになる 2010 年就航率 63%）となるが定期船が毎日就航している。運賃は高くなるが八丈島を経由してヘリコプターで御蔵島に行くことも出来る。金曜の夜、定期船で竹芝桟橋を出れば、翌日の土曜日の早朝に御蔵島に着くことが出来、その日の午前中からイルカウォッチングすることが出来る。三宅島は御蔵島に比べると交通の便が良いが、

イルカが生息する御蔵島海域とは 14 km 離れている。三宅島から御蔵島のイルカを見るためには、潮の流れが速い海を片道 40 分漁船に乗らなければならない。イルカウォッチングをする前に船酔い、疲労の可能性がある。三宅島のウォッチング料金は一人 13000 円で、御蔵島の倍近くになる。イルカウォッチングに限定すると御蔵島は他の島に比べると優位性が高い。イルカは御蔵島にとって他と差別化できる大きな観光資源となっている。

#### 11.1.1 海のエコツアーの参与観察

筆者は御蔵島のイルカウォッチングを観光客の視点で見るために、2 回イルカウォッチングに参加し、参与観察をおこなった。

##### 1 回目のイルカウォッチング

2011 年 9 月 29 日午前 8 時 30 分～11 時 30 分

午前 8 時 30 分にウォッチング船の船頭兼ガイドの K. H さん（40 代男性）が、宿泊していた村営御蔵荘にワゴン車で迎えにくる。ハイシーズンでなかったため、参加者は一人だけであった。船頭の K. H さんは静岡県出身で御蔵島のイルカの生態調査の手伝いをしているうちに御蔵島が気に入り、島に住居を借り住民票を移し御蔵島村の村民になった。独身で島に来たが現在は結婚している。K. H さんのガイド資格は第 1 種海域ガイドで、第 1 種を所持している島外出身者は K. H さんを含めて 2 名しかいない。

港を出て島の周りでイルカを探す。晴れていたが波は荒く小さな船は大きく揺れた。海から島を見ると海の周りが絶壁になっているのがわかる。御蔵島には砂浜はなく、島の周りに海岸は岩場になっている。港を出て 20 分ぐらいして、海面にイルカの群れが見えてきた。海面に何頭かのイルカの背びれが浮き沈みしていた。

船頭の K. H さんがイルカの群れの近くに船を停船させたので、船の縁から静かに海に入る。海の中はあまり視界が良くなかったが、シュノーケルで息をしながら海面から海中を見ていると、イルカの群れが近づいてきた。5～6 頭ぐらいが確認でき、親子連れのイルカの写真が撮れた。イルカは思っていたより接近してくる。イルカは人間を全く怖がってはいないように思えた。イルカの群れが通り過ぎたあと海面に顔を上げるとかなり船から離れていた。潮の流れが速いので泳いでいなくても流されてしまう。船に戻り、別の群れを探すために船を走らせると 10 分ほどで別の群れに遭遇し、再び海に入りウォッチングを行った。

今回のウォッチングでは 2 回海に入り 10 頭ほどのイルカを観察したが、運が良ければ数 10 頭を観察することが出来ると言われている。

船頭の K. H さんは寡黙な性格のためなのか御蔵島のイルカの特徴、イルカウォッチングの注意点などの説明はほとんどなかった。K. H さんは船頭兼ガイドなのだが、当日は船頭の役割に徹していた。筆者は事前にインターネットでウォッチングの注意点を確認していたため問題はなかったが、全く事前情報を持っていない初心者がいきなり海に入ったら事

故につながるのではないかと感じた。ウォッチャーが 8 名未満の場合は船頭だけで出船できるが、初めて海に入る観光客の立場で見ればガイド（インストラクター）が必要だと感じた。

## 2 回目のイルカウォッチング

2012 年 6 月 1 日（金）午後 13：30～16：00

船頭兼ガイドの O. K さんが、宿泊していた民宿までワゴン車で迎えに来た。O. K さんも K. H さんと同じく、島外出身者で、御蔵島のイルカウォッチング船のスタッフとして働きながら、ガイドの資格を取得した。第 1 種ガイド資格取得後船を購入して独立した。

今回は、30 代の B さん夫妻と一緒にウォッチングに行くことになった。B さん夫妻は、御蔵島来島 5 回目で毎回イルカウォッチングを 4～5 回行っていると言っていた。今回は、滞在中 4 回のイルカウォッチングを行うと言っていた。B さん夫妻は何回もウォッチングを行っているため、ウェットスーツなどの用具は自前の物を用意していた。B さんは水中ビデオカメラを持ち込んできた。

港に着くとガイドの M さん（20 代女性）が船に乗り込む前にイルカウォッチングの注意事項をパネルで説明してくれた。ガイドの M さんは、島の出身でなく、山口県の出身で、この仕事は、通っていた動物の専門学校の先生に紹介された。

港には我々が乗船する船の他に 2 隻のウォッチング船が停船して、それぞれの船に 5～6 人のウォッチャーが乗り込んだ。

港を出て、御蔵島海の汀線から数百メートルぐらいの距離取りながら、島の周りを航行した。船上から御蔵島を見ると切り立った崖に囲まれ、昔から容易に船が近づけなかった島だと言うことが分かる。島の周りには、砂浜がなく、大小の丸い礫の堆積した浜になっており、島民が海に出るのも大変だったことが実感出来る。晴れて天候はよかったが、イルカにはなかなか遭遇できず、30 分以上船を御蔵島に沿って航行させていった。ガイドの M さんが、船上から見える島の海食崖の特徴のある岩や崖から海におちる滝の説明をしてくれたりしてくれたのでイルカが見つかるまでの時間も退屈することはなかった。船を島の四分の三周ほど走らせたころ、海面にイルカの背びれが見えてきた。船頭の合図があり、船の両側から海に入った。B さん夫妻は、何回もウォッチングをしている経験者のため、ウェットスーツにウェイト（おもり）を付けて潜水した。

筆者はガイドの M さんにイルカが見える方向を指示してもらいながら、イルカの観察をした。

B さんが、水中で手に持ったビデオカメラをイルカに向け、撮影をしていたところ B さんに近づいたイルカが、口を開け威嚇行動をとった。イルカウォッチングが好きな人から、「イルカが水中で遊んでくれる、何回も潜っているとイルカが覚えてくれている」と言う話を聞いたが、必ずしも、イルカはいつも友好的とは、限らない。

今回のツアーでは、4 回海に入ったが、ウォッチングマニュアルでは、1 航海（出港から

入港まで)につき10回までエントリー(入水)できている。何回もウォッチング船に乗っているBさんは、「以前乗った船の船頭は、イルカが船の近くに来るとウォッチャーにすぐ海に入るように言い、何回も潜らされた。イルカが、よく見えなかったと言ったら、船頭にあんたが、潜るのが下手だからといわれた。O.Kさんは、イルカにやさしい。イルカのことを考えていて船を動かしている。」と言っていた。

Bさん夫妻は、御蔵島でイルカウォッチングするときは、O.Kさんの船に決めていると言っていた。

海に出て2時間あまり経過後、船は港に戻り、下船後インストラクターのMさんの運転で民宿まで送ってもらった。当日の夕食前にO.Kさんが民宿まで来て、ウォッチング船の上で撮った記念写真をプリントして届けてくれた。



写真 11.1 イルカウォッチャーを威嚇するイルカ(筆者撮影)

海域のエコツアーの参加者は、リピーターが多い。リピーターの多くは、泊まる宿、乗るウォッチング船を決めている。顔見知りの船頭とイルカウォッチング客の関係のため、エコツアーリズムについての説明は行われていない<sup>39</sup>。イルカウォッチングが目的の観光客にとって海域ガイド(船頭)に期待するのは、海域でイルカを見つけ、ドルフィンスイミングが出来るようにすることである。つまり海域ガイド(船頭)が求められるのは、イルカの習性を知り、イルカの群れに早く船を近づける操船能力と安全にドルフィンスイミングが行えるようにする安全管理能力である。御蔵島の歴史や自然を語る必要はなく、イルカウォッチング客もそれを求めているわけではない。

## 11.2 陸域のエコツアー

陸域のエコツアーリズムである山のツアーは、日本一のスダジイなどの巨樹を見るコース

---

<sup>39</sup> 観光客アンケート調査(2011年9月～2012年6月)による



や、池からの眺めが新東京百景にも選ばれた御代ヶ池を訪れるコースや、ミクラザサの覆われた鈴原湿原を歩くツアーなど8コースが設定されている。

御蔵島の山には、一部を除き観光客は、ガイドの同行なしでは、踏み入ることが出来ない。山の自然に触れるためには、陸域のツアーに参加しなければならない。

ガイドの料金は半日でひとり4000円（一名のみ場合は6000円）、半日以上一日未満はひとり6000円（一名のみ場合は9000円）に設定されていて、ガイド料金の中には200円の協力金が含まれている。協力金は、自然保護やガイドの育成に役立てている。<sup>40</sup>

山のツアーは8コース設定されているが、観光客が選ぶツアーには偏りがある。日本一のスタジイを見る、南郷巨樹の森のコースが一番人で、2010年度は山のツアー参加人数の67%（879人/1314人）を占めた。一方コースによっては、一年で参加人数が3名というコースもあった<sup>41</sup>。

陸域のエコツアーがどのように行われているのかを調査するため、山のツアーに4回参加した。

本稿では、御蔵島が好きで島に移住したHさんと島の歴史に詳しい郷土史家のK. Iさんにガイドを依頼した2つのコースを紹介する。

#### 11.2.1 南郷巨樹の森コース（日本一のスタジイを見るツアー）

環境省の定義では地上から約1.3mの位置で幹周3m以上の木を巨樹としているが、御蔵島では幹周5m以上の木を巨樹としている。御蔵島の山のツアー人気コースで、TVなどのマスメディアの御蔵島の紹介では、イルカと並んで日本一のスタジイが紹介されている。

9月30日午前8時30分～11時30分 晴れ

参加者1名 陸域のガイド料は規定があり半日コースでひとり4000円、一人参加の場合は6000円となっているが、今回は一人参加で5000円であった。

午前8時30分にガイドのHさんが宿まで軽ワゴン車で迎えに来た。

ガイドのHさん（陸域1種ガイド 60代男性）は東京都の昭島市の出身でNTTを早期退職後奥さんの実家のある御蔵島に移住した。御蔵島に住んで15年になる。御蔵島の不便さが気に入っていると言っていた。しかし、将来は実家のある相模原に戻ると言っていた。高齢になると1か所の診療所しかない御蔵島は不安になるためだろうか。

南郷地区までは、都道を車で30分ぐらいかかる。車中、Hさんから御蔵島の森の特徴、御蔵島の代表的な樹木であり、島の経済を支えてきたツゲの話を聞いた。御蔵島のツゲは漢字で黄楊と書き、他の地方の柘植とは物が違うと言っていた。将棋の駒で有名な山形県

<sup>40</sup> 御蔵島観光協会ホームページより引用

<sup>41</sup> 御蔵島村立ち入り報告より引用（2011）

の天童からも、将棋の駒の材料として御蔵島のツゲを買いに来ると言っていた。

南郷に行く途中、Hさんが道路脇に車を止め、車を降りた。一緒に車を降りHさんについていくとHさんは、道路右脇の小さな祠の周りに生えていた草の葉を一枚備えその上に石を置いた。山に入る前に入る前にここで草をお供えし、草祀りの神様に安全を祈願するとともに、草を置くことで山に誰かが入っていることが分かるという。山から下りるときは草を下ろし無事を感謝する。筆者もHさんにならって草をお供えした。これは、昔からの伝統だが、後日、郷土史家のK. Iさんに草祀りの神様のお供えは、島の人は今も続けているのかを聞いたところ、ほとんどの人が続けていないらしい。

南郷地区は昔集落があったが、今は山階鳥類研究所の南郷分室の建物と民家が1軒あるだけで、定住者はいない。

今回は陸域ガイドのHさんと一緒なので保全地区の森の中に入ることが出来、日本一のスダジイを見るためにガイドから借りたツゲの杖を持って生い茂る草を分け入って歩いていた。険しい道ではなかったが、いたるところにオオミズナギドリの巣が掘られているため足元が悪く歩きにくかった。歩きながら現在は人が住んでいない南郷地区の歴史、島の植生、オオミズナギドリの習性などの説明をガイドから受けた。30分ぐらい足元の悪い森の中を歩くと日本一大きいスダジイの巨樹が見えてきた。幹回りが13.75mになる大樹で枝には多くのコケやシダ植物のオオタニワタリが着生していた。屋久島の縄文杉と同じように木の根元にはいくことが出来ず、木製のデッキからスダジイの巨樹を眺める。ガイドから巨樹発見の経緯や巨樹に関する逸話などの話は特に聞けなかった。帰りは別のルートで車の止めてある場所までいった。途中台風で木が倒れていて道をふさいでいた。Hさんは村に倒木の情報を連絡すると言っていた。エコツアーのコース状態を報告することはガイドの重要な仕事になっている。

南郷で巨樹を見た後、里に向かった。帰る途中、祠で草祀りの神様に山から無事に帰れたことを感謝し、お供えの葉を下ろした。

陸域の1種のガイドの登録は34名だが実際ガイドを行っているのは10名で内御蔵島出身者は6名で残り4名は島外出身者である。

陸域のエコツアーの利用者は海域に比べ10分の1以下で圧倒的に少ない。エコツーリズムのルールでは山に入れるのは1日50人までとなっているが、Hさんの話では50人に達したことはないという。Hさんが2011年に一番多くガイドした月で利用者は10人で、他の月は5~6名ぐらいだという。ガイド料は観光客にとって安くはないが、利用者が少ないので陸域ガイドでは、生活は出来ない。陸域ガイドを専業にしている人はおらず、他に仕事を持っているので1日のガイドは難しく、半日のガイドが主流になっている。Hさんも東海汽船の仕事をしており、ツアーのあと定期船の接岸の手伝いを行うため桟橋に行くと言っていた。



写真 11.2 草祀りの神様の祠と供えた葉（筆者撮影）

### 11.2.2 御代ヶ池のコース

御代ヶ池と池から見える山並みの風景は新東京百景に選ばれている。御代ヶ池は縄文噴火で形成された丘が、それまで流れていた川を堰き止めて誕生した。その大きさは、周囲が 400 メートルで深さは 2 メートルである。

2012 年 3 月 29 日 8 : 00 ~ 11 : 20 晴れ

2011 年 9 月、11 月の 2 回、島外出身者の H さんにガイドをお願いしたので、今回は、観光協会に島の出身者で島の歴史や民俗に詳しいガイドをお願いし、郷土史家の K. I さんを紹介される。K. I さんは、『御蔵島島史』『みくらの森は生きている』などの書籍のなかで島の歴史について執筆している。島の中では、I 先生と呼ばれている。

K. I さんは、海域と陸域のガイド資格を持っている。ガイドは、年間で陸域 40 回、海域が 30 ~ 40 回ぐらい行っている。

K. I さんの軽ワゴン車で里から 20 分ぐらい都道を上ると御代ヶ池に降りていく道の入り口に着いた。車から降りてツゲの自然木が生えている道を下って行った。池が近いためか、湿気が多く、道のそこかしこにある岩には苔が付いていた。苔のついた岩の階段を下りていかなければならない場所が何カ所もあり、滑りやすく、ガイドから借りたツゲの杖が役に立った。筆者は、トレッキングシューズを履いていたが、観光客によっては、サンダルやハイヒールでくる人もいる。K. I さんは、そういう客には、長靴を貸すと言っていた。山のツアーは、イルカウォッチングの空き時間に参加するものだと思っている観光客は、多いらしい。K. I さんは、島に生まれ、島で育ってきたが、ガイドをするようになって御蔵島の良さを再発見したと言っていた。今はガイドの仕事と関係なく山に入って何時間も過ごすことがあるが、いつ行っても飽きないと言っていた。

御代ヶ池に行く途中には、幹周 1 m を超すツゲの巨樹が数本あり、全国的にみても、ツゲの巨樹が群生しているのは、大変めずらしいと言われている。ツゲの巨樹の前には、東

京都の解説の看板が立っていたが、看板が無造作に木の前に立てられていたため、看板が邪魔で、巨樹が良く見ることが出来なかった。御蔵島の森には、観光客はガイドの同行無しでは、入ることが出来ないのだから、巨樹の前に看板はいらないのではないか。解説はガイドから聞くので、わざわざ看板を立てて景観を壊す必要はない。

K. I さんは、歩きながら、ちょっと前まで、このあたりにニオイエビネが生えていたと指さした。今は、島の人間しか山に入ることには出来ないで、島の人間が採ったのだろうと言っていた。栗本さんは、野生のニオイエビネがある場所を何か所か知っているが、心無い人が採って行ってしまうのを恐れて人には教えてない。栗本さんは、いつの日か昔のように山のいたる所にニオイエビネの花が咲いている御蔵島になることが夢だと語ってくれた。

30 分ほど照葉樹林の中を歩くと御代ヶ池が見えてきた。

池のほとりで、ガイドの栗本さんは御代ヶ池にまつわるエピソードを語ってくれた。

御蔵島出身のアウトドア雑誌の編集者が、知られざる自然の特集を雑誌で組むにあたり御蔵島の御代ヶ池を推薦した。ダイビングとカヌーの専門家を連れて御代ヶ池に行き、いざ池にカヌーを浮かべると御代ヶ池は思っていたより小さく、パドルで何回か漕ぐとすぐ対岸に着いてしまった。池に潜ってみても、浅いのですぐフィンが出てしまった。これでは、特集は出来ないで、他にいい場所はないのかと島出身の編集は聞かれ、近くの沢の水がおいしいので行ってみましょうと提案した。編集者たちで沢に行き、沢の水を飲んでみると確かにおいしいと皆が感じた。沢の水を会社に持ち帰り、アウトドア雑誌で特集する全国の利き水のコンテストに御蔵島の水を出品することにした。目隠しテストの結果、御蔵島の水が一番になった。このことを知った当時の村長が、御蔵の水は売れると思いつき、「御蔵の源水」として販売することになった。

御蔵の水は、島民にとっては毎日飲んでいる普通の水だったため、誰もその価値に気づいていなかった。御蔵島の水の価値はよそ者によって偶然に発見された。

池の周囲を少し歩くと地面にオオミズナギドリの死骸があった。K. I さんは、これはネコの仕業だと言っていた。元々御蔵島にはネコはいなかった。ペットとして飼育されていたネコが野生化し、オオミズナギドリなどの鳥類を襲っている。ネコは一日あたり、3羽のオオミズナギの成鳥を食べてしまう。オオミズナギドリのヒナは成鳥まで育つのは5%なので、ヒナが食べられても棲息数の影響は少ないが、成鳥が食べられるとオオミズナギの減少につながるとK. I さんは、危惧していた。

御蔵島には 200 匹ぐらいネコがいるらしい。村は、野生化したネコをこれ以上増やさないために、冬にネコを罠で捕まえ、避妊手術をしてから放している。ネコは、かわいいペットであるが、御蔵島の特異な生態系においては、ネコが与える影響は大きい。隣の三宅

島では、ネコと移入したイタチによりオオミズナギドリやオカダトカゲがほぼ絶滅してしまった。

御代ヶ池から、都道の脇に停めた車に戻る道すがら、K. I さんは島の自然だけでなく、扶持米制度などの歴史、三宅島との関係、イルカウォッチングが本格的に始まるようになって社会がどう変わっていったかという話をしてくれた。

K. I さんは、若い時は、御蔵島を出たくてしょうがなかったが、今は、不便だが御蔵島に住んで良かったと話してくれた。また、御蔵島は、船が容易に近づけない厳しい環境で発展が遅れたといわれるが、厳しい環境が、反対に御蔵島の素晴らしい自然を守ってくれていると考えるべきだと言っていた。

観光客の多くは、イルカウォッチングが目的で御蔵島を訪れる。山のツアーは、海が荒れてイルカウォッチングが出来ない時の代わりや、せっかく御蔵島まで来たのだから一度は山に行ってみよという理由で参加する人が多いらしい<sup>42</sup>。

多くの観光客は、初めに行くコースとして日本一のスタジイを見てみたいと思い南郷巨樹の森コースを選ぶ。しかし、観光客の多くは、2度3度と山のコースには行くことは少ない、そのため他のコースに行く人数が少なくなっているのが現状である。

南郷巨樹の森を訪れる観光客は日本一のスタジイだけを見たいのではなく、南郷地区の歴史、巨樹がなぜ多いのか、巨樹と深い関係のあるオオミズナギドリの話などいろいろなことを知りたいと思っている。陸域のガイドは海域と違い、御蔵島の動物、植物、生態系、歴史、民俗などいろいろな知識が求められる。これらの知識が語られるようになるのは、経験が必要になる。本などで得た知識だけでなく、ガイドが、生活、暮らしのなかで学んできた知識、知恵に裏付けされた説明を観光客は求める。筆者が、体験した陸域のエコツアーでは、島出身者と島外出身者に各2回ガイドをしてもらったが、島の出身者のガイドが行ったエコツアーの方が満足度は高く、次に山のツアーに参加する機会があったらまたガイドをお願いしたいと思った。

---

<sup>42</sup> ガイドHさんインタビュー 2011年9月30日

### 11.3 御蔵島のエコツアーの利用の状況

御蔵島に東京都版エコツアーリズムが導入されてから実際の利用状況は次の図のようになっている。

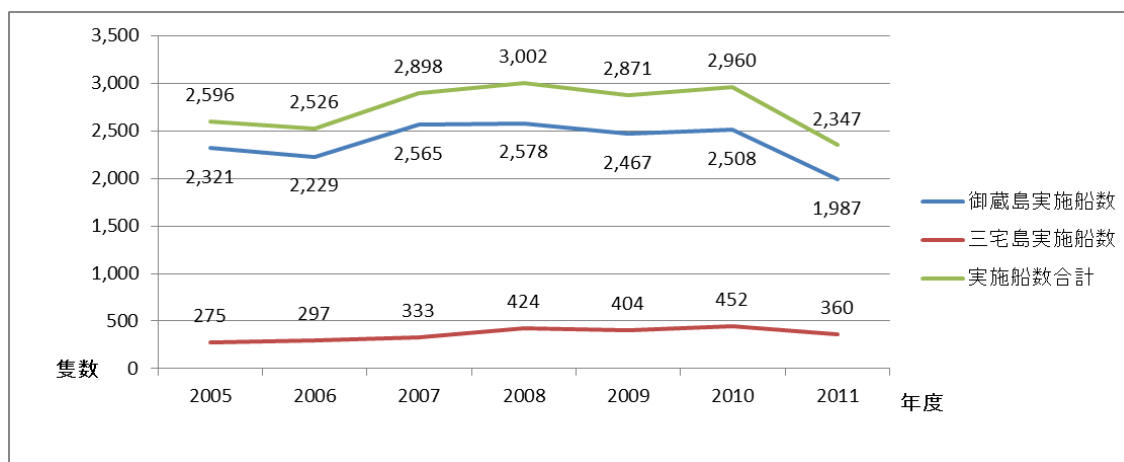


図 11.1 イルカウォッチング船数の推移

御蔵島村場（2011）資料より作成

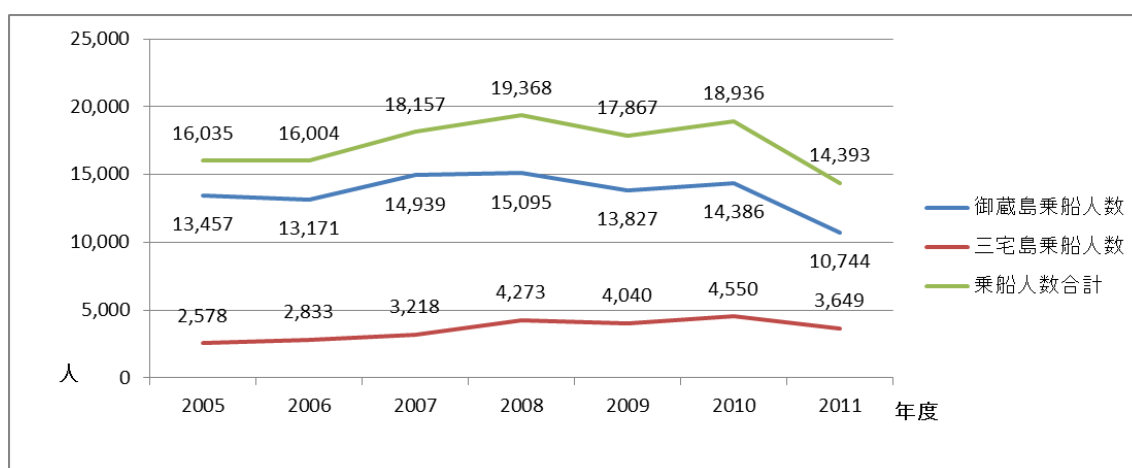


図 11.2 イルカウォッチング乗船人数の推移

御蔵島村場（2011）資料より作成

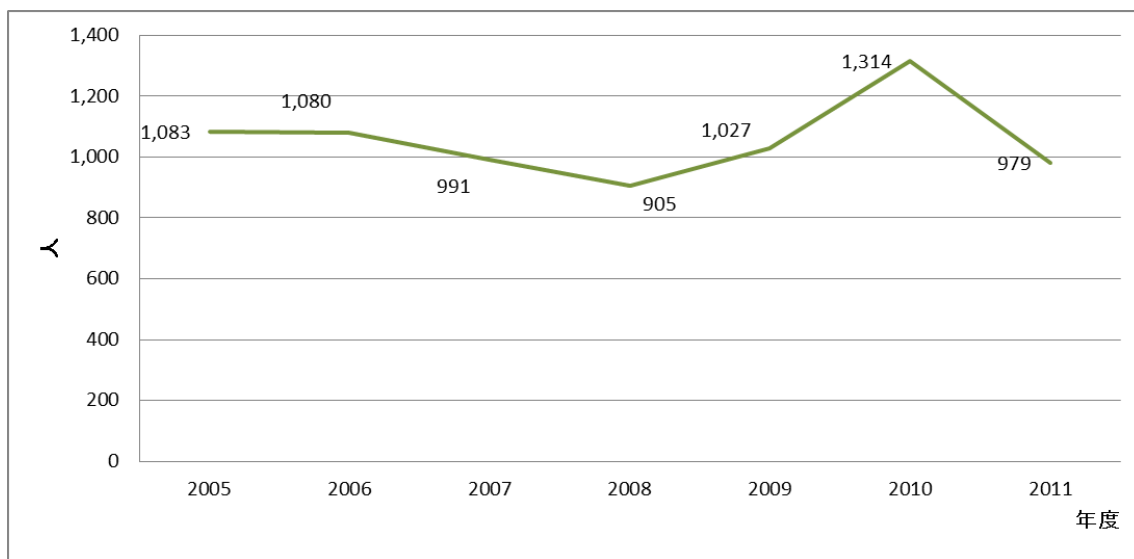


図 11.3 陸域エコツアー参加人数の推移

御蔵島村場（2011）資料より作成

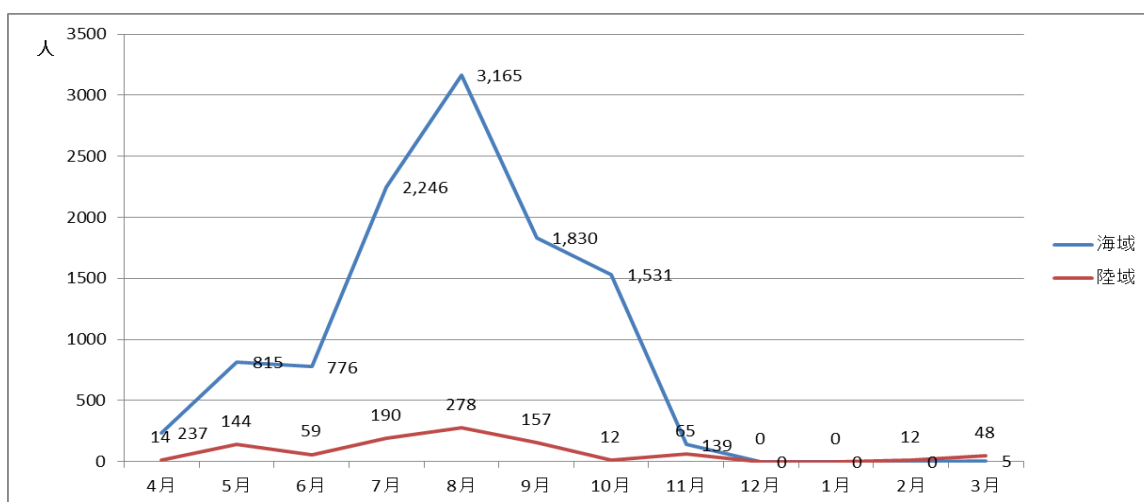


図 11.4 2011 年度海域、陸域エコツアー参加人数 御蔵島村場（2011）資料より作成

御蔵島の海域のエコツアー（イルカウォッチング）、陸域のエコツアー（山のツアー）の観光客数は、2011 年度は震災の影響で前年度より減少した。海域については、2005 年度～2010 年度は、乗船客は 13,000～15,000 人ぐらいであったが、2011 年度は、11,000 人を割り込んでしまった。2011 年度のイルカウォッチング船の乗客数は、2010 年度に比べ 3,642 人減少した。器具のレンタル料金を除いたイルカウォッチングの乗船料だけでみて、島全体でおよそ 2 千 5 百万円の減収となった。2012 年度のゴールデンウィークは、後半天候に恵まれず、ウォッチング客は少なかったと観光協会はいっている。

図 11.4 で分かるようにイルカウォッチング客はゴールデンウィークを除くと 7 月、8 月、9 月の 3 ヶ月に集中している。2011 年度のウォッチング客の数は、御蔵島、三宅島ともに

減少しているが、2011 年 7 月～9 月のピーク時には、御蔵島では 1 日に許可される上限隻数以上の申請があり、抽選で隻数が割り当てられた。

陸域のエコツアーの参加者は海域（御蔵島のみ）の参加者の 10 分の 1 程度で毎年度推移している。

#### 11.4 観光客からみた御蔵島のエコツーリズム

エコツーリズムの主体の一つである観光客の視点でみると御蔵島のエコツーリズムはどう捉えられているのだろうか。アンケート調査を御蔵島に来島している観光客に対して実施した。

民宿及び観光協会で観光客に対して、インタビューとアンケート調査を行った。2011 年 9 月～11 月に 9 人、2012 年 4 月～6 月に 9 人の合計 18 人と面談し、アンケートを回収した

#### 調査結果

##### 観光客の属性

性別 女性が 61%を占める。(男性 7 人、女性 11 人)

年代 30 代が 61%を占める。(20 代 3 人、30 代 11 人、40 代 2 人、50 代 2 人)

居住地 東京都が 50%を占める(東京 9、神奈川 2、千葉 2、茨城 2、宮城 2、埼玉 1)

来島目的（複数回答可） イルカウォッチング 17、山歩き 9、その他 2(のんびり感を求めて、カメラの実力テスト)

来島回数 2 回以上のリピーターが 56%を占める。(1 回 8 人、2～5 回 3 人、6 回以上 7 人)  
最高は 40 回目

認知媒体 知人紹介が 67%を占める。(知人 12、インターネット 5、雑誌 1)

夏休み期間でない 9 月～11 月、3 月～6 月にアンケートを実施したため、20 代の学生はいなかった。女性だけのグループもいたが、夫婦で来島している人が多かった。

来島目的は、18 人中 17 人がイルカウォッチングであったが、半数以上の 11 人が他の楽しみも目的にしていた。

来島回数が突出して多い S. A さん(30 代女性)は、御蔵島のイルカに魅せられ、プロのドルフィンスイマーになった女性で、御蔵島に 40 回来島している。

御蔵島を知った媒体は、知人、インターネット、雑誌でダイビングショップや旅行代理店を通して知った人はいなかった。

イルカウォッチングについて(回答 17 人)

滞在中に行う回数 76%が 2 回以上行う。(1 回 4 人、2 回 5 人、4 回 4 人、5 回 4 人)



ガイド料について 1 回 7000 円のガイド料を高いと思うが 1 人で残りの 16 人がちょうど良いという回答であった。

満足度について 大変満足 10 人、満足 6 人、普通 1 人で満足度は高い。

山のツアーについて (回答 11 人)

滞在中に行う回数 全員が 1 回という回答。

ガイド料について 半日 1 人 4000 円のガイド料は、全員がちょうど良いという回答。

満足度について 大変満足 2 人、満足 8 人、不満 1 人

アンケートを取得した観光客 18 人中 17 人が島滞在中にイルカウォッチングを行い、その内の 8 割近くが複数回行う。

滞在中 5 回イルカウォッチングを行う Cさんは、「金曜日の早朝の船で島についたら少し休んで、午前 8 時からウォッチングを始めます。昼にいったん宿に戻り、軽く昼食を摂り、午後 1 時から再びウォッチングに出かけます。土曜日にも 2 回ウォッチングを行います。帰る日の日曜日は午前中 1 回ウォッチングを行い、午後の船に髪の毛が濡れたまま乗り込みます。親にいい加減にしたらと言われますが、毎年イルカウォッチングに来てしまう。」と話してくれた<sup>43</sup>。

ガイド料の 1 回 7000 円について高いと思う人が、1 名だけだったのは意外に感じたが、御蔵島に来る観光客はほとんどの人が、イルカウォッチングが目的で、知人やインターネットで下調べしてきているため、1 回 7000 円という価格は納得しているのだろう。イルカウォッチングを滞在中 5 回行う Cさん達は、宿泊代・昼食代の他に一人 35000 円を島で消費してくれる。

山のツアーは、御蔵島に来た人の半数以上が行うが、滞在中複数回行う人はいなかった。ガイド料は、観光客にとって納得できる金額だが、イルカウォッチングのように何回も参加し、毎年それを目当てに来る人はいない。

エコツーリズムの認知度について

Q. 御蔵島がエコツーリズムに取り組んでいることをご存知でしたか？

A. 半数が知らなかった。(知っていた 9 人、来島してから知った 4 人、知らない 5 人)

Q. 御蔵島のエコツーリズムに関するルールを知っていますか？

A. 3 分の 2 が知らない。(知っている 6 人、来島してから知った 4 人、知らない 8 人)

御蔵島がエコツーリズムに取り組んでいることを周知するために、民宿にエコツーリス

---

<sup>43</sup> 2012 年 5 月 31 日インタビュー 30 代女性

ムのルールが貼ってあり、観光協会にはエコツーリズムに関してのパンフレットが置いてある。しかし、アンケート結果をみると観光客にエコツーリズムは周知されていない。

今回のアンケートの回答者は、30代以上の方が多く、かつ何回も御蔵島を訪れている人が多かったが、来島回数とエコツーリズムの認知度は比例していなかった。御蔵島がエコツーリズムに取り組んでいることを知らなかった8人中4人がリピーターだった。なかには8回も御蔵島を訪れているのに、エコツーリズムについては知らなかったと回答している人もいた。

アンケートの質問項目以外に御蔵島で気付いたこと感じたことを自由に記入してもらった。

イルカの自然な行動がみられる。(30代女性 来島7回目)

人が温かく、島の人々が挨拶してくれ、良い島だと思います。(30代男性 来島7回目)

人の手が加えられていない自然の素晴らしさを毎回感じる。(30代女性 来島7回目)

三宅島の船は大きく威圧感がある。(40代女性 来島8回目)

まだ森を散歩しただけですが、森が豊かな感じがしました。(30代女性 来島1回目)

人と自然のつながりがスゴいと思います。(30代男性 来島3回目)

鳥の声がたくさん耳に入ってきて、それを聞いて過ごしている時間がとてもステキに感じました。(30代女性 来島2回目)

自然が多くとても良い所、何回でも来たいと思います。(30代女性、来島2回目)

海、山、自然が素晴らしい。(40代男性 来島8回目)

小笠原でイルカウォッチングをしたが、船でイルカを追い回していた。(30代女性 来島1回目)

アンケートに回答してくれた観光客の御蔵島に対しての印象は良かった。イルカウォッチングに対する評価だけでなく、山のツアーに対する評価も高く、御蔵島の自然全体に対する評価は高かった。インタビューで御蔵島の人々の温かさと、島の人々が道で会った「こんにちは」とあいさつしてくれることに関して良い印象を持っている観光客が多かった。

## 観光客へ依頼したアンケート用紙

平成 年 月 日

### アンケート調査へのご協力をお願い

御蔵島のエコツーリズムの研究を行っています。その一環として御蔵島に観光で訪れた方々を対象にエコツーリズムに関する調査を行うことになりました。お手数をおかけしますがご協力をお願いいたします。

◆性別 ①男性 ②女性 ◆年齢 ( ) 歳代 ◆住所 ( ) 都道府県

◆御蔵島への来島は何回目ですか。

① 1回目 ② 2回目 ③ 3回目 ④ それ以上 ( 回目)

◆御蔵島のことをどうやって知りましたか？

①インターネット ②テレビ・ラジオ ③雑誌 ④雑誌 ⑤旅行代理店 ⑤知人から ⑥その他 ( )

◆来島の目的をお聞かせください。(複数回答可)

①イルカウォッチング ②山歩き ③その他 ( )

◆御蔵島までの交通手段をお聞かせください

①東海汽船 ②東邦航空ヘリコプター (三宅島・八丈島・大島) から

◆何泊しましたか？(予定も含む)

① 1泊 ② 2泊 ③ 3泊 ④ 4泊以上

◆イルカウォッチングについて

ウォッチングサービスについて ①大変満足 ②満足 ③普通 ④不満 ⑤とても不満

理由 ( )

ウォッチングツアーの料金について 滞在中何回ウォッチングしましたか(予定含む)

① 安い ②ちょうどよい ③高い ① 1回 ② 2回 ③ それ以上 ( 回)

◆山ツアーについて

どちらのコースに行きましたか?(予定含む) ( )

山ガイドの内容について ①大変満足 ②満足 ③普通 ④不満 ⑤とても不満

理由 ( )

ガイドの料金について 滞在中何回山ツアーに行きましたか(予定含む)

① 安い ②ちょうどよい ③高い ① 1回 ② 2回 ③ それ以上 ( 回)

◆あなたが思う御蔵島の魅力はなんですか？(複数回答可)

①海 ②イルカ ③山 ④巨樹 ⑤動物 ⑥植物 ⑦歴史 ⑧人 ⑨文化 ⑩その他 ( )

◆御蔵島がエコツーリズムに取り組んでいることをご存知でしたか？

①知っていた ②島に来島してから知った。③知らない ④エコツーリズムの言葉自体を知らない

◆御蔵島のエコツーリズムに関するルールを知っていますか？

①知っていた ②島に来島してから知った。③知らない

◆御蔵島で気付いたこと、感じたことをご記入ください

( )

ご協力ありがとうございます。調査内容は学術研究の目的以外には使用・公表いたしません。

## 11.5 島民から見た観光客

島の人は観光客についてどう思っているのかを島民にインフォーマルに聞いてみた。

### 民宿経営者

「御蔵島に来る人は、いい人が多い。しかし、最近はふれあい広場で、夜に花火をし、立ち入りが禁止されているヘリポートに夜に入り込んでいる人を見かけます。昔のお客さんは、そういう人はいませんでした。」<sup>44</sup>

「民宿を経営して今年で 7 年目になります。古い家が好きなお客さんや女性一人でイルカを何回も見に来ているリピーターのお客さんが、多いですね。何回もイルカウォッチングに来ている女性のお客さんは、イルカウォッチングに使うお金は惜しみません。普段の生活は切り詰め、冬の間（イルカウォッチングのシーズンオフ）は、友達や同僚との飲食も控えてイルカウォッチングのためにお金を貯めていると言っていました。島に居る間は、昼は持参したカップメンを食べ、ウォッチング以外に島でお金を使ってくれません。ウォッチングは 1 泊 2 日で 3 回、2 泊 3 日で 5 回と可能なかぎり行っています。イルカと泳いでいると癒されると言っていました。あるお客さんは、イルカが夢に出てくると言っていました。」<sup>45</sup>

「イルカウォッチングの客はリピーターが多いが、リピーターも年齢とり昔ほどイルカウォッチングをやらなくなった。」<sup>46</sup>

### 商店主

「民宿に泊まっている人は、イルカしか興味がないから、宿の外にわざわざ出て、買い物はしてくれませんね。昔は、バンガロー（村営で、食事は付かない）の人は、うちで炭や食材を買ってくれていましたが、今は島の物は高いと思っていて、自分たちで持参してきています。もう少しお金を使ってほしいですね。」<sup>47</sup>

### 廃棄物処理業者

「観光客のほとんどはイルカにしか興味がない。御蔵島の自然があってイルカがいることをもっと知らなくてはならない。ゴミの捨て方一つが、エコツーリズムだ。御蔵島はエコツーリズムの島なのだから、ごみの分別にもっと気を使って欲しい。」<sup>48</sup>

島民の多くは、観光客について、良い感情を持っていて、島の大人だけでなく、子供もみな見ず知らずの観光客に「こんにちは」とあいさつをしてくれる。しかし、すべての島

---

<sup>44</sup> Nさん民宿経営者（女性）2012年6月2日インタビュー

<sup>45</sup> 民宿経営者Kさん（60代 女性）2012年3月30日インタビュー

<sup>46</sup> 民宿経営者H.Nさん（60代 男性）2012年5月30日インタビュー

<sup>47</sup> 商店主Mさん（女性）2011年11月2日インタビュー

<sup>48</sup> 廃棄物処理業者Iさん（男性）2011年11月4日インタビュー

民が観光客を歓迎しているわけではない。イルカウォッチング目的の観光客は、民宿とウォッチング船の事業者には多額のお金を落とすが、島の商店ではあまりお金を使わない。観光業へのかかわりの度合いによって、観光客にたいするまなざしも違ってくる。

## 第12章 御蔵島の変容

御蔵島がどう変わっていたのかを島で生まれ育ち、有吉佐和子の小説のモデルとなったK. Yさんに話を聞くことが出来た<sup>49</sup>。

三宅島と御蔵島の間に流れている黒潮の支流は、「海蔵<sup>うみくら</sup>」とも呼ばれている。作家の有吉佐和子は、1966年に御蔵島に3週間ほど滞在して、小説創作のための取材を行い、1967年から1年間、「文藝春秋」に小説『海暗』を連載した。『海暗』は、御蔵島に米軍射爆場の建設計画が持ち上がった騒動を中心に、昭和30年代の御蔵島の生活が描かれている。当時の御蔵島の生活は、大変厳しいものであった。小説の登場人物のモデルの一人であったK. Yさんは、東京の美容院に5年ほど働きに行ったあと、島に戻って結婚した。小説では、K. Yさんをモデルにした登場人物は、島の生活が嫌で島を出てしまうが、K. Yさんは、小説と違い島に残った。しかし、K. Yさんは、10年も20年も東京に戻りたかった

1966年に簡易水道ができるまで、島には水道がなかった。「昔は、孟宗竹の節をとった竹樋で沢から水を流していた。電気が通るまでは、カツオドリ（オオミズナギドリ）の油で灯りをともしていた。」と当時の暮らしの厳しさをK. Yさんは話してくれた。

御蔵島は、K. Yさんが何度も口にした「御蔵島がこんなになるなんて思ってもみなかった。」という言葉の通り島は変わった。インフラの整備によって、電気も水道も道路も出来、生活の不便さは解消されていった。K. Yさんは、もう何年も前から島を出たいとは思っていないと言っていた。

そして、御蔵島は、イルカウォッチングが本格的にはじまることにより大きく変わっていく。

### 12.1 産業構造の変化

イルカウォッチングがはじまる前までは、「島では、役場、郵便局、学校の先生、NTT、電力、工事関係しか飯が食えない」<sup>50</sup>とされていた。

イルカウォッチングが本格的におこなわれるようになり 御蔵島の産業構造が変わってきた。第3次産業である観光業が島の最大の産業になり、多くの人が従事している。

2005年の国勢調査によると御蔵島の15才以上の就業者数184人中、第一次産業（漁業）は3人、第2次産業は46人（内44人が建設業）、第3次産業は135人（内サービス業94

<sup>49</sup> K. Yさん 70代女性 2011年11月1日インタビュー

<sup>50</sup> 2012年3月28日インタビュー70代男性

人、公務 21 人）となっている。サービス業就業者の多くは民宿、ガイドなど観光に関する仕事に就いており、多くの島民が観光で生計を立てている。（三宅支庁 2011）

## 12.2 人口の増加

御蔵島は、イルカウォッチングが本格的に始まるまでは、過疎の島として、人口減少が危惧されていた。

1978 年の「御蔵島村総合振興計画」（御蔵島村 1978）では、人口の過疎化防止が、御蔵島村の大きな課題になっていた。振興計画には「1960 年以後の高度成長につれ、御蔵島村の人口は都市へと流失していき、特に青年層に人口の流失が顕著で、このため在村者人口は高齢化し、厳しい過疎の状態におかれることになった。1955 年以降の過疎化現象の進行が継続するものと仮定すると、20～30 年後に人口 100 人を割ることが予想される。転出者の U ターン促進を図るとともに、御蔵島発展に貢献し得る人材の導入を積極的に推進する」書かれている。

この人口 100 人を割ってしまうという予想は幸いなことに外れ、御蔵島は島嶼地域ではめずらしく人口が増加している。

イルカウォッチングが始まり、民宿やウォッチング船など島で働く場所が増えてきたので島内出身者の U ターンや島外出身者の I ターンが増えている。1975 年に 177 人まで減った人口が、2011 年には 316 人まで増加している。（平成 23 年 1 月住民基本台帳）

図 12.1 で分かるように、高齢化率も 13.9%と低く、三宅村の 36.1%を大きく下回っている。

年齢別人口でみると 0 才～14 才までの子供の比率も御蔵島村は三宅村の倍以上になっている。これは、U ターンしてきた島の男性と民宿に手伝いにきた女性が結婚した例が多く、御蔵島では出生率が高くなっているからである。15～19 才の人口が極端に少ないのは、御蔵島に高校がなく、15 才になると島の子供たちは、島をでて内地の高校に通うようになるからである。

	年齢構成	年齢階層別構成							
		0～	15～	20～	30～	55～	65才	計	高齢化
		14才	19才	29才	54才	64才	以上		率
御蔵島村	実数	63	5	44	115	45	44	316	13.9%
	構成比(%)	19.9%	1.6%	13.9%	36.4%	14.2%	13.9%	100%	
三宅村	実数	204	83	240	741	520	1011	2799	36.1%
	構成比(%)	7.3%	3.0%	8.6%	26.5%	18.6%	36.1%	100%	

図 12.1 御蔵島村と三宅村の年齢別人口構成 管内概要（東京都三宅島支庁 2011）より作成

<御蔵島村>

(平成23年1月1日現在)

人 口 316人

世帯数 175戸

男 168人

女 148人

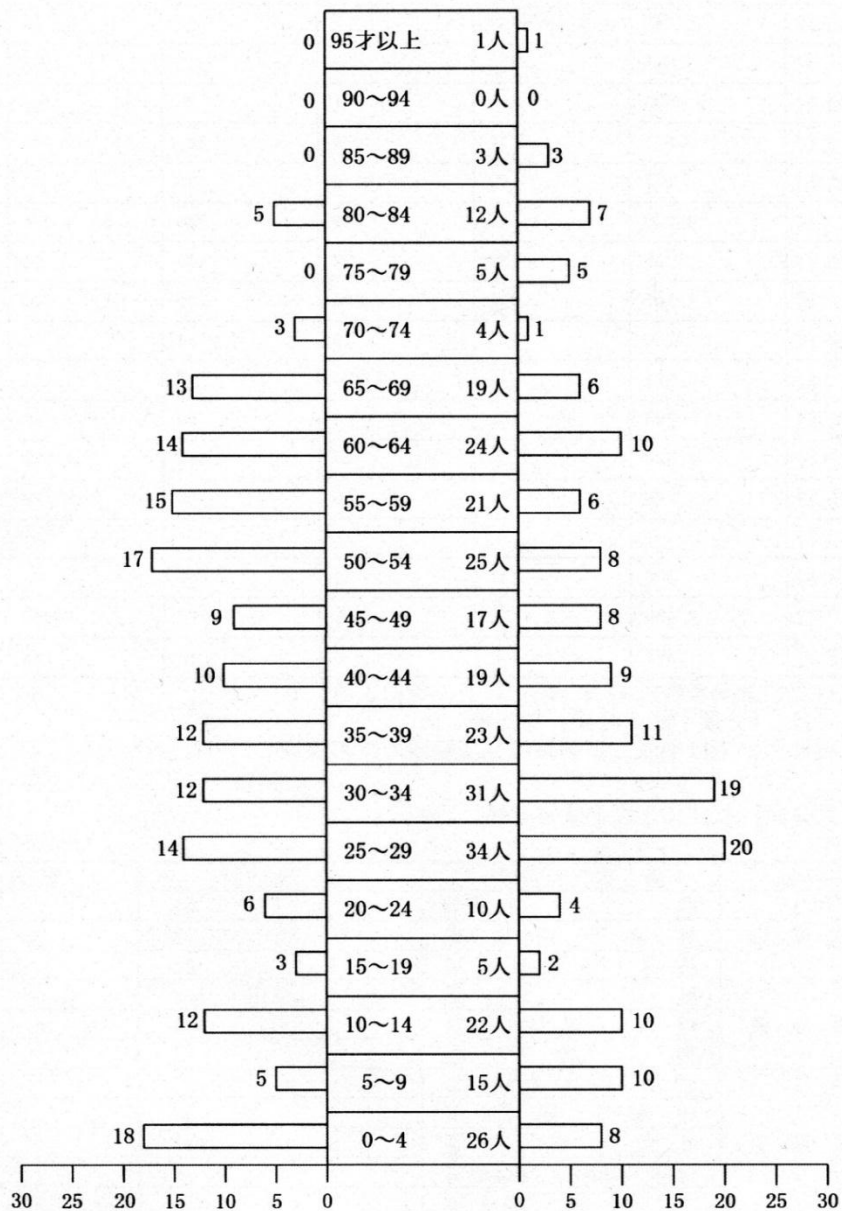


図 12.2 御蔵島村の年齢別人口構成

出展 管内概要（東京都三宅島支庁 2011）

### 12.3 島外出身者への意識

島外からの移住については、大正時代から昭和初期に、島根県隠岐から木炭製造や林業に従事するために入植した人々がいたが、これらの人々の多くは、太平洋戦争前に島を離れ、内地に戻ったといわれている。昭和40年代の全国的な離島ブームの頃は、御蔵島の人口は減少していったが、その後に、島内での建設工事や電気工事が盛んになるのと歩調を合わせるように、内地からの帰島者が増え始めた。N T Tや役場・学校・保育園などの職場には、内地からの就職希望者が増えていくことになった<sup>51</sup>。役場のK. Tさんの話では、役場の職員の半数は島外出身者だという。また、永住という形ではないが、教職員も島外出身者が多い。

昭和30年(1955年)頃までは島内婚ばかりで、近隣の人たちの口利きで、まとまるが多かった。(小島2007)

イルカウォッチングが始まると島外からイルカの研究および民宿に手伝いに来ていた女性が島の男性と結婚することも多くなった。

民俗学者の小島孝夫(2007)によると、島外出身者を指す「ガイジン」という言葉や、島外出身者との子供を「ハーフの子」という言葉が以前は使われていたという。しかし、郷土史家で御蔵島島史の編纂に関わってきたK. Iさん(60代)は、「そういう言葉が使われていたら、御蔵島の社会は成り立たない。今では、島の若い人の大半が、島の外からきた女性と結婚している。」<sup>52</sup>と言って、「ガイジン」「ハーフの子」という言葉の存在を否定した。

「御蔵島の民宿に手伝いに来ている女性は、イルカの調査などで来た大学生などが多く、その女性たちが島の男たちと結婚している。なかには、修士号を取って、島の男性と結婚し、島に住んでいる女性もいる。不便で、プライバシーもない島が、なぜ好きなのか分からないが、島にとっては、若い女性が増えるのは良いことだ。また、島に若い看護婦(看護師)が来ると島の若い者に結婚を勧めている。島にわざわざ来る看護婦は意識が高いからいい嫁さんになる。しかし、島の外から来た、教師と看護婦が結婚することも多いので、島の若い者に頑張るようにはっぱをかけている。今のところ、2勝4敗で負けている。」<sup>53</sup>とK. Iさんは言っていた。

調査期間中に、筆者は、島内出身者が、島外出身者にたいして、差別的な「ガイジン」「ハーフの子」という言葉を使っているのを聞いたことはなかった。

島でお土産と軽食を提供しているF商店の奥さん(30代、島外出身)が「島では、自分の子供だけでなく、よその子供もつれて食べにくるので、誰の子供なのか分からなくなることがある。」<sup>54</sup>と話してくれた。島では、みんなで子供を育てていると言っていた。小さ

---

<sup>51</sup> 御蔵島(2006) pp. 1200

<sup>52</sup> K. Iさん(60代男性)2012年3月29日インタビュー

<sup>53</sup> K. Iさん(60代男性)2012年5月31日インタビュー

<sup>54</sup> 2012年3月29日インタビュー



い子供は、ほとんど島外出身者との子供である。現在の御蔵島の社会は、K. I さんが言っていたように、「ガイジン」「ハーフの子」などの差別的な言葉を使っているとは成り立たない。

## 第 13 章 御蔵島エコツーリズムの課題

### 13.1 オーバーユースについて

御蔵島の観光協会の K. K さんは、御蔵島には自分で調べて島に本当に来たい人だけ来てほしいと言っていた。旅行代理店を通しての観光客は来てほしくないと言っていた。御蔵島の観光協会は他の観光協会と違い、観光客数を増加させるためのマストツーリズムを否定しているように感じた。御蔵島では宿泊の収容人数が少ないため多くの宿はハイシーズンの予約がすぐに埋まり、宿によっては予約を抽選にしている。

観光客特に滞在中に数回ウォッチングするヘビーウォッチャーの増加はウォッチングのべ人数の増加につながり、出船数も増加する。イルカウォッチング船の出船数が 1 日の最大数の 30 隻に達する状況が続けば、現在は行われていない 2 回目の出船も抽選になる。1 回の出船により数万円の売り上げの違いが出れば不満が出るだろう。また、自分の船の観光客にイルカを見せるため操船ルールを守らない船も出てくるだろう。現在船のルールを守らせるため監視船が出ているが監視業務の強化はさらに必要だろう。安全のために今年から導入された 8 名以上ウォッチャーを乗せるときはガイドをもう一人乗せるというルールは徹底させる必要がある。

モニタリングの結果をみると御蔵島のイルカの数には減少している。2006 年に 161 頭識別されていたイルカが、2011 年には、111 頭に減少している。御蔵島にいたイルカの内何頭かは同じ伊豆諸島の利島に移っているのが確認されている。小規模ながら利島でもイルカウォッチングが行われている。ガイドの H さんは、利島の人から「いつまでもイルカで殿様商売をしていると利島に客を持って行かれるよ」と言われたという。

イルカは野生動物で自然界の資源であるため無主性という特徴があり、その利用権や所有者が決められているものではない。(秋道 2010)

御蔵島でイルカの個体識別されたイルカであっても利島に移ればそれは御蔵島のイルカではなく、利島の自然資源となる。

ユネスコの世界自然遺産に選定され、縄文杉という象徴的な自然資源を持つ、屋久島では観光客のオーバーユースが大きな問題になっているが、入域制限は行われていない。2011 年屋久島で入域制限を主張していた町長を破った新町長は、縄文杉への入域制限を凍結した。縄文杉への入域制限は経済的に大きな影響を与えるため、町民の支持は得られなかった。

御蔵島では、屋久島と違い東京都版エコツーリズムを導入した際にルールが決められ、海域・陸域ともツアー参加者の人数制限、入域制限が定められている。ツアー参加者の増

加は経済的な利益につながるが敢えて、自然資源の保全のため制限を設けている。

陸域は観光客の人数が少ないので、問題はないが、海域については現在の人数制限が妥当なのだろうか。イルカの減少の直接的な原因は不明ということだが、ウォッチング客の増加が影響しているとしたら、さらなる制限が必要となる。

イルカウォッチングが島の最大の産業となっている現況において経済的利益の減少につながる、ウォッチング船の隻数の削減は、事業者からの反対が大きい。また、同じ海域でイルカウォッチングを行っている三宅島との調整が大きな課題となっている。

## 13.2 観光客へのエコツーリズムの浸透

エコツーリズムを推進するためには、ガイドだけでなく、観光客にもエコツーリズムのルールを熟知させなくてはならない。筆者は御蔵島のエコツアーに6回参加したが、ガイドからツアーに入る前にエコツーリズムのルールの説明は受けなかった。筆者は埼玉県飯能で6回エコツアーに参加したが、どのガイドもツアーを行う前にエコツーリズムのルールの説明を行っていた。筆者が行ったアンケート調査では御蔵島の観光客のエコツーリズムの認知度は、リピーターが多いのに拘わらず高くはない。エコツーリズムの周知にはガイドの事前説明が求められる。

海域、陸域のエコツアーに参加する観光客は、ツアー参加ごとに協力金（保険料を含む）を納めている。滞在期間中5回イルカウォッチングに参加した場合は、1500円負担している。しかし、多くの観光客は、その協力金が何に使われているかを意識していない。

観光客は、イルカウォッチングという楽しみを購入するだけでなく、エコツーリズム推進する主体の一つで、御蔵島の自然環境を保全する役割の一翼を担っているという自覚を持つべきである。

## 第14章 御蔵島のエコツーリズムのまとめ

### 14.1 御蔵島のエコツーリズムはサステイナブル・ツーリズムといえるのか

エコツーリズムは、「環境保全」「地域振興」「観光振興」の3つの理念を同時に達成する施策として地域に導入され、地域ごとにその理念を咀嚼して、地域独自のエコツーリズムが推進された。御蔵島村は東京都版エコツーリズムという「環境保全」に重心をおいたエコツーリズムを導入し、御蔵島でその理念を咀嚼し、独自のエコツーリズムをつくりだした。地域振興、観光振興を環境保全に付随するものとして、エコツーリズムを捉えたため、他の地域では、実現が難しかった利用者制限を行うことが出来、自然資源の保全を図ることが出来た。また、土地の所有の問題で、外部資本が入ることが出来なかったことと、旅行代理店を介しないエコツアーが行われたことにより、観光による利益が外部に漏出することはなかった。イルカウォッチングが始まったことにより、新たな雇用が生まれ、島から出て行った若い人が戻ってきて、島の人口が増え、島の活性化が図れるようになった。

御蔵島の人たちは、イルカという自然資源がなくなったら御蔵島の社会が大打撃を受けることは、分かっている。御蔵島の山も魅力的な自然資源であるが、観光客の多くは、イルカウォッチングのついでに山のツアーに参加するのであって、御蔵島の山単独では、観光客の集客は難しい。

御蔵島村が東京都版エコツーリズムを導入したことで、三宅島に対してイルカウォッチングに関する優位性を獲得した。イルカという無主性の野生動物を優先的に利用できる観光資源に出来たことにより、島の中で新たな権益が生まれた。イルカウォッチングの権益が既得権益になり、オーバーユース対策であるウォッチング船の削減の障害になるようになる恐れはある。御蔵島の観光は、イルカという無主性の野生動物に支えられているという脆弱性を孕んでいる。

東京都版エコツーリズムという施策を導入したことにより、高いレベルのモニタリングが行われ、イルカの生息状況が継続的に把握できるようになっている。資源は過剰に利用されれば、疲弊し維持できなくなる。御蔵島のエコツーリズムがサステイナブル・ツーリズムになるためには、モニタリングによる科学的な資源管理とともに、オオミズナギドリやツゲという資源を厳しい規則で守ってきた御蔵島の歴史と文化が、イルカという自然資源の保全にどう生かされるかが鍵となる。

## 14.2 持続可能性をささえる正当性

エコツーリズムの意義を考えたとき、地域社会の持続可能性にどの程度寄与できるのか、また、自然資源の持続可能性にどの程度寄与できるのかというように、二つのレベルの持続可能性(前者に関しては、経済的持続可能性と、文化的・社会的持続可能性の二つがかわり、後者に関しては、自然環境の持続可能性がかわる)に対してどの程度意味を持っているのかということがある。

その二つのレベルの持続可能性を担保するためには、それを実現し、社会的にも他から承認される必要がある。その承認にかかわる問題として、正当性が位置づけられる。

つまり、地域社会の、経済的持続可能性や文化的・社会的持続可能性を実現しているというように、社会の側から、特に、当該の地域社会の側で承認されうるのかという正当性があり、一方で、自然資源の持続可能性を保証していると他から承認される正当性がある。

御蔵島は御蔵島周辺海域で行われるイルカという自然資源の持続可能性を保証していると他から正当性が承認されたのだろうか。

御蔵島周辺海域は、御蔵島のウォッチング船だけでなく、三宅島のウォッチング船、両島の漁船、ウォッチングを伴わない遊漁船などが活動している「関わりや権利が重層的に入り混じったコモンズ」であった。

日本では、古くから沿岸域の漁場利用秩序が形成されてきた。18 世紀前半の吉宗の時代には「山野海川入会」の概念が確立し、「磯猟は地付根付き次第也、沖は入会」と定められた。この場合の磯というのは、沿岸の浅瀬ということであり、村が共有して排他的に利用

することができた。沖の入会は共同で利用することをさすが、誰でも自由に使うことが出来たのではなく、二村あるいは三村のみに限られていて、数村のあいだで独占的な利用が行われていた。(秋道 1995)

三宅島と御蔵島の漁協は、御蔵島周辺海域の第 2 種共同漁業の漁業権をもっていて、たかべ、いそ魚の漁業をする権利が両島の漁協にはある。御蔵島周辺海域は、御蔵島と三宅島の入会ということが出来、両島によって、独占的に利用されてきた。

東京都版エコツーリズムが導入されるまでは、イルカウォッチングは両島の自主ルールで管理された「ルースなコモンズ」で行われていた。しかし、東京都版エコツーリズムが導入されることにより、イルカウォッチングについては、御蔵島主導で規則が決められ、「タイトなコモンズ」で行われるようになった。

御蔵島からの視点で見れば、自分たちの庭先ともいえる御蔵島の海でイルカウォッチングを行う場合は、当然御蔵島の言う通りにすべきだといえる。一方、三宅島の視点で見れば、もともとイルカウォッチングは三宅島が始めたもので、御蔵島は三宅島の真似をしたただけだともいえる。もともと御蔵島にとって資源として認識されていなかったイルカをイルカウォッチングというはたらきかけをし、資源化したのは三宅島である。秋道 (2010) が述べているように自然界の資源であるイルカは、無主であり、その利用権や所有権はあらかじめ決められているものではない。

三宅島からみれば、共同漁業権もあり、昔から漁業を行ってきた御蔵島周辺海域で、自分たちが先に始めたイルカウォッチングを自由に行う権利は、主張できるものだった。

三宅島が始め、御蔵島が追随したイルカウォッチングがもたらす地域経済への影響の度合いは両島で大きく違った。三宅島は、御蔵島からみれば、大きな島で、漁業、観光産業も盛んで豊かな島であった。三宅島において、御蔵島周辺海域で行うイルカウォッチングは、ダイビングの選択肢の一つであった。三宅島観光協会では、イルカウォッチングしか行わない観光客には御蔵島を勧めていた。しかし、御蔵島にとっては、イルカウォッチングは島の最大の産業で、島の社会まで変えてしまう存在になっていた。

三宅島によって資源化された、イルカであるが、イルカが御蔵島に棲息しているのは、御蔵島が守ってきたイルカに適した自然環境があるからである。オオミズナギドリや豊かな森林とつながることで、イルカの棲みやすい海域でき、それを御蔵島の人が長い間、守ってきた。

イルカという自然資源の持続可能性を保証するためには、かかわりの強い御蔵島がイルカウォッチングにおいて主導権を握る正当性はあると言える。

御蔵島は、東京版エコツーリズムの導入により、自然資源の持続可能性のありかたに、他から承認されるべき正当性を持たすことが出来るようになったのである。

また、御蔵島のエコツーリズムは、地域社会の経済的、文化的、社会的持続可能性にかかわり、島民の人たちにとって意味あるものとなった。それを担保するといえる正当性を、御蔵島の人たちは、三宅島との関係の中で獲得し得たと言える。そのことが、サステイナ

ブル・ツーリズムとしてのエコツーリズムにおいて大変重要になると考えられる。

しかし、宮内（2006）が述べているように、正当性は、不変で普遍なものでなく、地域、時代によってドラスティックに変化する。御蔵島が獲得した正当性も常に問われ続けられるものである。

## 15 章 比較事例としての飯能市のエコツーリズム

本研究では、埼玉県飯能市のエコツーリズムの取り組みを御蔵島のエコツーリズムの比較事例として取り上げることにした。

御蔵島の地域社会の経済的持続可能性、文化的・社会的持続可能性の問題をよりクリアにするために、里地里山を観光資源とする「日本型エコツーリズム」の代表的な事例として評価されている飯能市におけるエコツーリズムを検討することにより、エコツーリズムにおける「持続性」のあり方、その中身などについて、より詳細な検討を行いたい。

### 15.1 事例地（飯能市）の調査方法

2010 年 11 月～2011 年 9 月の期間に飯能市においてフィールドワークを行い、6 回のエコツアー参加による参与観察、行政、関係団体への聞き取り調査、資料収集を行った。

### 15.2 飯能市の概要

飯能市は埼玉県の南西部に位置し、東は狭山市と入間市、南は東京都青梅市と奥多摩町、西は秩父市と横瀬町、北はときがわ町、越生町、毛呂山町、日高市に接している。

地形は山地、丘陵地、台地に分けられ、北西部は山地で、市域の約 76 パーセントを森林が占めている。南東部は丘陵地および台地で、北の高麗丘陵と南の加治丘陵の間の台地部分に市街地が発達している。さらに、入間川、高麗川の一級河川が、西部山地から東部台地へと流下している。気候は、太平洋側の内陸型気候で、山間部は季節による気温の変化が激しく、降水量は埼玉県内でも多い地域となっている。昭和 29 年（1954 年）に県下 9 番目の市制を施行、古くは林業と織物のまちとして栄えました。昭和 40 年代からは宅地化が進展し、高校や大学、工場などの立地も進み、首都圏の近郊住宅都市として変化していった。平成 16 年（2004 年）には旧名栗村と合併、県内 3 番目という広大な面積を持つ市となった。都心から約 50Km 圏内に位置し、交通アクセスも良好な環境にありながら、緑と清流という自然に恵まれた飯能市は、古くから豊かな森林と人との共生によって、人々の暮らしや文化・歴史、産業が育まれてきた。こうしたことを背景に、平成 17 年（2005 年）4 月 1 日に「森林文化都市」を宣言し、自然と都市機能が

調和した、暮らしやすい都市を目指したまちづくりに取り組んでいる<sup>55</sup>。



面積：193.18 km<sup>2</sup> 海拔：最高 1,356m、最低 71m 広ぼう：東西 24.81 km、南北 20.81 km  
人口：82,150 人 世帯：33,282 世帯（2012 年 7 月 1 日現在）

図 15.1 飯能市の概要 出展飯能市ホームページ <http://www.city.hanno.saitama.jp/>

### 15.3 エコツーリズム導入の経緯

飯能市では、豊かな自然資源や歴史文化資源、地域の個性ある生活・習慣などを生かし  
ながら、地域の活力や経済の振興につなげていくためには、エコツーリズムの導入が重要  
な手段と考えた。

2004 年に環境省が進めるエコツーリズム推進モデル事業の「里地里山の身近な自然、地  
域の産業や生活文化を活用した取組み」に応募し、エコツーリズム推進モデル地区の指定  
を受けた。モデル地区の指定を受けて、学識経験者、自治体等の代表者、農林業・商店街・  
観光業者の関係者、自然保護や環境保全活動をしている者等を委員として「エコツーリ  
ズム推進協議会」<sup>56</sup>を設置し、市役所内にもエコツーリズム推進室が設置された。2008 年には  
「飯能市エコツーリズム推進協議会」が、エコツーリズム大賞<sup>57</sup>を受賞した。

飯能市においては行政主導でエコツーリズムが導入されたが、現在では地域住民や地域  
の NPO などの主催により多くのエコツアーが実施されている

飯能市のエコツアーは、身近な自然や地域の人々が持っている生活の知恵、衣食住の技  
術などの「宝物」を地域の人達と一緒に掘り起し、エコツアープログラムを開発している。  
(大野 2010)

地域にとって自慢できるものは何かを探し出し（真板は宝探しと呼んでいる）、エコツア  
ーの資源としている飯能市のエコツーリズムは、真板らが提唱する日本型エコツーリズム  
を具現化したものと呼ぶことができる。

<sup>55</sup>飯能市ホームページ <http://www.city.hanno.saitama.jp/>

<sup>56</sup> エコツーリズム推進法認定団体第一号（2009 年 9 月認定）

<sup>57</sup>環境省エコツーリズム推進事業の方策として 2004 年度に開始された表彰制度

#### 15.4 飯能市のエコツーリズムの取り組み

飯能市では行政主導でエコツーリズムが導入され、導入後も行政がエコツーリズムの推進に大きな役割を担っている。エコツーリズムの推進のために市役所にはエコツーリズム推進室が設置されている<sup>58</sup>。エコツーリズム推進室は室長と担当者2名が所属し、エコツーリズムの推進のため広報・情報発信活動、人材育成（エコツアーガイド育成のエコツーリズムオープンカレッジを開催）、エコツアーの「事前協議制度」「モニタリングシート」によって基本方針などに適合したツアーが実施されているかをチェックしている<sup>59</sup>。

エコツアーの集客においても、エコツーリズム推進室は大きく関わっている。ホームページによるエコツアーの告知、参加経験者への案内状、ツアーパンフレットの作成や地元新聞などを使った広報事業は、エコツーリズム推進室が行っている。

#### 15.5 飯能市のエコツアーはどのように行われているのか

飯能市のエコツアーは、大野（2010）が述べているように身近な自然や地域の人々が持っている生活の知恵、衣食住の技術などの「宝物」を観光資源として行われている。生活文化、歴史文化を観光資源とするエコツアーでは、「古民家で草餅づくり」「下名栗諏訪神社の獅子舞伝統文化と歴史にふれる旅」などのツアーが行われている。

飯能のエコツアーの対象地のほとんどが、都心から1～2時間という立地のため宿泊を伴った滞在型の観光は難しく、ほぼすべてのツアーが日帰りのツアーになる。

エコツアー数、参加者とも年々増加し、2009年度は市内の住民団体やNPOなどが企画したエコツアーが75ツアー実施された。（図15.2）

行われているツアーの大部分が半日のツアーで、参加費1000～2000円で行われており、平均参加人数は、2009年度は15.6人であった<sup>60</sup>。

2009年度のエコツアーの参加者60才以上が40%、40～59才が33%、40代以上の参加者が全体の73%を占め、ツアー参加者の年齢層は高くなっている。

---

<sup>58</sup> 2012年4月1日現在

<sup>59</sup> 2010年12月20日飯能市0主査インタビュー

<sup>60</sup> 飯能市エコツーリズム推進協議会（2010）「平成21年度飯能市エコツーリズム推進事業報告書」

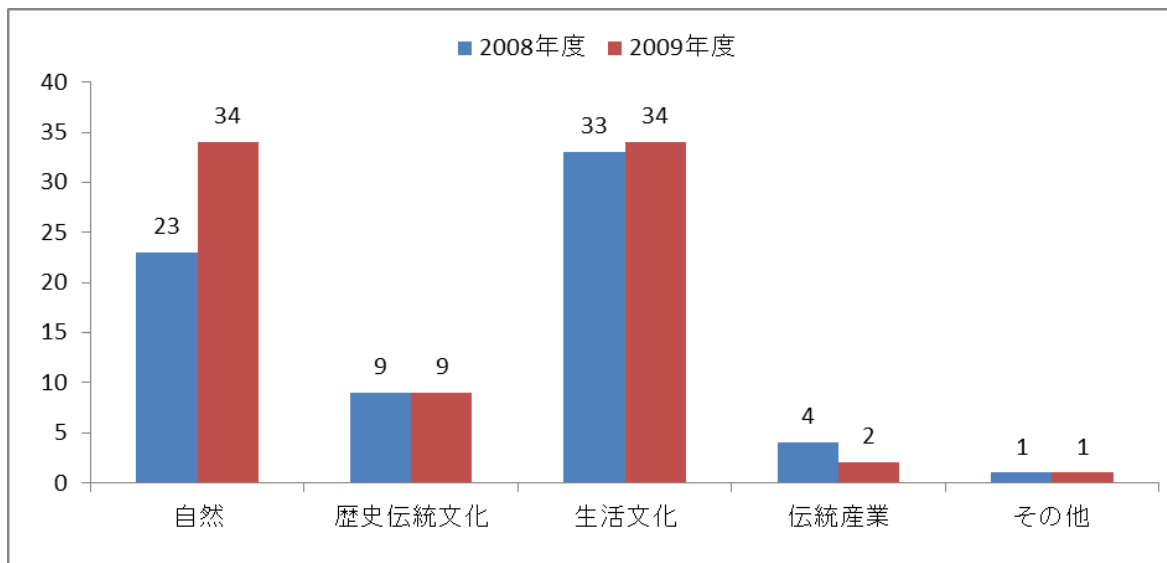


図 15.2 エコツアー数と参加者の推移

平成 21 年度飯能市エコツーリズム推進事業報告書より作成

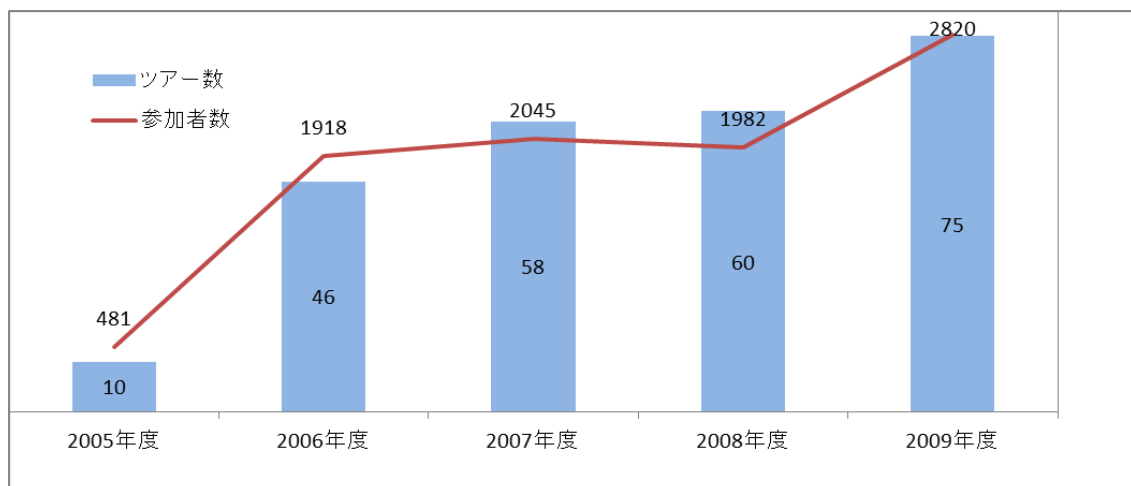


図 15.3 類型別エコツアー

平成 21 年度飯能市エコツーリズム推進事業報告書より作成



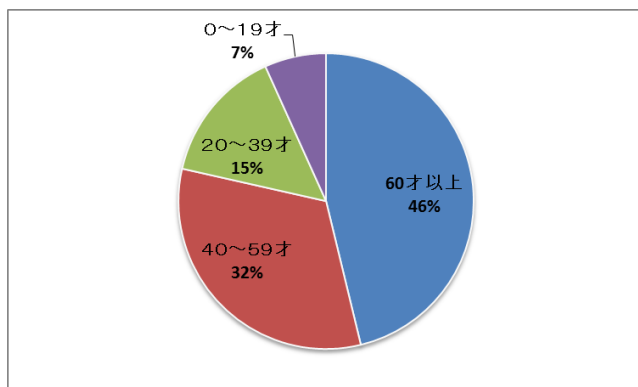


図 15.4 2008 年度ツアー参加者年齢構成比 N=489

平成 21 年度飯能市エコツアーリズム推進事業報告書より作成

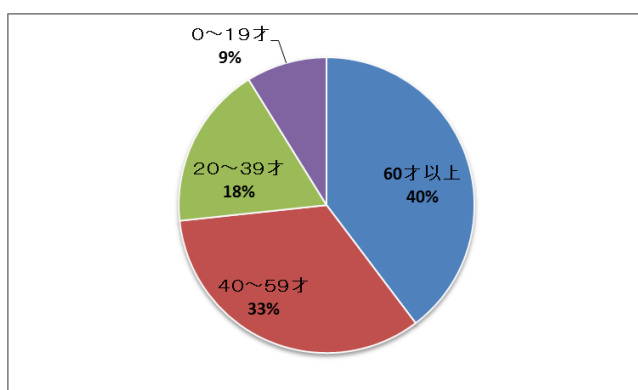


図 15.5 2009 年度ツアー参加し年齢構成比 N=622

平成 21 年度飯能市エコツアーリズム推進事業報告書より作成

### 15.5.1 ガイドについて

飯能市のエコツアーのガイドは、特別な資格は必要とされていない。飯能市では、エコツアーリズムの基本方針の一つとして「すべての地域と住民の参加」を掲げ、専門的な知識や技術を持つ人だけでなく、誰もがガイドになれるエコツアーリズムを目指している。(大野 2010)

実際にガイドとしてエコツアーを実施しているのは、市が主催したオープンカレッジ<sup>61</sup>の終了者で構成された「活動市民の会」のメンバーやNPO団体のメンバーなどが行っている。(大野 2010)

<sup>61</sup> 地域の人が地域の言葉で地域をガイドするという趣旨で2005年から年に1～2回開催されている。

## 15.6 飯能市のエコツアーの参与観察

筆者は、飯能市で開催されたエコツアーに 6 回参加し、参与観察を行った。参加したエコツアーは、里山の自然（天覧山周辺の谷津田）を資源とするツアー、生活文化（湧水、吾野宿）を資源とするツアー、伝統文化（福德寺阿弥陀堂、下名栗諏訪神社の獅子舞）を資源とするツアーである。

参加したエコツアーの主催は活動市民の会、地元の団体（虎秀やまめクラブ、下名栗手話神社獅子舞保存会）であった。

本稿では参与観察として、飯能市の虎秀やまめクラブの主催したエコツアーと 2009 年度、一番多くのエコツアーを開催した団体<sup>62</sup>である活動市民の会の主催した、エコツアーを取り上げることにする。

### 虎秀やまめクラブ主催のエコツアー「福德寺阿弥陀堂と虎秀谷津めぐり」

このエコツアーは、2010 年 11 月に行われ、主催者の虎秀やまめクラブは、西川林業地のある虎秀地区でハイキングコースの整備などの美化活動事業を行っている森林ボランティア団体である。

当日は西武鉄道池袋線の東吾野駅前広場に午前 9 時 40 分に集合し、エコツアーをはじめる前にガイドの K さん（50 代男性）から、飯能市のエコツーリズムの取り組みとエコツアーの注意事項の説明があった。参加費は 1500 円で昼食は各自で用意した。参加人数は 8 名で、50 代 60 代が多かった。

このツアーは、飯能市の勧めにより主催者がはじめて行ったエコツアーであったため、当日は市のエコツーリズム推進室から M 室長と「飯能市エコツーリズム推進事業報告書」の編集を担当している財団法人 日本生態系協会の S さんがオブザーバーとして参加した。

駅から 20 分ほど歩いて、最初の見学場所の福德寺に到着した。

当日は、福德寺では埼玉県指定重要文化財の福德寺阿弥陀堂の御開帳があったため、檀家の方と一緒に地元の郷土研究家から福德寺の建築上の特徴などかなり専門的な説明を受けた。そのあと地元で採れたひのきなめこの味噌汁がふるまわれた。昼食後、寺の住職と般若心経を参加者全員で唱え、その後抹茶と菓子がふるまわれた。

福德寺を見学した後、西川林業地に行き、ガイドの K さんが、間伐が行われている区域と間伐の行われていない区域を案内し、林業のおかれている問題点の説明を行った。

間伐をして手入れをしているヒノキ林の木は幹が太く商品となるが、手入れをしていない林の木は幹が細くて商品にならない。実際の林の状態を見比べると一目瞭然であった。しかし、外国産の木材の影響で間伐などの手入れをした林のヒノキでも商品としての価格は低く、東吾野地区でも昔は何か所もあった製材所が今は 1 か所になっていると K さんは話していた。

---

<sup>62</sup>飯能市エコツーリズム推進協議会（2010）「平成 21 年度飯能市エコツーリズム推進事業報告書」

ヒノキ林の中でひとときわたい幹の木があり、これは経済的に困窮したときこの木を売ってしのぐ（保険になる）という説明を聞き、地元の伝統的な生活知が今も生きていると感じた。

また、ムササビは可愛い動物とされているが、林業者にとっては、ヒノキの芽を食べる害獣でしかなく、昔は一匹獲って森林組合に持っていくと 500 円貰えたという話をKさんはしてくれた。

林業地のあとはガイドのKさんの家に寄り、Kさんの畑で採ったこんにゃく芋から作ったこんにゃくを全員で食し市販のこんにゃくと味の違いと確かめた。

Kさんの家から解散場所である東吾野駅に行く途中、福德寺に用意されていたヒラ茸と菊芋のお土産が参加者全員に配られた。

エコツアー終了時にエコツーリズム推進室が作成したアンケートを参加者はM室長に提出し、午後 2 時 30 分にツアーは終了した。

参加者は、募集定員の 15 名に対して 8 名と少なかったが、エコツアーの内容は、充実していた。ガイドのKさんが、虎秀の出身で子供のころから慣れ親しんだ自然と文化を自分たちの言葉で語ることで、エコツアーの参加者は、それまで知らなかった地域の自然、文化を知ることが出来た。

市外の参加者だけでなく、市内の参加者も飯能の都市部の在住で、ほとんど山間部である吾野や虎秀のことは知らなかったようである。

このエコツアーは、大野（2010）が述べているように、身近な自然や地域の人々が持っている生活の知恵、衣食住の技術などの「宝物」を地域の人達と一緒に掘り起すというプログラムが組まれていた。

### **活動市民の会主催のエコツアー「飯能の湧水を訪ねるお散歩ツアー」**

このエコツアーは 2011 年 6 月に活動市民の会が主催し、ガイドは T. I さん（男性 60 代、昆虫写真家）、K. I さん（女性 60 代、何回かこのツアーに客として参加していたが今回はガイドとして参加）、K. A さん（女性 50 代、湧水ツアーのガイドの経験者）の 3 名であった。

エコツアーの参加費は、大人 1000 円、子供 500 円で、募集定員 20 名に対し、参加は 16 名であった。参加者の居住地は、飯能市内 11 名、市外 5 名（内県外 2 名）であった。このエコツアーもオブザーバーとして飯能市エコツーリズム推進室の T. A さんが参加した。

湧水のツアーは年 2 回実施されており、毎回定員に達する人気のツアーであるが、今回は雨天によるキャンセルが発生したため実際の参加者は定員を割り込んだ。

午前 9 時 30 分に西武鉄道池袋線の元加治駅前に集合、エコツアーをはじめる前にガイドから飯能市のエコツーリズムの取り組みについての説明が行われ、参加者に飯能市作成のエコツーリズムのパンフレットが配られた。ガイドからツアー中の注意事項が話された後、

参加者の簡単な自己紹介が行われた。

このツアーは平坦な道を歩くツアーのため年配の参加者が多かった。60代の参加者が多く80代の女性も1名参加。70代の女性は、孫（小学3年生）を連れて参加していた。2011年の2月のエコツアーで一緒だった60代のHさん夫婦も参加していた。

Hさんは参加動機をこう話してくれた。「飯能市の住宅団地に長年住んできたが、飯能のことはほとんど知りませんでした。定年して、時間が出来たので飯能のことをもっと知りたくなりエコツアーに参加することにしました。はじめて参加した時、アンケートに住所を書いておいたので市役所からエコツアーの知らせが届くようになりました。参加費が安いので、ほぼ毎週夫婦でエコツアーに参加しています。」

60代以上の参加者はHさんのような参加動機が多いと思われる。

今回のエコツアーは、湧水を訪ねるお散歩ツアーと銘打ってはいるが、訪ねる湧水は針江の川端のようなものではなく、元加治地区の池の湧水や道路わきの湧水を数か所まわるだけで、入間川の川べりの散歩に重点が置かれていた。昨年も同じツアーが行われ、その時は、民家の湧水を見せてもらったが、今回は民家に断られてしまったという。

ツアーの中頃に地元の郷土研究家のY. Sさんが加わり、自分で作ったパネルを使って入間川の橋の歴史を説明してくれた。

ツアーの後半にシイタケ栽培農家を訪ね、シイタケ栽培に関する一通りの説明を受けた。その後、シイタケ栽培農家でいなりずし・豚汁の軽い食事がふるまわれ、土産に生シイタケが参加者に配られた。

ツアー終了時に、エコツーリズム推進室のT. Aさんに参加者はアンケートを提出し、午前12時に元加治駅前ではツアーは終了した。

お土産・軽食がついて半日のツアーで、参加費1000円は安かったが、飯能の自然、文化を詳しく知りたい参加者には物足りさが残ったのではないかと思われる。

ガイドのTさんは、昆虫写真家であるため昆虫に関する説明は詳しく興味深く聞けたが、歴史の説明を行った女性のガイドが知識不足のためか、興味をそそられる説明をあまり聞くことは出来なかった。

地元のシイタケ栽培農家を訪れ、入間川の橋の歴史の説明を受けることは、参加者が地域を知ることにつながった。しかし、生活に密着した民家の湧水を見ることが出来なくなった状況では、エコツアーを充実させるためには、さらに地域の宝を見つけ出すことが必要だと考えられる。

## 15.7 飯能市のエコツーリズムの課題

飯能市は里地里山型のエコツーリズムのモデル地域として環境省の「エコツーリズム推進会議」で指定され2008年に環境省主催のエコツーリズム大賞を受賞したことで、飯能市のエコツーリズムの知名度は上がっている。

飯能市のエコツーリズムは、里地里山を資源としたエコツーリズム（日本型エコツーリ

ズム)の成功例として紹介されることも多く、2010年度飯能市は、エコツーリズムの取組を紹介するためJICA研修、自治体視察等16団体を受け入れている<sup>63</sup>。

しかし、飯能のエコツーリズムを持続可能な観光の一形態としてとらえると以下の課題が考えられる。

#### 15.7.1 行政に対する依存度

飯能市のエコツーリズムは行政主導で導入され、「飯能市エコツーリズム推進協議会」が全体構想の策定や事業内容のチェックなどを行い、行政が各種調整を行う事務局となって事業を推進している。

行政を中心とした推進組織は、地域住民が企画、実施するエコツアーにとって、安心感を与える。一方、エコツーリズムは地域振興などの公益性が大きいとはいえ、収益事業という面があり行政が永続的に事務局として直接かわり続けることには限界がある。(飯能市エコツーリズム推進協議会 2010)

エコツアーの告知のための販促費用などエコツーリズムの推進の財源の大半を行政に依存している状況では収益性のある事業の構築(観光業としてのエコツーリズム)は難しい。

国においても環境省の2011年度のエコツーリズム総合事業費が、行政刷新会議の事業仕分けにより計上見送りになってしまった。市が、永続的にエコツーリズム推進のための支援が出来るとは考えられない。

#### 15.7.2 観光事業としての収益性

飯能のエコツアーの対象地のほとんどが、都心から1～2時間という立地のため宿泊を伴った滞在型の観光は難しく、ほぼすべてのツアーが日帰りのツアーになる。

現在行われているツアーの大部分が参加費1000～2000円で行われており、平均参加数が15～16名で、ガイドなどのスタッフが3名程度ついている。ガイド一人当たりの報酬は、一日数千円にしかならず、ガイドにとってはボランティアレベルの報酬しか見込めない。また、飯能市のエコツアーは、滞在型のツアーでなく、日帰りのツアーのため、宿泊費や飲食代、土産物代などの経済波及効果は見込めない。

収益性を上げるためには、エコツアーの参加費を上げることが考えられる。2009年度、飯能市がエコツアーの参加者に対して行ったアンケート調査では、参加費については、約50%が「妥当」と回答し、約40%が「かなり安い」「やや安い」と回答している<sup>64</sup>。

現在の参加費の半日で1000～2000円は、アンケート結果から見ても安いと考えられるが、飯能のように里地里山を観光資源とするエコツアーの参加費は、いくらまで上げることが

---

<sup>63</sup>飯能市エコツーリズム推進室0主査 2010年12月20日インタビュー

<sup>64</sup>飯能市エコツーリズム推進協議会(2010)「平成21年度飯能市エコツーリズム推進事業報告書」

可能なのであろうか。

NPO 法人日本エコツーリズム協会が、首都圏で行った 2009 年度のアンケート調査によると 1 日のエコツアーの参加費の限度額は回答者の平均で年 7,355 円である。このアンケート調査の回答者の多くは、世界遺産である屋久島・知床などのツアーのガイド料を想定して回答していると思われ、飯能のエコツアーにそのまま当てはめることは出来ないが、参加費を上げる余地はあると考えられる。

### 15.7.3 ガイドの質

ツアーの満足度はガイドの質が大きく関係する。地域の森林ボランティアなどの団体が主催したエコツアーでは、ガイドが地元の自然・歴史・文化に精通していて本やネットでは取得できない興味深い話が聞くことが出来、エコツアーが地域の自然環境・文化の学習の場となりえる。

しかし、必ずしも地元の人が、身近な自然・歴史・文化を自分たちの言葉で語るガイドばかりではない。飯能のエコツーリズムは、大野（2010）が述べているように「専門的な知識や技術を持つ人だけでなく、誰もがガイドになれるエコツーリズム」であって、ガイドの特別な資格要件を設けていない。飯能市が主催するガイド研修の「オープンカレッジ」で 3 日間の講習を受ければ、飯能の自然や歴史・文化に精通していなくともエコツアーのガイドが行える。

ガイドの資格要件を設けていないので、ガイドのレベルが保証されていない。レベルの低いガイドが行うエコツアーは、当然参加者の満足度は低くなる。初めて参加したエコツアーが満足度の低いものだったら、他のエコツアーに参加しなくなり、エコツアー全体のリピーターの減少につながる。

## 15.8 飯能市のエコツーリズムのまとめ

里地里山を観光資源とする飯能市のエコツーリズムは、日帰り型で、ガイド料も安価に設定されているため、地域に雇用を生み出したり、観光産業を振興したりする経済効果は、期待できない。

飯能市のエコツーリズムを観光の直接経済効果だけでみるとエコツーリズムが地域振興に果たす役割は小さいが、他の産業への経済波及効果を生み出すことは可能である。

森林文化都市宣言した飯能市は西川材で建築した家に補助金等を与え西川材で建築することを奨励しているが、市民に西川材の良さが十分に認知されていない<sup>65</sup>。西川林業地においてエコツアーを実施することで、ツアー参加者に西川材のPRと西川材で家を建てることのメリットを訴えることが出来るようになる。

湧水のエコツアーで行ったように、地元のシイタケ栽培農家にツアー客を連れて行くことで、ツアー参加者に地元の特産物を知らせることが出来き、シイタケ栽培農家は、ツアー

---

<sup>65</sup> 2011 年 11 月 14 日エコツーリズム推進室M室長インタビュー

一参加者から消費者としての意見を聞くことが出来る。

飯能市のエコツーリズムは、ツアー単価を上げて、直接的な経済効果を上げることは難しいが、間接的な経済効果をさらに上げることは可能である。経済効果が、地域の産業に波及することにより、エコツーリズムに関心が薄かった市民からの支持が得られるようになる。

また、エコツーリズムを地域の価値の再発見の手段、エコツアーに参加することによって地域の自然に興味を持ち、自然保護活動の参加するきっかけづくりと捉えると、エコツーリズムは地域学習、環境教育の方策といえる。飯能市のエコツアーの参加者の年齢層は、高いので生涯教育の視点でエコツーリズムを捉えることも可能である。

飯能市のエコツーリズムを持続可能な観光としてのすすめるためには、直接的な経済効果を上げ、収益を生み出すことも必要だが、エコツーリズムの間接的な経済波及効果や地域学習・環境教育としての役割が地域住民に認知され、エコツーリズムの取り組みが地域住民に支持されることが重要になる。

## 第 16 章 結び

本研究では、エコツーリズムが、自然環境の保全と地域振興にどのように関わっているのかを御蔵島の事例で検証し、比較対象事例として日本型エコツーリズムを実践している飯能市を取り上げた。

御蔵島村と飯能市は行政が主導して、エコツーリズムという外部の論理を地域に導入した。しかし、御蔵島村と飯能市では、エコツーリズムの導入の背景は全く違うものであった。

御蔵島村は、地域の自然資源を保全し、地域の主力産業となったイルカウォッチングを持続的に行うための方策として、敢えて「自然保護」の比重の高い「東京都版エコツーリズム」を導入した。結果として、自然資源の過剰利用を抑えるためのルールを御蔵島村が独自に決めることが出来た。特に、三宅島との調整が難航していた、御蔵島周辺海域（イルカウォッチング）のエコツーリズムのルールづくりで、御蔵島が主導権を握れたのは、「東京都版エコツーリズム」を戦略的に利用したからだと言える。

エコツーリズムを導入することにより、専門家によるイルカの生息数のモニタリングが継続的に行われるようになりイルカの生息状況の変化を関係者が把握できるようになった。また、陸域の自然もエコツーリズムの資源となり、ガイドがツアー客を案内することによって、定期的に陸域の自然資源の状態の把握が出来るようになった。

御蔵島は、周辺海域に有史以前から棲みついていたが、長い間人間の干渉を受けてこなかったイルカをイルカウォッチングという働きかけによって資源化した。イルカが資源として認識されるまで、御蔵島周辺海域のイルカの詳しい調査は行われていなかった。イルカの生息数、行動は、把握されていなかった。イルカウォッチングが行われるようになっ

てから、外部の研究者が入り、イルカの個体個別認識、習性など多くのことが分かるようになった。イルカは、イルカウォッチングの観光資源として利用されるようになったが、資源化されることにより、資源管理がなされ、保全されるようになった。

しかし、イルカという資源を観光による過剰な利用を防ぎ、持続可能な「賢い利用」(2011 森重)を可能にするためには、「東京都版エコツーリズム」という外部の論理が御蔵島には必要だった。

御蔵島が、海域だけでなく陸域を含めた自然資源を対象としたエコツーリズムを導入したことにより、イルカだけでなく、イルカの餌が豊富な豊かな海を育む御蔵島の生態系が保全されるようになった。

御蔵島において、自然を守ることが主な目的の東京都版エコツーリズム(土居 2011)を住民が受け入れているのは、住民が、地域の変容を通して、自然資源の保全が、地域振興につながることを理解しているからである。

「東京都版エコツーリズム」は、東京都が作った仕組みであるが、御蔵島は、エコツーリズムという外部の仕組みを自分たちで十分咀嚼して資源管理戦略として活用し、自然資源の保全か、地域振興かという二項対立を回避している。

しかし、イルカウォッチングに支えられている島の経済基盤は盤石なものとは言えない。有史以前から御蔵島周辺海域に棲みついていたイルカが、これからも棲みつづけるという保証はない。

これまで御蔵島では、エコツーリズムのルールが資源の過剰利用を抑える役割を果たしてきたが、自然資源の保全のためには、さらに厳しいルールづくりが求められる

御蔵島でイルカウォッチングが本格的に始められるようになってから約 20 年、東京都版エコツーリズムを導入してから 8 年が経ち、御蔵島のイルカウォッチング業に権益が生じ、エコツーリズムを支えてきた関係者にも変化が生じている。

今後、御蔵島のエコツーリズムがサステナブル・ツーリズムとして機能するためには、エコツーリズムを支えてきた利害関係者間の調整を図りながら、自然資源の変化に対応する順応管理が出来るかが、課題となる。また、観光客が、イルカウォッチングにだけ関心を持つのではなく、エコツーリズムを推進する主体の一つとして関わることが求められる。

飯能市のエコツーリズムは、自然資源や歴史文化資源、地域の個性ある生活・習慣などを生かしながら、地域の活力や経済の振興につなげていくための手段として導入された。

飯能市の里地里山の身近な自然や自然を基盤として育まれてきた生活文化は、エコツーリズムの題材として大きな観光的な価値があると考えられた。(大野 2010)

飯能市のエコツーリズムは、御蔵島が導入した「東京都版エコツーリズム」のように自然資源の保全が第一目的でなく、地域振興が第一目的として導入された。

飯能の里地里山の自然資源は、御蔵島のイルカに代表される自然資源のように他の地域の自然資源と差別化できる特別なものではない。里地里山の自然資源にエコツーリズムの



題材として大きな観光的な価値を持たせるためには、さまざまな仕組みづくりと工夫が求められる。飯能市は、それを行政が主導して行っている。「飯能市エコツーリズム推進協議会」を設置し、全国に先駆けて、「飯能市エコツーリズム全体構想」をつくりあげた。集客のための販促活動も主として行政が行っている。

前述したように飯能市のエコツーリズムは行政への依存度が高く、経済収益基盤が脆弱であるという問題はあるが、行政が、地域振興の手段としてエコツーリズムを導入して定着させたことは評価できる。

2004 年に環境省が進めるエコツーリズム推進モデル事業の「里地里山の身近な自然、地域の産業や生活文化を活用した取組み」には、多くの自治体が、応募し、飯能市を含む 5 つの地区が、エコツーリズム推進モデル地区の指定を受けた。しかし、モデル地区に選定された 5 地区で現在（2012 年 7 月現在）も環境省のホームページからリンクするエコツーリズムのホームページの更新が続けられているのは飯能市だけである。ほとんどの地区が、数年前のホームページが掲示されたままで、エコツーリズムが継続して行われているかがホームページでは知ることは出来ない。

飯能市のエコツーリズムがサステイナブル・ツーリズムとして機能するためには、主体となる地域住民が中心となり、行政主導から地域主導の活動に変わることが求められる。

エコツーリズムの定義は、多様であるが、「環境保全」「地域振興」「観光振興」の 3 つの理念の実現を目指す観光のあり方という点は多くの定義のなかで共通している。

エコツーリズムの定義が多様であるように、エコツーリズムの観光資源となる自然資源も多様であり、屋久島、小笠原などに世界自然遺産レベルの自然資源から、飯能市のような里地里山のような身近な自然資源まで存在する。

当然、地域がエコツーリズムという論理を導入するに際しても、どの理念に重きを置くのかが違ってくる。御蔵島のように「環境保全」に重点を置いた地域と飯能市のように「地域振興」に重点を置いた地域では、エコツーリズムの取り組みは違ってくる。

エコツーリズムをサステイナブル・ツーリズムとして実現させるためには、鷲谷（2010）が述べているようにまずは基盤的な生態的状态の持続可能性を確保することが必要である。

御蔵島は「東京都版エコツーリズム」という仕組みを使ってそれを実現しようとしている。

飯能市は、エコツーリズムによる地域学習、環境教育により新しい自然保護活動につなげることで生態系の持続可能性を確保しようとしている。

松村（2009）が述べているように、エコツーリズムで掲げられている理念をそこに到達するために不断の努力が必要であることを示す倫理として捉えたと、エコツーリズムの理念や目的にたいして現状に問題が見つけられるのは当然である。

御蔵島のエコツーリズムも飯能市のエコツーリズムも現状では問題をかかえているが、公的な支援に依存することなく、地域住民、観光客などのステークホルダーが主体的に管

理にかかわり、新たな自然資源の管理の仕組みとして機能することが出来れば、サステイナブル・ツーリズムとしてのエコツーリズムが達成できるのではないか。

## 参考文献

- 秋道智彌（1995）『なわばりの文化史』小学館。
- 秋道智彌（2004）『コモンズの人類学』人文書院。
- 秋道智彌（2010）『コモンズの地球史』岩波書店。
- アマルティア・セン著 池本幸生訳（2011）『正義のアイデア』明石書店。
- 有吉佐和子（1968）『海暗』文藝春秋。
- 池田信道（1983）『三宅島の歴史と民俗』伝統と現代社。
- 石森秀三（2001）「21 世紀における自律的観光の可能性」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』国立民族学博物館 pp. 5-14。
- 石森秀三（2011）「観光文明史からみるエコツーリズム 緑の観光革命への期待」。
- 井上真（2001）「自然資源の共同管理制度としてのコモンズ」井上真・宮内泰介編『コモンズの社会学』新曜社。
- 井上真（2004）『コモンズを求めて』岩波書店。
- 井上真（2009）「自然資源『協治』の設計指針」室田武編著『グローバル時代のローカル・コモンズ』ミネルヴァ書房 pp. 3-25。
- 宇沢弘文（2000）『社会的共通資本』岩波書店。
- 薄木三生（2005）「環境教育を活用したエコツーリズムの展開」東洋大学国際共生社会研究センター『国際環境共生学』朝倉書店 pp. 59-76。
- 大澤健（2010）『観光革命 体験型・まちづくり・着地型の視点』角川学芸出版。
- 大村肇（1953）「伊豆御蔵島の扶持米制について」『地理学評論 26 巻 4 号』 pp. 135-144。
- 大野裕司（2010）「飯能市におけるエコツーリズムの展開」『国立公園（682）』国立公園協会 pp. 7-10。
- 小沢健市（2011）「観光政策」山下晋司編『観光学キーワード』有斐閣。
- 海津ゆりえ・真板昭夫（2004）「第二世代を迎えた日本型エコツーリズムの課題と展望に関する研究」西山徳明編『文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』国立民族学博物館調査報告 51 pp. 211-227。
- 海津ゆりえ（2011）「エコツーリズムとはなにか」真板昭夫・石森秀三・海津ゆりえ編『エコツーリズムを学ぶ人のために』世界思想社 pp. 21-31。
- 環境省編（2010）『平成 22 年版環境白書』日経印刷。
- 環境省編（2004）『エコツーリズム』日本交通公社。
- 菊地直樹（1999）「エコ・ツーリズムの分析視角にむけて」『観光社会学研究 5』 pp. 136-150。
- 鬼頭秀一（1996）『自然保護を問い直す』筑摩書房。
- 鬼頭秀一（1998）「環境運動／環境理念研究における「よそ者」論の射程」『環境社会学研究 4』 pp. 44-59。
- 鬼頭秀一（2007）「地域社会の暮らしから生物多様性をはかる」鷺谷いづみ・鬼頭秀一編『自然再生のための生物多様性モニタリング』東京大学出版会 pp. 21-38。

- 鬼頭秀一（2009）「環境倫理の現在」鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』東京大学出版会。
- 小島孝夫（2007）「地域社会の変容と共同体の再構築」『日本常民文化紀要 26』pp. 97-154。
- 佐々木宏茂（2005）「近代の観光と観光開発の課題」東洋大学国際共生社会研究センター『国際環境共生学』朝倉書店 pp. 47-58。
- 佐藤喜子光（2008）「マストゥリズムの行き詰まり」井口貢編『観光学への扉』学芸出版社。
- 佐藤仁（2008）「今、なぜ「資源分配」か」佐藤仁編『資源を見る目』東信堂。
- 敷田麻実（2010）「生物資源とエコツーリズム」『季刊環境研究 157』日立環境財団 pp. 81-90。
- 敷田麻実（2010）「持続可能な地域資源戦略」『季刊環境研究 158』日立環境財団 pp. 23-34。
- 敷田麻美（2011）「エコツーリズムにおける資源利用とその課題」敷田麻美・森重昌之編著『地域資源を守っていかすエコツーリズム』講談社。
- ジャック T・モイヤー著 天野雅男・天野あづさ共訳（1997）『御蔵島のいるか』海遊舎。
- ジョン・アーリ著 加太宏邦訳（1995）『観光のまなざし』法政大学出版局。
- 菅豊（2005）「コモンズと正当性」<sup>レジティマシー</sup>『環境社会学研究 11』pp. 22-38。
- 菅豊（2006）「「歴史」をつくる人びと 異質性社会における正当性の構築」<sup>レジティマシー</sup>宮内泰介編『コモンズをささえるしくみ レジティマシーの環境社会学』新曜社。
- 菅豊（2006）『川は誰のものか 人と環境の民俗学』吉川弘文館。
- 菅豊（2008）「環境民俗学は所有と利用をどう考えるか？」山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学』昭和堂 pp. 109-135。
- 土居利光（2011）「自然資源の保全と適正利用のための仕組みの検討」『観光科学研究 4』首都大学東京 pp.53-68。
- 関礼子（2012）「観光の環境誌 1」『応用社会学研究 2012 No.54』立教大学社会学部研究紀要 pp. 15-41。
- 東京都商工会議所「三宅島・御蔵島の産業と観光事情」1959 pp. 65-78。
- 東京都三宅支庁「三宅支庁管内概要」2011。
- 鶴見和子（1989）「内発的発展論の系譜」鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会。
- 中澤秀雄（2005）『住民投票運動とローカルレジーム』ハーベスト社。
- 西川潤（1989）「内発的発展論の起源と今日的意義」鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会。
- 鳥越皓之（1997）『環境社会学の理論と実践』有斐閣。
- 中島成久（2010）『森の開発と神々の闘争』明石書店。
- 橋口尚武（1986）「黒潮に生きる人々」森浩編『日本の古代第 2 巻 列島の地域文化』中央公論。
- 橋本和也（1999）『観光人類学の戦略』世界思想社。

飯能市エコツーリズム推進協議会（2010）「平成 21 年度飯能市エコツーリズム推進事業報告書」。

福永真弓（2010）『多声性の環境倫理 サケが生まれる変える流域の<sup>レジティマシー</sup>正統性のゆくえ』ハーベスト社。

古川彰・松田素二（2003）「観光いう選択」古川彰・松田素二編『観光と環境の社会学』新曜社。

細田衛士・横山彰（2007）『環境経済学』有斐閣。

真板昭夫・比田井和子・高梨洋一郎（2010）『日本型エコツーリズムとはなにか 宝探しから持続可能な地域づくり』学芸出版社。

松井健（1997）『自然の文化人類学』東京大学出版会。

松井健（1998）『文化学の脱＝構築』榕樹書院。

松井健（2004）「マイナー・サブシステムと日常生活」大塚柳太郎・篠原徹・松井健編『島の生活世界と開発 4』東京大学出版会 pp. 61-84。

松村正治（2004）「開発と環境のジレンマ」松井健編『島の生活世界と開発 3』東京大学出版会 pp. 71-100。

松村正治（2009）「エコツーリズムのしくみ」鳥越皓之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学』ミネルヴァ書房 pp. 30-32。

御蔵島村（1978）「御蔵島村総合振興計画」。

戸田光彦（2005）「オオミズナギドリ」御蔵島村役場『みくらの森は生きている』。

栗本一郎（2005）「御蔵島のむかし 人とくらし」御蔵島村役場『みくらの森は生きている』御蔵島村役場（教育委員会）（2006）『御蔵島島史』ぎょうせい。

三俣学・菅豊・井上真（2010）「実践指針としてのコモンズ論」三俣学・菅豊・井上真編著『ローカル・コモンズの可能性』ミネルヴァ書房。

宮内泰介（2001）「コモンズの社会学」鳥越皓之編『講座環境社会学 第3巻』有斐閣。

宮内泰介（2006）「レジティマシーの社会学へ」宮内泰介編『コモンズをささえるしくみ レジティマシーの環境社会学』新曜社。

宮本憲一（2007）『環境経済学新版』岩波書店。

森重昌之（2008）「エコツーリズムの誕生から現在まで」敷田麻実編『地域からのエコツーリズム』学芸出版。

森重昌之（2011）「エコツーリズムによる地域資源の保全と利用の戦略」敷田麻美・森重昌之編『地域資源を守って生かすエコツーリズム』講談社 pp. 196-203。

安村克己（2011）「マス・ツーリズムの出現とその弊害」安村克己他編著『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房。

山極寿一（2003）「コラム ゴリラのエコ・ツーリズム」古川彰・松田素二編『観光と環境の社会学』新曜社 pp. 243-245。

山下晋司（2009）『観光人類学の挑戦』講談社。

山村高淑（2011）「地域開発としての観光開発」山下晋司編『観光学キーワード』有斐閣 pp. 146-147。

吉田春生（2004）『エコツーリズムとマス・ツーリズム』原書房。

鷺谷いづみ（2010）「生態学からみた持続可能性」小宮山宏他編『サステナビリティ学 4 生態系と自然共生社会』東京大学出版会 pp. 9-34。

J・E・スティグリッツ C・E・ウォルシュ著 藪下史郎他訳（2006）『スティグリッツ ミクロ経済学第3版』東洋経済新報社。

NP0 法人日本エコツーリズム協会（2010）『第6回・2009年度「エコツーリズムに関する消費者ニーズ調査」』NP0 法人日本エコツーリズム協会。

NP0 法人日本エコツーリズム協会 <http://www.ecotourism.gr.jp/>

国際エコツーリズム協会（TIES）<http://www.ecoTourism.org/>

世界観光機関（UNWTO）<http://www2.unwto.org/>

世界旅行ツーリズム協議会（WTTC）<http://www.wttc.org/>

環境省 <http://www.env.go.jp/index.html>

観光庁 <http://www.mlit.go.jp/kankocho/>

飯能市 <http://www.city.hanno.saitama.jp/index.html>

御蔵島観光協会 <http://www.mikura-isle.com/>

御蔵島村役場 <http://www.mikurasima.jp/>

（財）日本自然保護協会（1994）「NACS-J エコツーリズム・ガイドライン」

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/ecotourism/1994/08/4.html>

## 謝辞

本研究をすすめるにあたり大変多くの方々にお世話になりました。

研究対象地した東京都御蔵島村のみなさまには、多大なご協力をいただき、厚くお礼を申し上げます。

みくらしま観光協会の小木さん、菱井さんには、来島するたびにいろいろなことを教えていただき、大変感謝しています。小木さんとの話のなかから、本研究の切り口を見つけることが出来ました。

御蔵島村役場の小林産業課長補佐には、忙しいなか何回も、応対していただき、貴重な資料を提示して頂きました。また、御蔵島の抱えている問題などをいろいろ教えて頂き大変参考になりました。

郷土歴史家の栗本一郎先生には、書籍では知ることが出来ない御蔵島の歴史、風俗などについてご教示いただきました。

調査の際に宿泊した、しげを工房、宿まるい、民宿鉄砲場、丁や、お宿にしかわのみなさまには、忙しいなか、イルカウォッチングのことや観光客のことなどいろいろな話をさせていただきました。特に丁やの栗本さんには、貴重な桑や黄楊の工芸品を見せていただくだけでなく、貴重な歴史民俗の書物を見せていただき感謝しています。

また、比較事例地として選定した飯能市の方々にも大変お世話になりました。特に飯能市役所エコツーリズム推進室の岡野主査、大野主査には忙しいなか、飯能市のエコツーリズムの取り組みについて語っていただき大変感謝しています。

研究面においては、指導教官である鬼頭秀一教授に多くのご指導をいただきました。学問の世界から長年、離れて過ごしてきた身には、大学院で研究を進めていくのは大変でしたが、鬼頭先生のご指導ご鞭撻のおかげで、修士論文を書き上げることが出来ました。2年間という短い期間でしたが、学問の楽しさを鬼頭先生に教えていただき、大変感謝しています。

また、研究室の先輩の岩佐さん、李さん、仁平さん、同期の岡田さんに、研究を進めるうえでの助言をいただきました。和やかな雰囲気の中にも厳しさがある鬼頭研究室でなければ、大学院生活は続けられなかったと思います。鬼頭研究のみなさまには本当に感謝しています。

そして、大学院進学という我儘に理解を示してくれた家族と大学院進学の相談にのってくれた友人に感謝しています。